

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 189

長 繩 手 遺 跡

県立備前高等学校産業教育施設
改築・体育館整備に伴う発掘調査

2005

岡山県教育委員会



遺跡遠景（南東から）



S A区遠景（南西から）

巻頭図版 2



竪穴住居 2 (北東から)



竪穴住居 3 (東から)



縦穴住居 2 爐（南西から）



縦穴住居 3 壁面（南東から）



土器 4 遺物出土状況（北西から）



集石遺構遺物出土状況（北東から）



S A区出土土器

卷頭図版4



井戸（北から）



B D 区出土土器

序

岡山県の南東に位置する備前市は、室町時代に播磨・備前・美作3国の中継として活躍した赤松氏の備前における拠点として重要な役割を果たすとともに、中世6古窯の一つに数えられる備前焼の生産地として今日まで栄えてまいりました。

このたび、県立備前高等学校の改築に伴い発掘調査を実施しました長縄手遺跡は、片上湾を望む位置にある縄文～江戸時代の集落跡です。ここに縄文時代中期末の集落は、屋内炉を備えた竪穴住居3軒のほか、6基の土壙や集石遺構、土器溜まりなどで構成されており、縄文時代集落の調査例に乏しい当県にあって貴重な資料となりました。また、古代～中世の集落からは縁釉陶器や灰釉陶器も見つかっており、美作国の国津として、あるいは備前焼の積み出し港として暇わった片上津との関連が想定されます。

本書が、この地域の歴史解明の資料として、また文化財保護の一助として活用されることを期待します。

最後になりましたが、発掘調査の実施や報告書の作成にあたっては、岡山県文化財保護審議会委員の先生方をはじめとして、備前市教育委員会や地元住民の皆様から多人な御協力をいただきました。記して厚くお礼申し上げます。

平成17年3月

岡山県古代吉備文化財センター

所長 正岡 瞳夫

例　　言

- 1 本吉は、県立備前高等学校の産業教育施設改築および体育館整備に伴い、岡山県古代吉備文化財センターが発掘調査を実施した、備前市西片上97に所在する長縄手遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 調査は、平成5年度（8月26～30日、9月6日～10月12日）にS A区（260m²）、平成11年度（10月4日～18日）にB D区（470m²）、平成14年度（6月14～25日、10月1日～3月31日）にS A・T A区（2,680m²）を対象として実施した。
- 3 調査は、平成5年度に亀山行雄、平成11年度に福本 明、平成14年度に平井泰男・福田正継・浅倉秀昭・澤山孝之が担当した。
- 4 調査にあたっては、備前市教育委員会 石井 啓氏、岡山県古代吉備文化財センター 江見正己氏の協力を得た。
- 5 調査記録・出土遺物の整理は、平成15年8月～平成16年3月に亀山が担当し、岡山県古代吉備文化財センターにて実施した。
- 6 本書に用いた高度は海拔高である。
- 7 本書に用いた方位は磁北である。
- 8 本書に収載した周辺遺跡分布図は、国土地理院発行1/50,000「和気」を複製して使用した。
- 9 本吉の執筆は、亀山が第1章・第2章第1節・第3章第1節、福田が第2章第2節、福本が第2章第3節を担当し、編集は亀山が行った。
- 10 本書の作成にあたり、縄文土器について高橋 護氏・京都大学 千葉 豊氏・同 富井 真氏・千葉大学 柳澤清一氏、縄文土器付着の赤色顔料について九州国立博物館（仮称）設立準備室 本田光子氏・志賀智史氏、石器の材質について倉敷芸術科学大学 妹尾 譲氏から有益な教示を受けた。また、富井氏からは縄文土器について、高橋氏からは植物珪酸体について玉穂を賜った。
- 11 本書の作成にあたり、遺物写真について江尻泰幸氏の協力を得た。
- 12 本書に係る調査記録・出土遺物の一切は、岡山県古代吉備文化財センター（岡山市西花尻1325-3）において保管している。

目 次

巻頭図版

序

例言

目次

第1章 序説	1
第1節 位置と環境	1
第2節 調査と整理の経過	4
1 経緯と経過	4
2 調査と整理の体制	5
第2章 調査の概要	7
第1節 S A区の調査	7
1 概要	7
2 遺構・遺物	7
第2節 T A区の調査	37
1 概要	37
2 遺構・遺物	39
第3節 B D区の調査	43
1 概要	43
2 遺構・遺物	43
繩文土器観察表	46
第3章 考察	55
第1節 繩文時代の遺構と遺物	55
第2節 遺構一括川土の繩文土器の位置づけ	64
第3節 長細手遺跡における栽培植物	73
図版	
抄録	

第1章 序 説

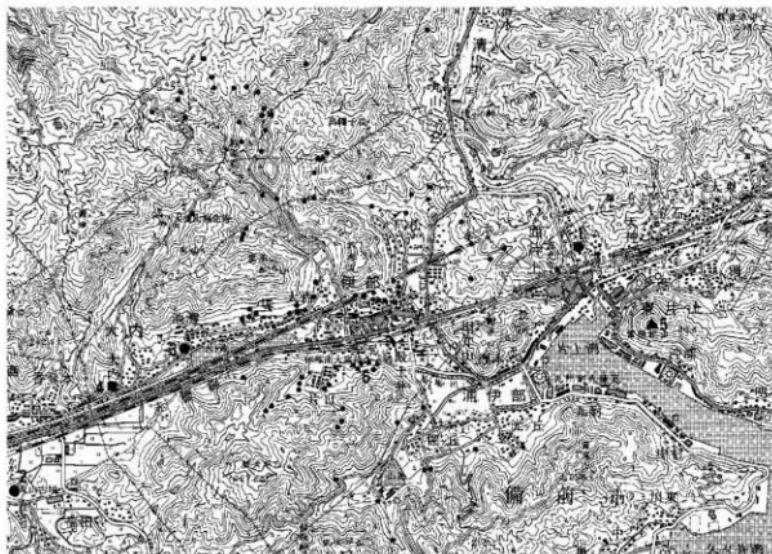
第1節 遺跡の位置と環境

長編手遺跡の所在する備前市は、岡山県の南東に位置し兵庫県と隣接する。東西に走る構造線に沿って狭隘な平野がのび、その北側には急峻な山塊が連なっている。流紋岩からなるこうした山塊には谷部が縱横に発達するとともに、ここから運ばれた風化土は良質な粘土となって平野に堆積し、アカマツを主体とする森林資源とも相俟って稲作生産に適した環境を提供した。一方、沈降性の沿岸部はリアス式の複雑な海岸線を描き、沖合に浮かぶ島々とともに瀬戸内海国立公園の一画として美しい景観を誇っている。また、内陸に深く入り込む片上湾は天然の良港としての条件を備え、長編手遺跡はその最奥部に注ぐ流川が形成した扇状地上に立地している。

こうした瀬戸内海沿岸部の丘陵上ではサヌカイトを素材とする旧石器がしばしば採集され、吉井川東岸でも長船町広高山遺跡や備前市亀井戸庵寺などが知られている。縄文時代に入ると吉井川の河口や島嶼部で貝塚が営まれるようになる。早期の押型文土器を作う黄島や黒島の貝塚は海進を示すものとして著名であり、住居状の遺構も検出されている。前期には邑久町の大橋貝塚や宮谷貝塚が形成されており、吉井川の河床で見つかった埋没林は当時の植生を示している。中期には長編手遺跡が営まれるが、臨海性の立地にもかかわらず漁労具は出土せず、かえって栽培植物の痕跡が認められている。後～晚期になると沖積化が進行し、備前市西畠田遺跡や邑久町黒島貝塚など低位部の遺跡が増加する。邑久町門田貝塚や備前市船山遺跡は弥生時代前期にはじまる代表的な集落跡であるが、中期後半には平野を取り巻く丘陵上にも集落が展開し、その数は一気に増加する。後期末の集落では島嶼部と似通った土器が使用されるようになり、四国系土器も多く搬入されるなど、記紀に見える吉備海部との関連が指摘されている。この時代の墳墓は、邑久町堂免遺跡で中期の円形周溝墓が確認されているほか、丘陵上の我城山1号墓では特殊壺片が採集されている。古墳時代の吉井川東岸では、西岸の浦間茶臼山古墳に遡れて長尾山古墳が築かれ、これに続いて花光寺山古墳、鶴山丸山古墳、船山古墳が造営される。中期後半に入るとその南に築山古墳が現れ、以後継続して金鷲塚古墳、亀ヶ原大塚古墳が築かれる。牛窓湾を中心とする沿岸部でも、牛窓天神山古墳、黒島1号墳、波歌山古墳、鹿歩山古墳、二塚古墳といった前方後円墳が造営されている。これらは吉備中枢に準じる規模を誇るとともに、規模や平面形を共有する古墳が並立に存在し、海上輸送や土器製塙などを基盤とする沿岸部地域と平野部の豊かな生産力を背景とする吉井川東岸地域の間に密接なつながりが想定される。6世紀にはじまった丘陵部での須恵器生産は次第に本格化し、奈良時代には須恵器の貢納品とされたこともあ



第1図 遺跡位置図 (1/2,000,000)



第2図 周辺遺跡分布図 (・は竪跡 1/50,000)

って、その製品は平城京でも出土している。この時期、吉井川東岸の南側に須恵庵寺が、統いて北側に服部庵寺が造営される。服部庵寺の創建瓦は中央官寺の川原寺式で、須恵庵寺にも採用されており、かつて吉備の中核を担った勢力とは異なる動向を見せており³。また、服部庵寺の東側にはやや近れて香登庵寺が建立されるが、この寺の瓦は備前国分寺と同型であり、その創建に深くかかわっていたものと思われる。郷名を負う香登臣は渡米系氏族である奈氏の後身で、近くに備前市内最大の横穴式石室をもつ池瀧古墳などがあることからすれば、この頃進出してきたものかもしれない⁴。当初、邑久郡に属していた片上地は、766年に藤野郡（後に和気郡と改称）へ編入されるが⁵、美作の国津として重要な役割を果たしており、藤野駅への途次にある長紐手遺跡の縄軸・灰軸陶器はこのことを物語る。この地域の山上には熊山遺跡のような石積遺構が点在し、平安時代には雲山寺や弘法寺・余慶寺など多くの山上寺院が建立される。平野部では、堀河天皇の頃に香登莊が開かれ、鳥羽院から八条院へと伝領されていく。この時代、須恵器牛座はやや下火になり、窯場も北側の備前市域へと移動する。伊部周辺で本格的な生産が始まるのは平安時代でも末のことであり⁶、この頃開かれた香登莊との関連が想定されている。鎌倉時代、備前国は東大寺再興の領所とされ、この周辺でも豊原莊の開発が進められた。また、和気町南部から備前市東部に広がる新田莊は、平氏没官領がそのまま幕府領とされたものと推定されている。この頃、山陽道は備前市内を抜ける南路に移ったようで、「一遍上人絵伝」には備前焼などを商う福岡の市の振わいが描かれている。南北朝時代には、播磨との国境に近い三石城をめぐって足利方と新田氏との間で激戦が繰り広げられ、熊山の靈山寺もこの時兵火に罹る。室町時代、備前・播磨の守護を兼任していた赤松氏が嘉吉の乱によって滅亡すると山名氏がこれにか

わるが、家名を再興し新田莊に入った赤松氏との間で福岡合戦が闘われ、備前は再び赤松氏の領するところとなる。備前守護代として一石城にあった浦上氏は村宗の代に強盛となるが⁶、その歿死後は次第に衰え、麾下にあった宇喜多氏がかわって勢力を延ばしていく。宇喜多直家は毛利氏の力を得て三村氏を滅ぼし浦上氏を追うと、織田氏に与して備中高松城に毛利氏と戦い、備前・美作を正式に領有する。直家は居城を岡山に移し、片上や福岡などの商人を招くなどして城下町の整備に努めた。鎌倉時代における備前焼の生産は熊山の山腹を中心に展開され、前代に引き続いて椀・皿などの食器が一定量生産されたが、室町時代になると窯は山麓に移って大形化し、製品も壺・甕といった貯蔵具や擂鉢のような調理具が主体となる。桃山時代には全長50mにもなる大窯が築かれ、折から抹茶の流行とも相俟って多様な器種が生産された⁷。関ヶ原戦後、備前・美作を領した小早川氏が早逝すると、池田輝政の次男忠繼、三男忠雄が相次いで備前に封じられるが、忠雄の死後は長男利隆の息光政が因幡から入封し、以後幕末まで続く備前藩の礎を築く。光政は、庶民教育の場として閑谷学校を開き、輝政・利隆の柩を移して吉永町和意谷に墓所を築く。また、その右腕として活躍した熊沢蕃山は市内蕃山に食邑を賜っている。江戸時代の備前焼は、白備前や彩色備前などを生み出したが、藩による統制を受けるとともに他产地の製品に押されて衰退していく。幕末には効率的な速戻式窯が導入されるものの、もはやその退勢を覆すことはできなかった。明治22年、西片上村は東片上村と合併して片上村となり、同34年には町制が施行されている。昭和26年には伊部町を併せて備前町となり、同46年の三石町合併によって備前市が誕生した。西片上には備前高等学校をはじめとする教育施設が集まり、行政機関が置かれる東片上とともに備前市の中心をなす。近年は人口の減少に悩まされながらも、今もなお窓の火を灯す備前焼を核とした新たな街づくりに取り組んでいる。

(亀山)



第3図 周辺地形図（網かけは遺跡推定範囲 1/5,000）

第2節 調査と整理の経過

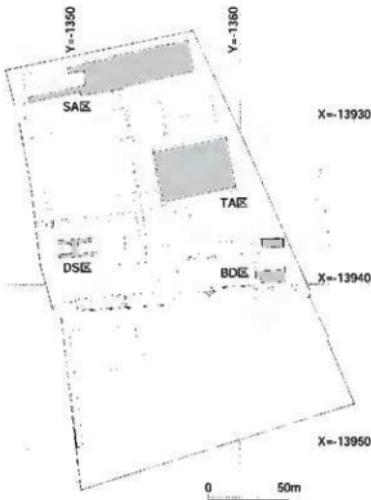
1 経緯と経過

備前市西片上97番地に所在する長縄手遺跡は、昭和24年に岡山県立片上高等学校（昭和26年、備前高等学校に改称）の建設工事に際して遺物が出土したことからその存在を知られるようになった。この際、薄い貝の散布が確認されており、縄文土器も採集されていたことから縄文時代の貝塚が存在する可能性が指摘されていた⁶。しかし、岡山県教育委員会の岡山県遺跡地図（昭和50年刊）や文化庁の全国遺跡地図（昭和60年刊）には記載されておらず、遺跡の現存状況は不明のまま、長く保護措置が講じられることはなかった。

平成5年、岡山県教育委員会は備前高等学校の北西端にある産業教育施設の改修工事を計画していくが、備前市教育委員会より遺跡が残存する可能性があるとの教示を得たため、急遽その現況を把握する目的で8月26～30日に確認調査を実施した。調査は計画地の南と北にトレーンチを設定して掘り下げを行ったが、厚さ15cmほどの造成土直下で縄文時代の遺構が検出されたことから小字名に因んで長縄手遺跡と呼称することとし、備前市教育委員会の協力を得て9月6日～10月12日に全面調査を実施した（S A区）。この調査により、縄文時代中期末の堅穴住居3軒、土壙6基、集石遺構、土器沼まりなどが確認され、県内でも数少ない縄文時代の集落跡として注目を集めめた⁷。このため、地元研究者から県知事あて保存要望が出され、県教育委員会としても遺構の一部を切り取り保存するとともに⁸、今後の学校整備に際しては事前に確認調査を実施することとした。

平成9年、備前高等学校の同窓会館建設計画されたため、備前市教育委員会により1月30日～2月5日にかけて確認調査が実施された。計画地（D S区）は備前高等学校の西側中央、前回調査地の南90mにあたるが、厚さ1mある造成上の下には旧水田層が広がり、その下には須恵器を含む包含層がわずかに認められた。しかし、その基盤となる砂層は東に向かって傾斜しており、谷の西岸よりに堆積した水成層と判断された⁹。

平成11年には、校地の東側中央に武道場建設が計画されたため、10月4～18日にかけて確認調査を実施した（B D区）。ここでは、南と北に設定したトレーンチのうち、北側（T2）は削平を受けたためか遺構・遺物とも確認できなかったが、南側（T1）では奈良時代の遺物を伴う木組みの井戸が検出された¹⁰。平成14年、産業教育施設の改築と体育館の建



第4図 調査区配置図 (1/3,000)

設が計画されたため、6月14～25日にかけて確認調査を実施した。産業教育施設（S A区）は平成5年度調査箇所の東側、体育館（T A区）はS A区とB D区の間の東側にあたり、調査の結果、両地点とも遺構・遺物が認められたことから全面調査を実施することになった。全面調査は10月1日～翌年3月31日の予定で、S A区から着手した。ここでは、西端で前回確認された上器窓まりの一部が検出されたものの、その大部分は造成時の大幅な削平によって遺構は既に失われていた。また、T A区では西に向かって下る緩斜面に奈良～江戸時代の遺物包含層が堆積し綠釉陶器・灰釉陶器などが出土して注目されたが、頗るな遺構は確認できなかった。

平成15年8月～翌年3月にかけて、岡山県教育委員会が実施した3次にわたる発掘調査の報告書作成を行った。出土遺物の洗浄・注記は調査年度毎に実施していたが、平成5年度の調査分については担当者が文化課本務のため監督者不在のまま整理が進められ、遺物の注記に混乱を生じた。加えて、未注記遺物が博物館展示に貸し出され、その際出土遺構が不明となる事態を招いた。このため、整理にあたっては接合関係をもとに出土地点の復元に努めたが、なお一括の不安が残る結果となった。

整理にあたっては、高橋 謙、千葉 豊（京都大学）、富井 真（同前）、柳澤清一（千葉大学）、妹尾 譲（倉敷芸術科学大学）、本田光子（九州国立博物館設立準備室）、志賀智史、石井 啓（備前市教育委員会）の諸氏から有益な教示に与かった。また、富井氏には織文土器について、高橋氏には植物珪酸体について玉稿を賜った。ここに深甚なる謝意を表する。
(亀山)

2 調査と整理の体制

平成5年度

岡山県教育委員会

教育長 森崎岩之助

岡山県教育庁

教育次長 片岡 邦二

文化課

課長 渡邊 淳平

課長代理 松井 新一

監修 (文化課長) 高畠 知功

主査 時長 勇

岡山県古代吉備文化財センター

所長 横山 審貴

次長 菊原 克人

<総務課>

課長 北原 求

課長代理 (文化課長) 小西 親男

主査 石井 茂

主査 石井 哲晴

主任 三宅 秀吉

<調査第一課>

課長 正岡 睦夫

課長代理 (文化課長) 松木 和男

文化財保護主事 亀山 行雄 (文化課本務、

調査担当)

平成11年度

岡山県教育委員会

教育長 黒瀬 定生

岡山県教育庁

教育次長 宮野 正司

文化課

課長 松井 英治

課長代理 佐々木和生

参事 正岡 隆大

監修 (文化課長) 松本 和男

文化財保護主任 大橋 雅也

主任 奥山 修司

岡山県古代吉備文化財センター

所長 菊原 克人

次長 大村 俊臣

<総務課>

課長 小倉 卓

課長代理 (文化課長) 安西 正則

主任 山本 恵輔

<調査第一課>

課長 高畠 知功

課長代理 (文化課長) 中野 雅美

文化財保護主任 福本 明 (倉敷市から研修、

調査担当)

<p>平成14年度</p> <p>岡山県教育委員会 教育長 宮野 正司</p> <p>岡山県教育庁 教育次長 三浦 一男</p> <p>文化財課 課長 西山 猛 課長代理 松本 和男 課長代理 宮田 正彦 文化財保護主任 尾上 元規 主事 浜原 浩司</p> <p>岡山県古代吉備文化財センター 所長 正岡 暉夫 次長 藤川 洋二</p> <p><総務課> 課長 安西 正則 課長補佐(第一係長) 田中 秀樹 主任 小坂 文男</p> <p><調査第一課> 課長 高畠 知功 課長補佐(第一係長) 平井 泰男(6月、調査担当)</p> <p><調査第二課> 課長 柳瀬 昭彦 課長補佐(第二係長) 山崎 康平 文化財保護主任 浅倉 秀昭(10~12月、調査担当) 福田 正継(10月~、調査担当) 文化財保護主査 澤山 孝之(1月~、調査担当)</p>	<p>平成15年度</p> <p>岡山県教育委員会 教育長 宮野 正司</p> <p>岡山県教育庁 教育次長 宮川 一男</p> <p>文化財課 課長 西山 猛 課長代理 田村 啓介 課長代理 平井 泰男 文化財保護主任 尾上 元規 主事 浜原 浩司</p> <p>岡山県古代吉備文化財センター 所長 正岡 暉夫 次長 藤川 洋二 文化財保護参事 松本 和男</p> <p><総務課> 課長 中田 哲雄 課長補佐(総務課長) 松本 弘忠 主任 小坂 文男</p> <p><調査第一課> 課長 岡田 博 課長補佐(第二係長) 小島 東 文化財保護主査 亀山 行雄(整理担当)</p>
--	--

註

- 1 亀田修一「古墳の時代 古代国家への道」『長船町史』長船町、2001
- 2 川原寺式の瓦は、古人大兄皇子の謀反事件で中央政界に食い込んだ、笠氏の氏寺と考えられる笠岡市圓戸庵寺でも採用されている。
- 3 備前市新庄東川遺跡や長船町丸山遺跡で4~5世紀の朝鮮半島系土器が出土している。
註1 文獻
- 4 平城京木簡に見える片下郷は以後の文献に現れず、藤野郷編入までに秀登郷へ統合されていた可能性がある。
- 5 伊弉南大室跡周辺窯跡群の確認調査で10世紀に遡る窯跡が検出されたが、後に展開する備前焼生産にまで繋がるものかどうか現時点では不明である。
- 6 片上窯を眼下に見下ろす當田松山城は、浦上村宗の三男田秀の居城である。
- 7 石井啓「伊弉南大室跡周辺窯跡群確認調査報告書!」『備前市埋蔵文化財調査報告5』備前市教育委員会、2003
- 8 村又一郎「片上町史」1949、岡本明郎・西川宏『和氣郡史 通史編』1978
なお、内書に掲載された写真の出土遺物は、現在藤前高等学校に保管されている。
- 9 亀山行雄「備前高校校舎改築に伴う発掘調査」『岡山県埋蔵文化財報告24』岡山県教育委員会、1994
亀山行雄「岡山県備前市長船手遺跡」『日本考古学年報46』日本考古学協会、1995
- 10 切り取った遺構は、備前市教育委員会の協力により同市歴史民俗資料館において保存・公開を行っている。
- 11 備前市教育委員会 石井啓氏教示
- 12 福本明「県立備前高等学校武道場改築工事に伴う確認調査」『岡山県埋蔵文化財報告30』岡山県教育委員会、2000
- 13 福田正継「県立備前高等学校産業教育施設・体育館整備に伴う発掘調査」『岡山県埋蔵文化財報告33』岡山県教育委員会、2003

第2章 調査の概要

第1節 SA区の調査

1 概要

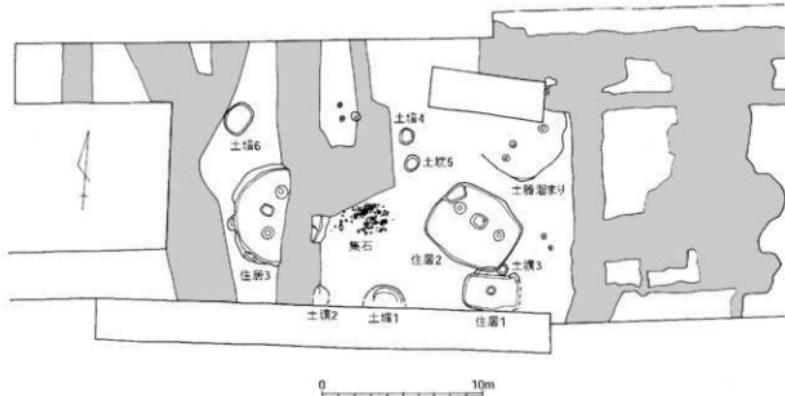
SA区は校地の北端に位置し、現地表の標高は6.5mと、南に向かって傾斜する校地の中では最も高い位置にある。産業教育施設の改築に伴い、平成5年と平成14年の二次にわたって調査を実施した。この地点は西に向かって傾斜する地形を改変して校地を造成しているよう、丘陵を大幅に削平して造成された東半では遺構は全く検出できなかった。また、縄文時代の遺構が検出された中央より西側は、厚い造成土の下から流川に向かって階段状に広がる水田が検出され、その西端には水路と見られる幅7mほどの溝が確認された。水田の下には古墳時代～中世の包含層が認められたが遺構は検出できなかった。

2 遺構・遺物

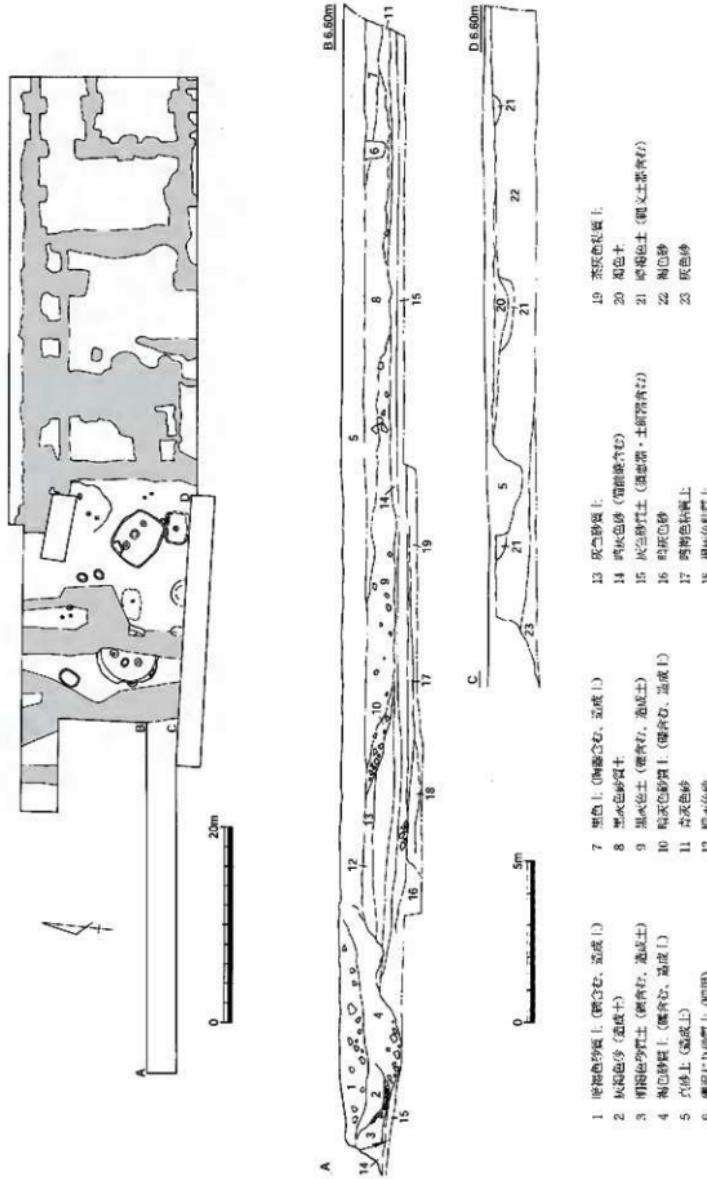
竪穴住居1（第7～9図、図版2・6・7）

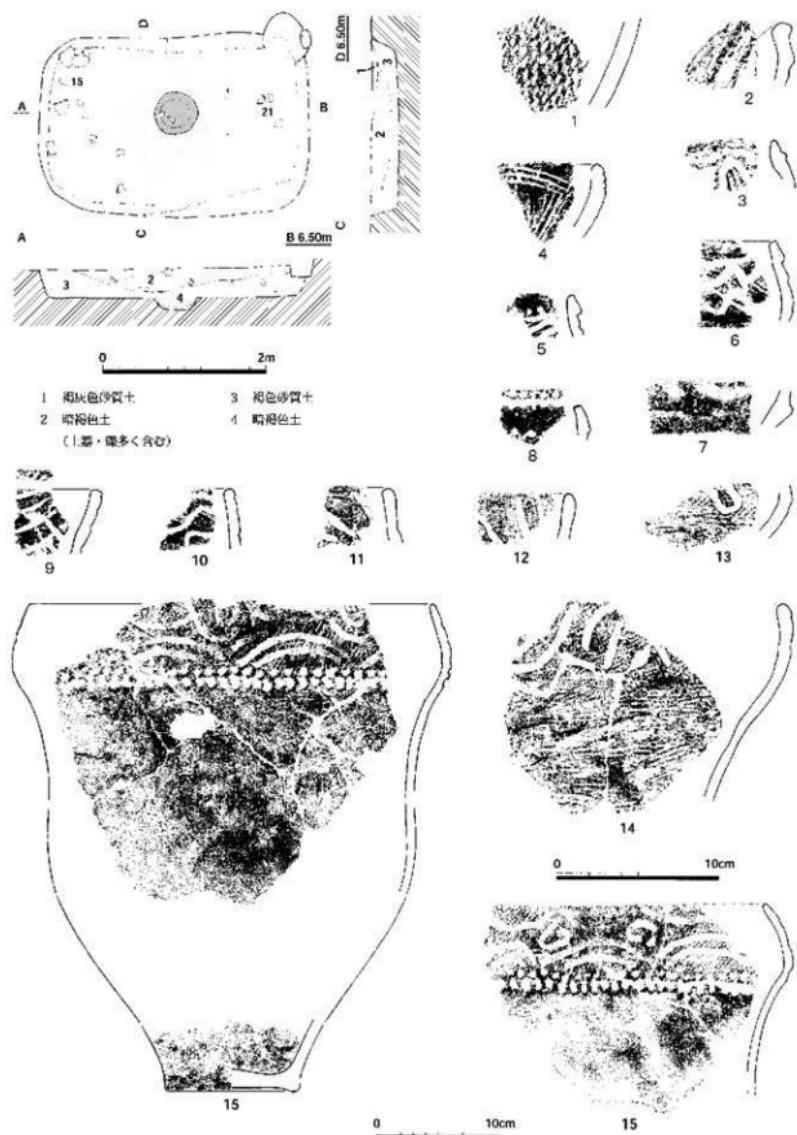
確認調査のトレレンチにかかる検出された。長軸350cm、短軸218cmの長方形を呈する竪穴住居で、現状の深さは35cmある。5.5mある床面の中央北よりもには径52cm、深さ14cmの円形をなす炉穴が検出されたが、柱穴は確認できなかった。

整理箱2箱ほどある遺物の多くは竪穴埋土（第7図2層）から出土しているが、15・21のように床



第5図 SA区遺構配置図 (1/300)

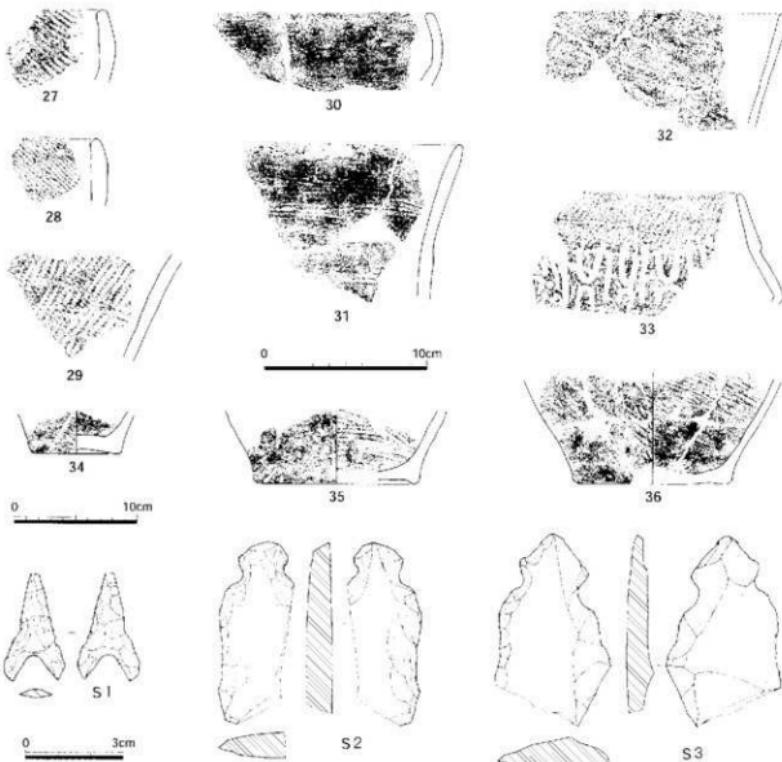




第7図 整穴住居1(1/60)・出土遺物1(1/3・1/4)



第8図 整穴住居1出土遺物2(1/3・1/4)



第9図 整穴住居1出土遺物3(1/3・1/4・2/3)

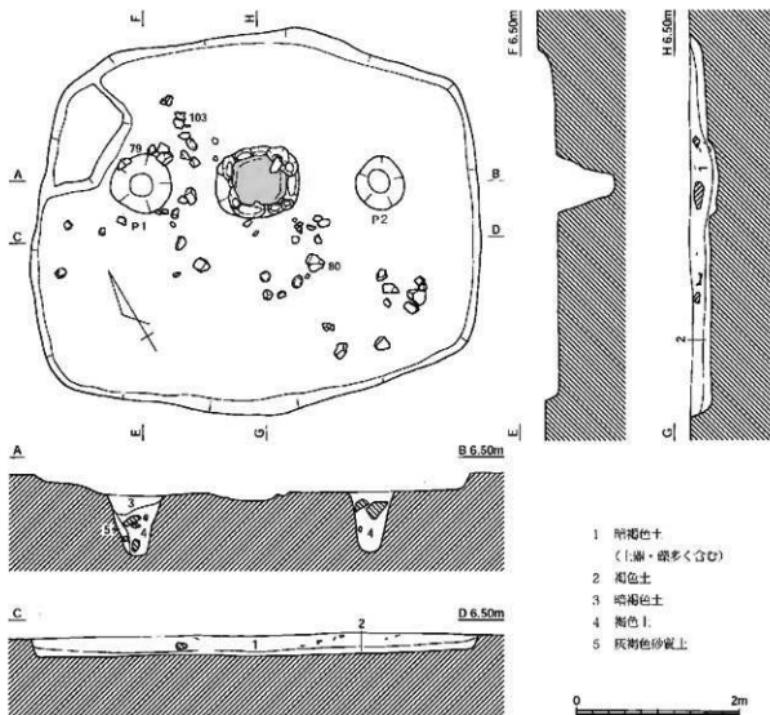
面に伴うものもある。1~4は船元式~里木II式の深鉢で、混入品と見られる。5・6は折り返し口縁の深鉢で、6には縄文RLが施される。11~14は内湾ぎみの口縁部に太い沈線で弧状の区画文を描きLRの縄文を施す深鉢である。15は内折する口縁部に対向する逆弧文を飾る深鉢で、胴部との境には刺突を二段にめぐらす。16は波状口縁の深鉢で、刺突文を充填する菱形の区画を垂下する縄文帯で二分する。20は小さな波状をなす口縁部に横走する渦巻文をめぐらす。21は内湾する口縁をもつ深鉢で、交互に配した円文の間やその下を波状の磨消縄文帯で埋めている。22は口縁部に弧状の沈線と渦巻文を飾る深鉢で、段をなす下端には刺突を連続して施す。26は波頂部に刺突文を充填した区画文を飾る深鉢である。無文の深鉢には縄文を施す27~29と、条痕を残す30~31がある。前者ではLRとRLが拮抗し、後者では一枚只によるものが優勢である。33は鋭く内折する口縁部をもつ浅鉢で、わずかに肥厚して段をなす口縁部の下端には刺突を連続して施し、その下を沈線と降帶で飾る。径7~13cmある底部には、平底のほか底面がわずかにくぼむ凹み底や周縁をつまみ出した高台底があり、高台底が過半を占める。

石器には、基部を深く抉る長さ2.5cm、幅1.6cm、重量1gの石鏃S 1と、長さ5cm、幅2.2~3.5cm、重量13~17gを測る縦型の石匙S 2・3があるが、いずれもサヌカイト製である。

竪穴住居2（第10~14図、図版3・7・8）

竪穴住居1の北に接して検出した。長さ555cm、幅470cmの長方形を呈しており、深さは26cmある。20mを測る床面の北隅には、長さ135cm、幅69cm、高さ12cmの台形をなす高まりがつくりだされている。2本ある主柱は、北東壁から168cm、南西壁から269cmと北東に偏する位置に検出された。円形をなす掘り方はP 1が径72~74cm、深さ73cm、P 2が径61~66cm、深さ73cmを測り、いずれも柱材が抜き取られた後に礫が落ち込んでいる状況が観察された。柱間は292cmあり、その方向はN 60°Wを測る。柱間に中央には長さ102cm、幅87cm、深さ10cmのJ形をなす炉が確認された。長さ67cm、幅62cmを測る被熱面の周囲には長さ16~40cm、幅10~23cmほどの凹凸が見られ、石が配されていた痕跡と考えられる。

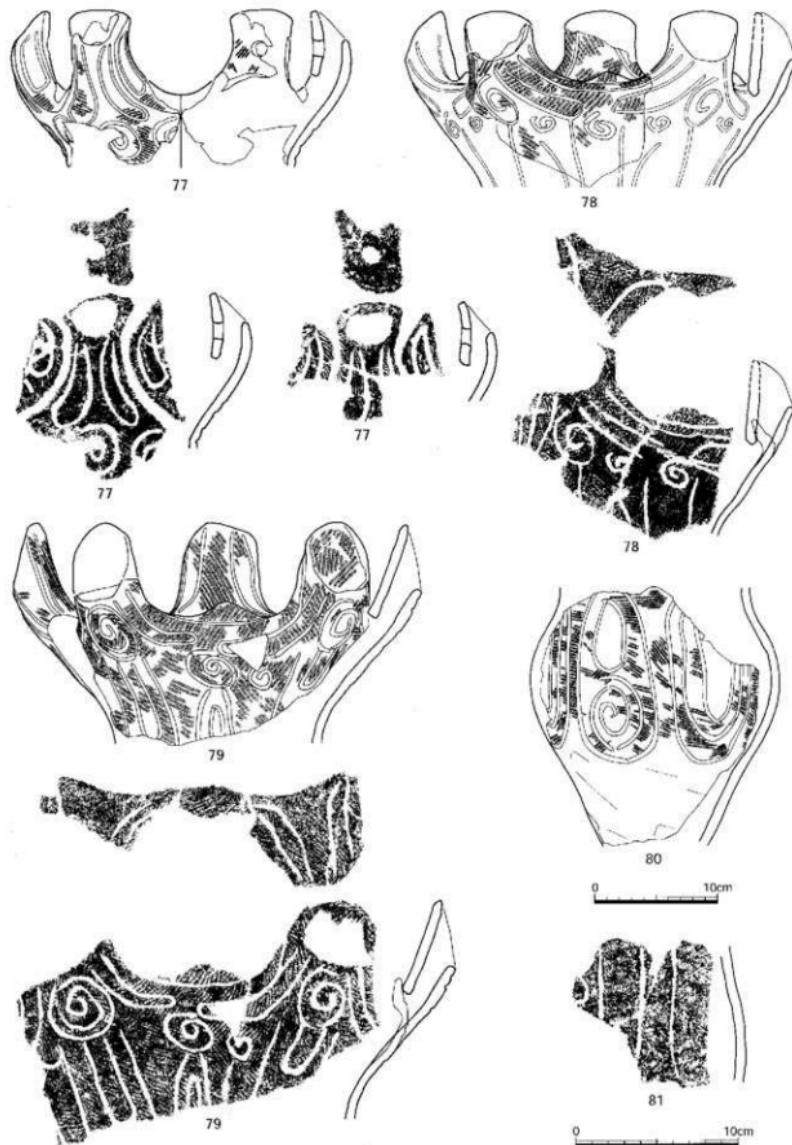
出土遺物には整理箱6箱ほどの縄文土器・石器がある。その大半は竪穴内に堆積した暗褐色土層（第10図1層）からの出土であるが、竪穴の北から南にかけて帯状に分布する床面近くの遺物を見る



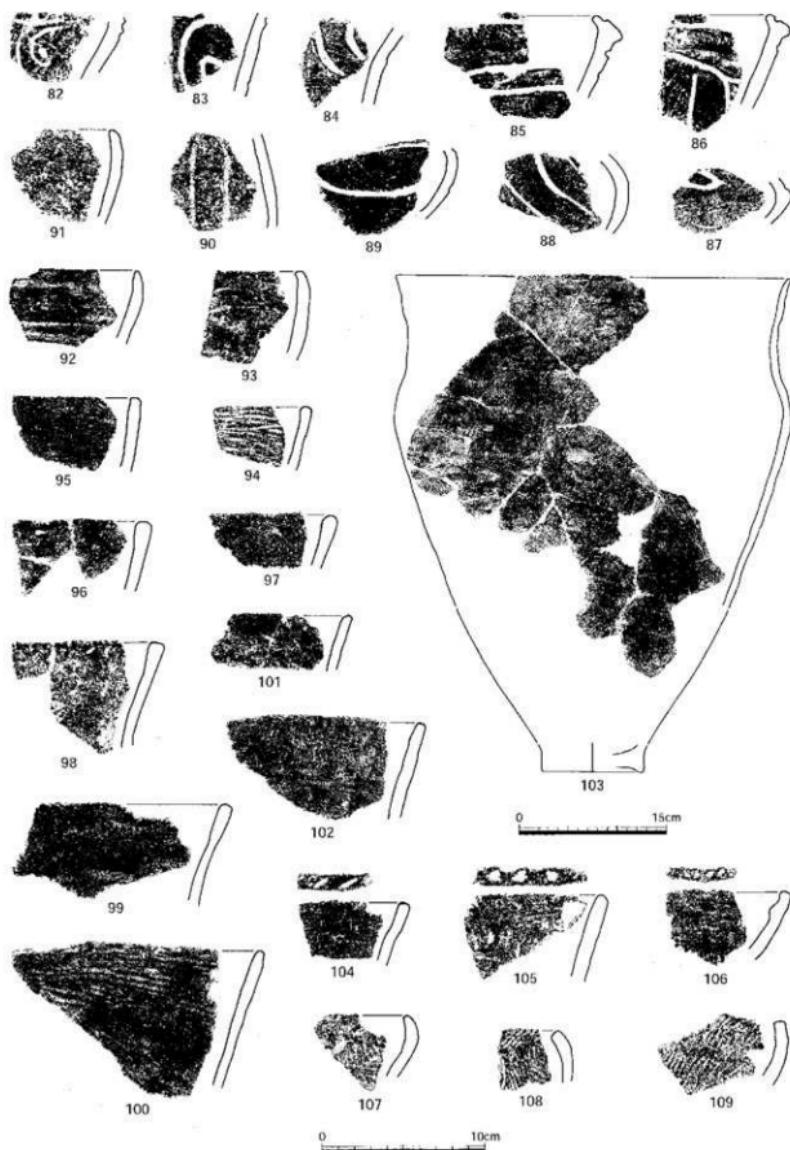
第10図 竪穴住居2(1/60)



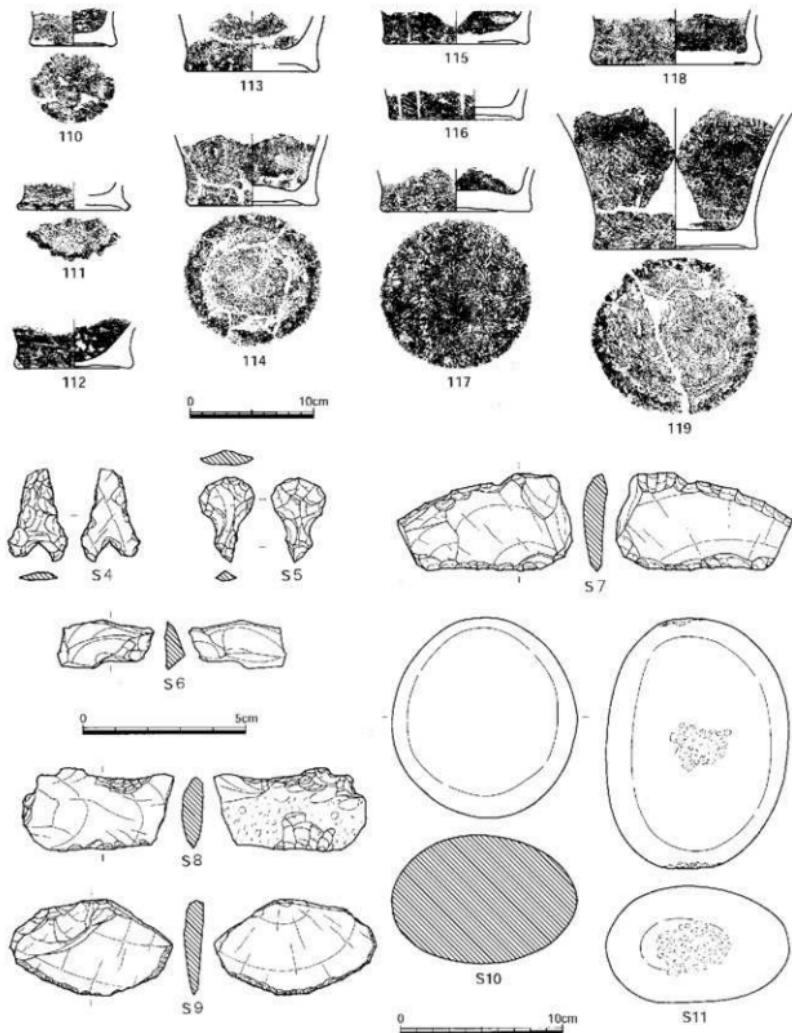
第11図 整穴住居2 出土遺物1 (1/3)



第12図 整穴住居2出土遺物2(1/3・1/4)



第13図 堅穴住居2出土遺物3(1/3・1/5)



第14図 整穴住居2出土遺物4(1/3・1/4・2/3)

と、住居の廃絶から遺物の廃棄までの時間差は認められない。37~42は船元式ないし単木式の深鉢である。中期末の土器44~84・87~119には深鉢のほか、鉢ないし浅鉢と見られるものが少量ある。44~47は外反する口縁部に崩消繩文で区画文を描く深鉢である。50~52は波状口縁の深鉢で、

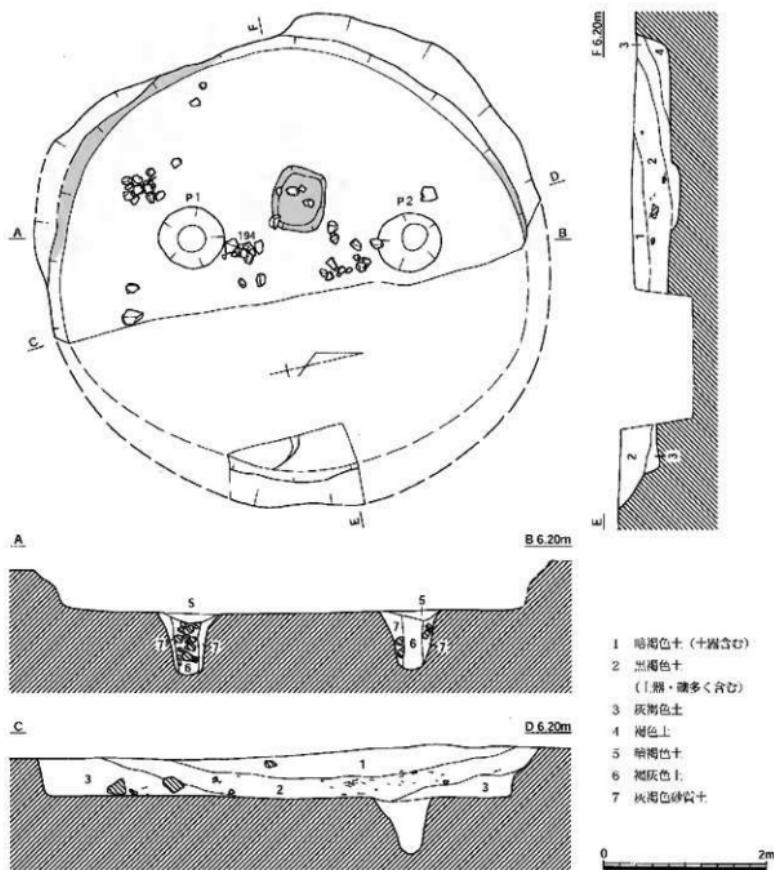
波頂部に刺突を充填した楕円形の区画文を飾る。56~62は口縁部が屈曲して文様帶を構成する深鉢で、沈線により満巻や区画文を描く56・58・61や刺突文を飾る60・62がある。このうち、56は胴部57に蛇行曲線を充填した楕円形の区画文を描き、60は胴部を区画文と刺突で飾る。77~79は6~7つの筒状の突起をもつ深鉢である。波頂部にはハ字状の区画文と満巻文を描き、その下に紡錘文を飾る。R I. の縄文が施されるが磨消縄文にはなっていない。80は膨らんだ胴部に楕円形の区画文を描く。91~105・107~109は無文の深鉢で、巻貝調整が6割を占める。91~105では口縁部が直行するものが多く、内湾ぎみのものはまれである。また、口縁端部がわずかに肥厚する96~98や、ヘラや巻貝で刻み目を施す104・105が見られる。107~109は縄文を施す深鉢で、LRが8割を占める。65・66は内湾ぎみの口縁部に磨消縄文を施すもので鉢になる可能性がある。屈曲部に沈線文を飾る87~89も鉢になる可能性がある。106は刻み目を施した口縁部の内面に突帯を貼り付けた浅鉢である。底部110~119は径6~15cmまで見られるが、10cm前後のものが中心となる。高台底が36点と最も多く、12点の凹み底がこれに次ぐ。また、111や113のように周縁に刻み目を施すものも見られる。磨消縄文が見られる116は底部のつくりが他と異なり、胎土の特徴などから77~79との関連が想定される。

石器にはサムカイト型の石鎚や石錐、スクレイバーのほか円鏃を利用した叩き石、磨石などがある。S 4は先端を欠いているが、長さ2.9cm、幅1.8cm、重量1.1gを測る四基鎚である。長さ2.6cm、幅1.6cm、重量1.5gを測る石錐S 5は、円形に整えたつまみの左右から抉りを入れて断面三角形の刃部をつくり出す。S 6は黒曜石の剥片で、科学的分析を経ていないが鳥根県隱岐島産の可能性が高い。スクレイバーには長さ5.4cm、幅3cm、重量14.3gを測るS 7と長さ9.2~9.9cm、幅5.2~5.9cm、重量84gのS 8・9がある。S 10は磨石、S 11は叩き石で、両端と表面中央に使用面が残る。

豎穴住居3（第5・15~23図、図版4・9~11）

豎穴住居2の西に位置する。東半は大きく搅乱を受けているが、かろうじて残存した部分をもとに復元すると長径634cm、短径613cmの円形を呈するものと思われる。検出面からの深さは最大で65cmを測り、78°の傾斜で立ち上がる壁面には被熱により赤変硬化した箇所が広範囲に認められたが、これにかかわるような炭化材は出土していない。23mを測る床面の東端では13cmほどの段差が認められ、豎穴住居2で見られたような高まりが設けられている可能性があるが、搅乱のため全容を知り得ない。主柱は2本あり、いずれも円形の掘り方をもつ。南側のP 1は径76~81cm、深さ75cmを測り、径27cmの柱痕跡内には礫が充満していた。また径73~78cm、深さ72cmを測る北側のP 2では、径22cmの柱材を固定するように充填された拳大の礫が遺存していた。N~14°~Eとほぼ南北を指す柱筋は西壁から232cm、東壁から291cmとやや東に偏した位置にあり、柱間距離は274cmを測る。長さ79cm、幅65cmの長方形を呈する炉は床面を11cmほど掘りくぼめた地床炉で、西壁から336cm、東壁から186cmと主柱よりさらに西寄りの位置にある。

遺物は、豎穴内に堆積した黒褐色土層（第15図2層）を中心に整理箱10箱ほどの縄文土器・石器が出土している。120~126は船元式ないし甲木式、249~252は福田K II式の深鉢である。中期末の土器は127~247・253~310を図示した。128は降帶によって区切られた口縁部に磨消縄文で円形の区画文を表す。131は屈曲する口縁部にく字形の羽状沈線文をめぐらす深鉢である。132・134は口縁部に山形文、胴部135・136に縦長の楕円形区画文を磨消縄文で表す。137~139は屈曲する口縁部に楕円形の区画文を描く深鉢で、138・139は波状をなす。142は屈曲した口縁部を肥厚させ垂線で区画する深鉢で、141と同一個体と見られる。146は屈曲する口縁部に山形の沈線文を飾る。147・148は口縁部に刺

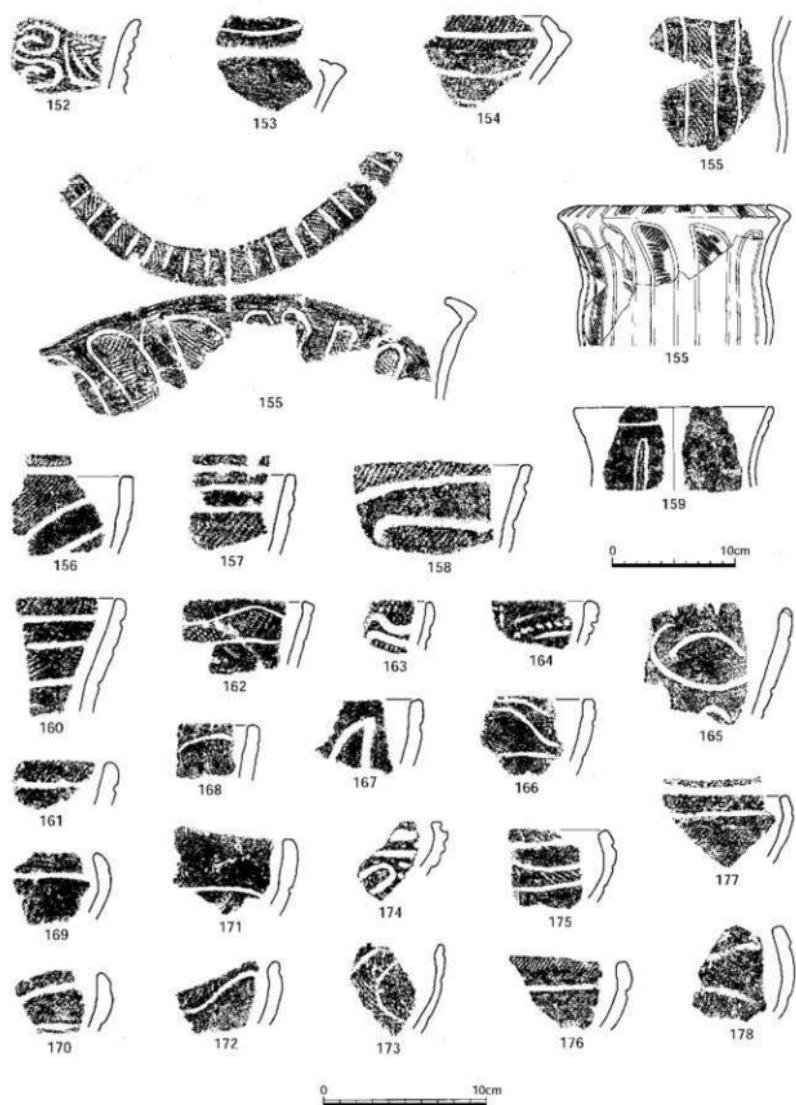


第15図 堅穴住居3(1/60)

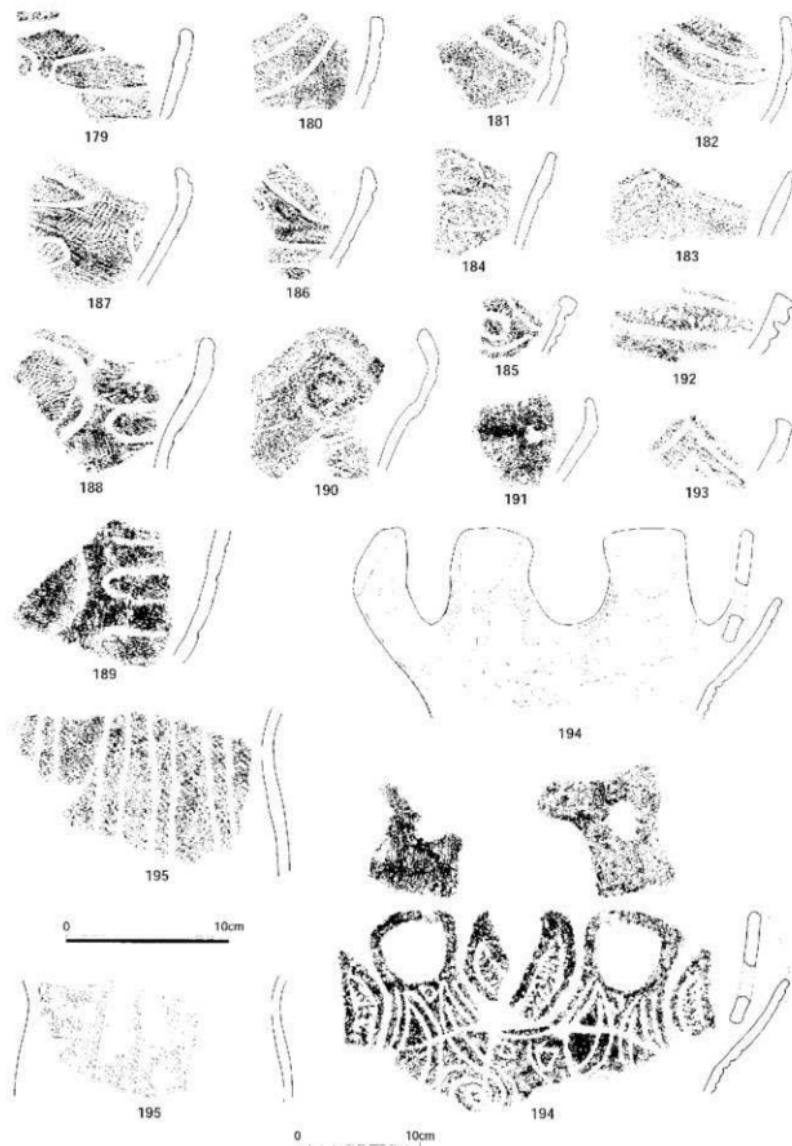
突を加えた沈線で梢円形の区画文を描く。152は屈曲した口縁の波頂部にS字文を書き、その左右に羽状沈線を充填した区画文を配する深鉢である。153～155は口縁部が強く内折する深鉢である。このうちP2から出土した155は口縁部に短直線、胴部に縦長の区画文を描いてL Rの繩文を充填する。159～189は口縁部と胴部の区別が明瞭でない深鉢である。斜め上方にのびる口縁部に磨消繩文を飾る156～163と沈線文を描く164～168がある。171～189は波状口縁をもつ深鉢で、区画文やJ字文を磨消繩文で表している。また、188・189は波頂部と胴部に円文と梢円形の区画文を飾る。190～195は大きな波状口縁をもつ深鉢である。190・191は波頂部に粘土を盛り上げて渦巻文を表現する。192は肥厚した口縁端部が幅広の面をなす深鉢で、刺突文帯を飾る。193も厚い口縁端部は鈍い面をなし、波頂部に沿って沈線を描く。床面から出土した194は6つの筒状突起を備えた深鉢で、口縁部にはく字形



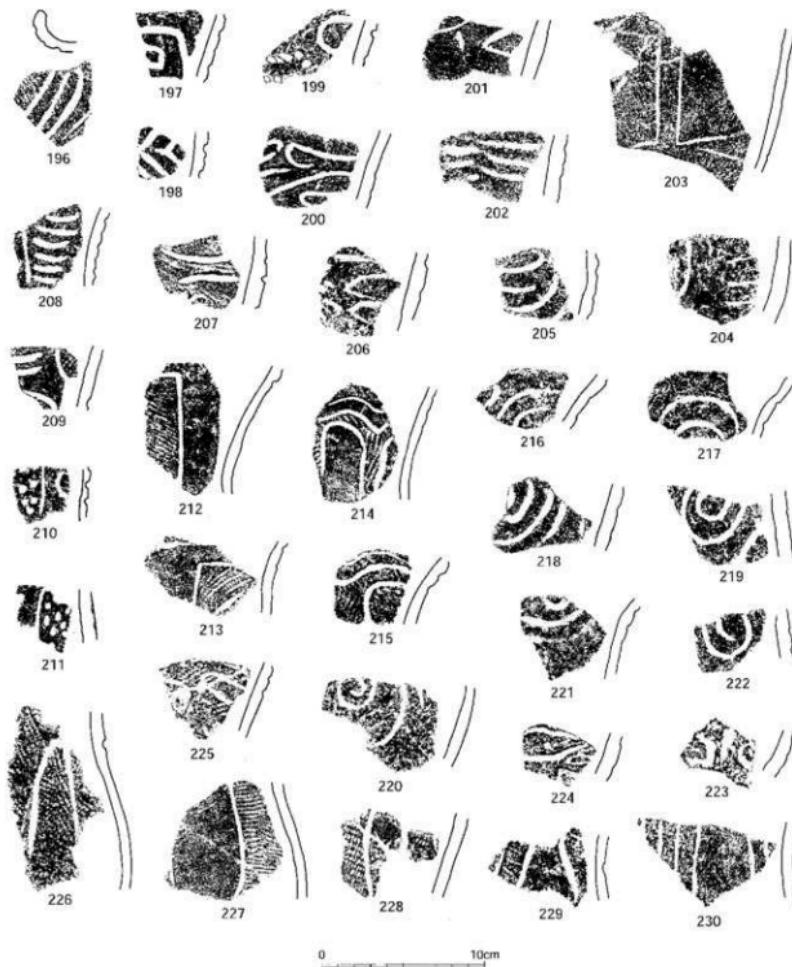
第16図 堅穴住居3出土遺物1(1/3・1/4)



第17図 整穴住居3出土遺物2(1/3 · 1/4)

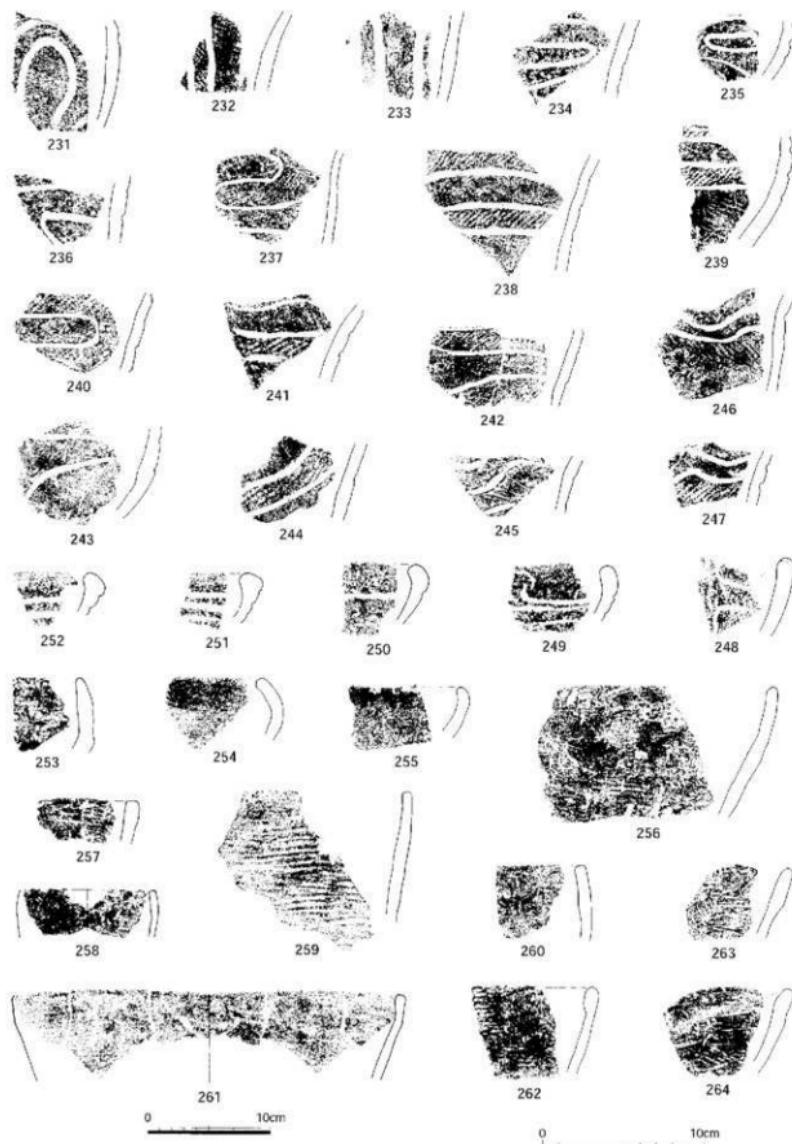


第18図 桁穴住居3出土遺物3(1/3・1/4)

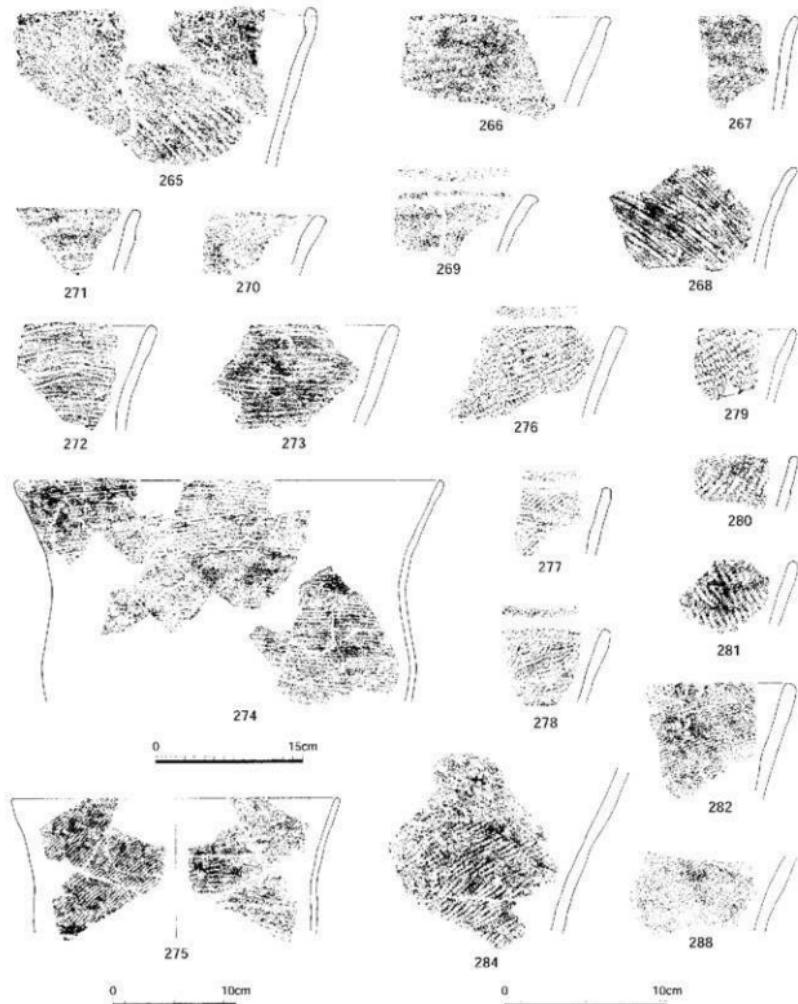


第19図 堅穴住居3出土遺物4(1/3)

の羽状文を充填した区画文を飾り、波頂部にハサ形の区画文と渦巻文を描く。胴部195は4条を単位とする沈線を垂下させ、L Rの縄文を施す。254~284は無文の深鉢である。口縁部が直立ないし斜め上方にのびるものが多いが、内湾する254・255や短く屈折する261、波状をなす263・264なども見られる。条痕を残す深鉢では、卷貝によるものが過半を占める。275~284は縄文を施す深鉢で、口縁端部を鈍く面取りし縄文を施す276~278がある。また、282・283は同一個体で、胎上に金雲母を含む。

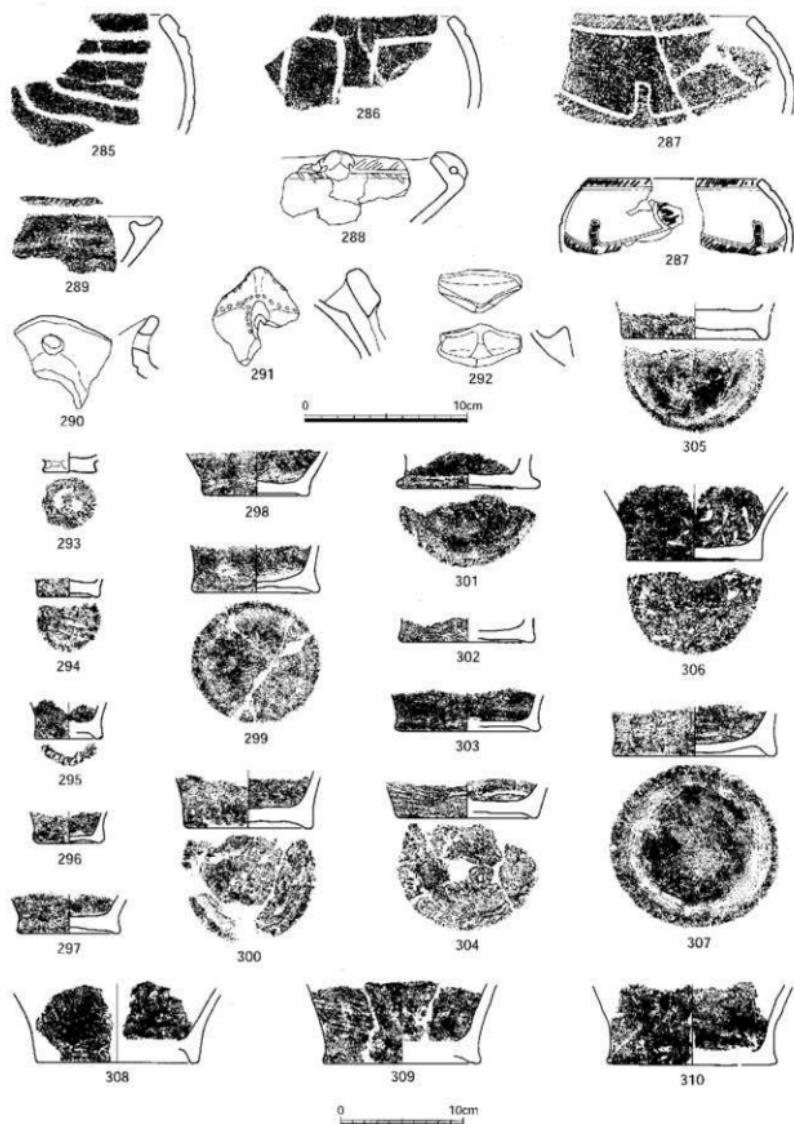


第20図 堅穴住居3出土遺物5(1/3・1/4)

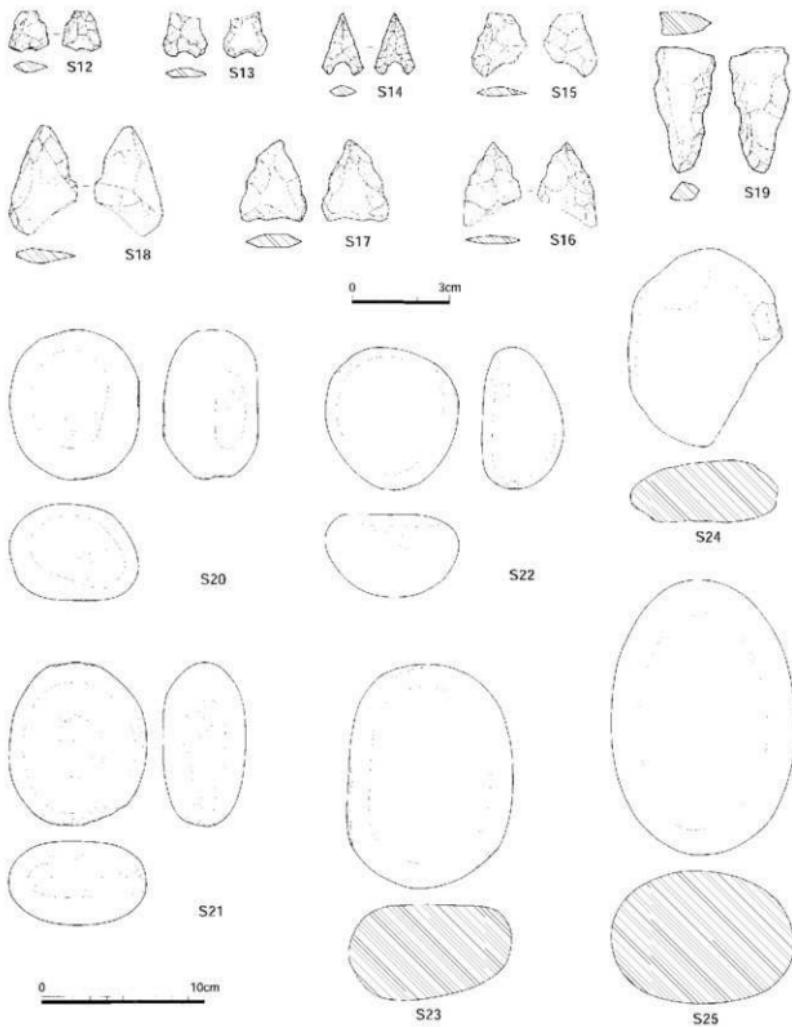


第21図 竪穴住居3出土遺物6(1/3・1/4・1/5)

内湾する口縁部をもつ285～287は、節の細かな席消縄文で幾何学的な区画文を表す鉢である。浅鉢には、内折する口縁部に矢羽状の沈線文を飾る288と、口縁部内面に突帯をめぐらす289がある。突起290～292は壺の一部と思われ、291には刺突文が施される。底部は径4～15cmまであるが、11～12cmのものが多い。凹み底や高台底が過半を占めるが、浅鉢では平底になるものが多い。また、周縁に刻



第22図 壁穴住居3出土遺物7(1/3・1/4)



第23図 堅穴住居3出土遺物8(1/3・2/3)

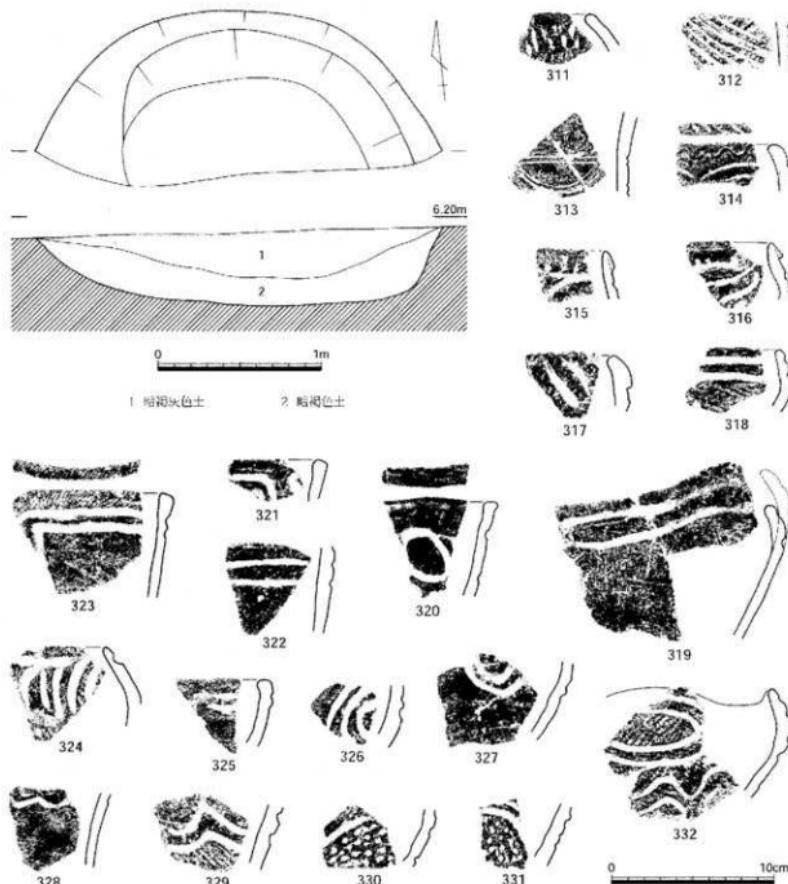
み日を施す295には赤色顔料が認められた。

石器には、サヌカイト製の石歯S12~18・石錐S19と、円盤を利用した叩き石S20~22・磨石S23~25がある。石錐は基部を抉る凹基錐が多いが、長さ1.8cm、幅1.2cm、重量0.5gを測るS14を除いて完存するものはない。また、S17・18は加工途中で廃棄された未成品と見られる。

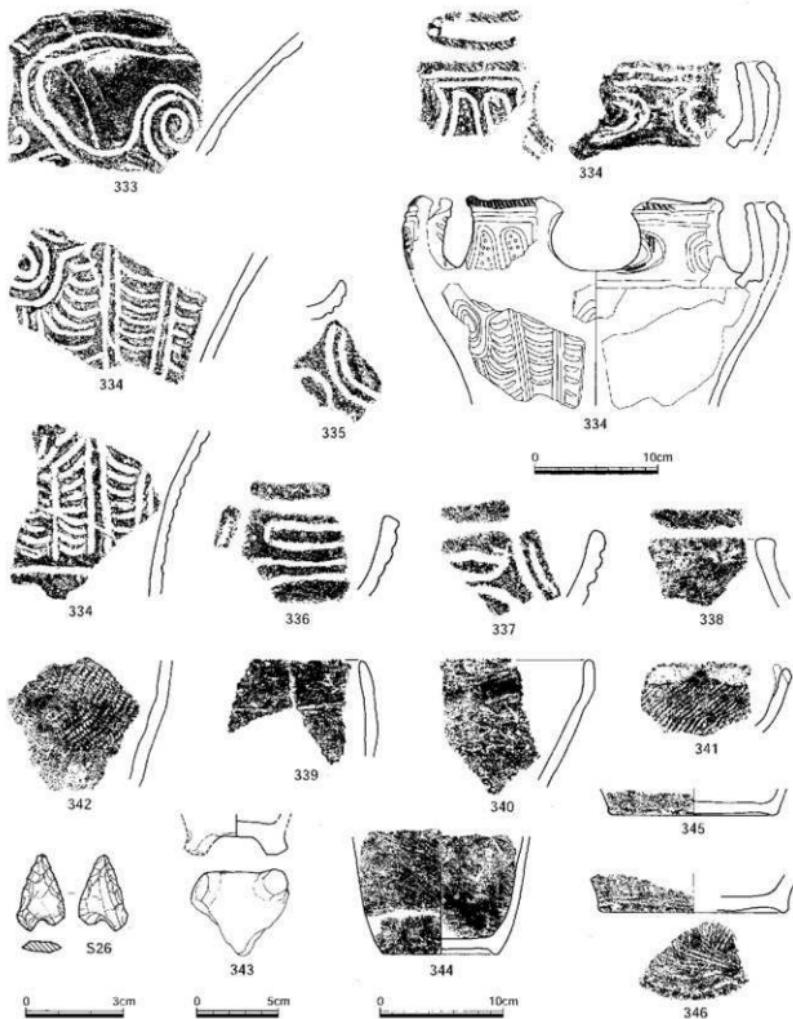
土壤1（第5・24・25図、図版13）

南のトレンチにかかって検出した円形もしくは梢円形に復元される土壤で、堅穴住居1の西3.7mに位置する。南半を確認できなかったが現状で長さ250cm、幅101cm、深さ46cmを測る。

2層に分かれる埋土からは整理箱2箱の縄文土器・石器が出土した。311～316は船元式～甲木式の深鉢である。317の深鉢は内湾ぎみの口縁部に平裁竹管で短直線を描く。318・319は波状になる口縁部に帯状の沈線文を飾る深鉢である。332も波状口縁の深鉢で、波頂部に配した梢円形の区画文の下には波状の沈線をめぐらす。334は6つの筒状突起を備えた深鉢である。横断面が梢円形をなす突起

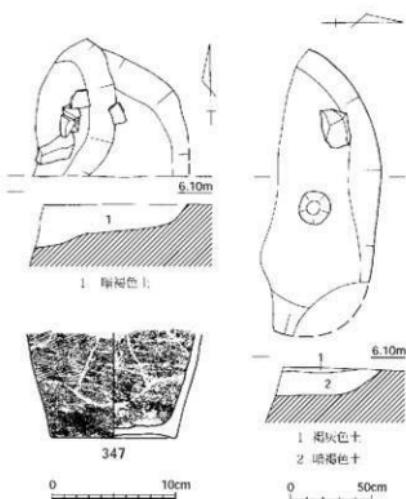


第24図 土壌1(1/30)・出土遺物1(1/3)

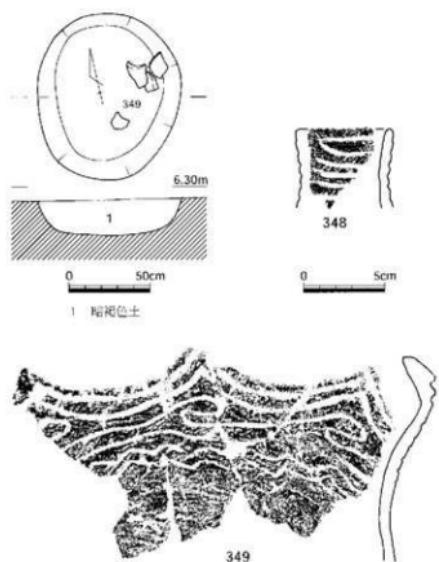


第25図 土壌1出土遺物2(1/3・1/4・2/3)

には刺突文を充填したハ字形の区画文を飾り、胴部の上半を渦巻文と肋骨状の沈線文で埋めている。336・337は台形をなす深鉢の波頂部で、沈線により梢円形の区画文を二段に描く。無文の深鉢は直立する339と端部がわずかに屈折する340がある。また、縞文を施す341は口縁端部を弧状に内折する。底部は径9~15cmを測る高台底344~346のほか、棒状の脚を備えた343もある。



第26図 土壙2・3(1/30)・出土遺物(1/4)



第27図 土壙4(1/30)・出土遺物(1/3・1/4)

石器は、サスカイト製の四基鏡S26のみで、長さ2cm、幅1.4cm、重量1gを測る。

土壙2(第5・26図)

上塙1の西2.1mで検出した。西および南側を失っているため全形は明らかでないが、現状で長さ95cm、幅91cm、深さ26cmを測る。

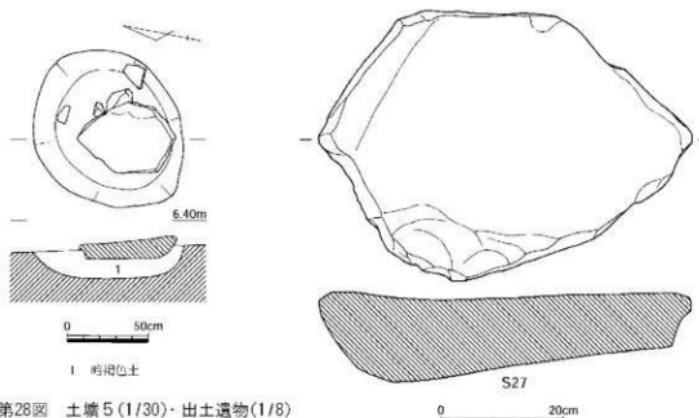
一段深くなった上塙底からは、人頭大の蝶ととともに深鉢の底部347が出土した。二枚貝で調整した器面にはLRの縦文が施され、径10.4cmを測る底面はわずかに凹む。

土壙3(第5・26図)

堅穴住居1・2の間に位置する上塙で、両者に南北で壊されている。現状では長さ171cm、幅68cmを測り、東西に長い梢円形をなすものと思われる。深さ17cmにある底面には凹凸が見られ、人為的な造構ではない可能性もある。暗褐色をなす埋土からは縄文土器の細片が少量出土した。

土壙4(第5・27図、図版5・14)

堅穴住居2の北西で検出した土壙で、長さ102cm、幅87cmの梢円形を呈し、深さは22cmある。埋土からは縄文土器の深鉢348・349が出土した。このうち349は波状口縁をもつ深鉢で、器面を貝貝によって調整した後、7つの波頂部にはJ字文、その下には波状の沈線をめぐらしている。



第28図 土壌5(1/30)・出土遺物(1/8)

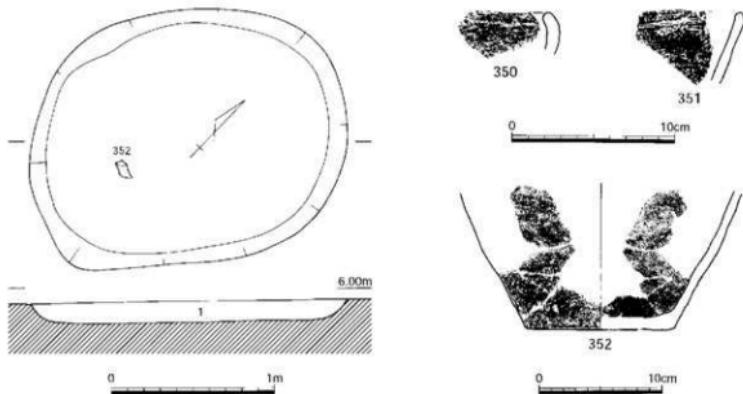
土壌5(第5・28図、図版5)

土壌4の南0.7mに位置する。造成土を除去した段階で石皿S27が出土したため精査したところ、その周囲に長さ108cm、幅87cmの楕円形をなす掘り方が確認された。

石皿は深さ17cmにある底面より10cmほど高い位置でほぼ水平を保つように出土した。長さ61.3cm、幅44cm、厚さ14cmの扁平な石材を利用したもので、その一端には剥離痕が認められる。上面はわずかに凹み、摩擦痕が認められる。このほか縄文土器が少量出土しているが細片のため図示していない。

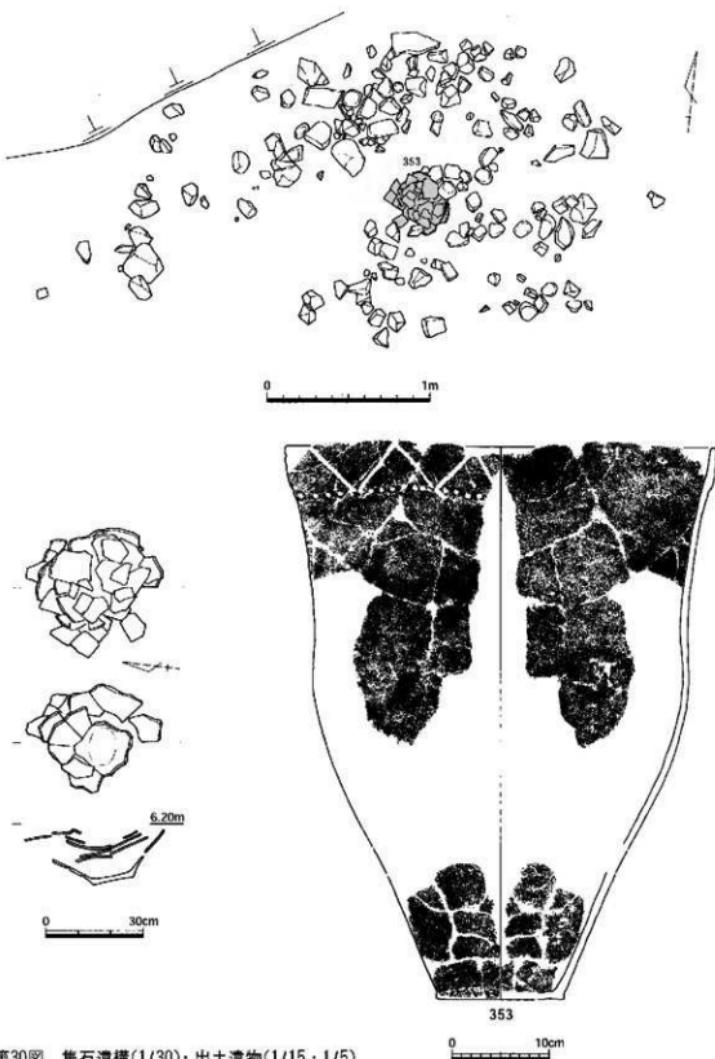
土壌6(第5・29図)

堅穴住居3の北西2.3mで検出した土壌である。長さ196cm、幅155cmの楕円形を呈し、深さは13cmと浅い。



第29図 土壌6(1/30)・出土遺物(1/3・1/4)

暗褐色をなす埋土からは、少量の縄文土器が出土している。深鉢の口縁部には内湾する350と斜め上方に延びる351とがあり、いずれも巻貝による条痕が残る。352は径12cmを測る平底の深鉢で、ナデで調整する。



第30図 集石遺構(1/30)・出土遺物(1/15・1/5)

集石遺構（第5・30図、図版5・14）

竪穴住居2・3の間に、東西3m、南北2mにわたって長さ10~30cmを測る礫の集中が認められ、その中央東よりの位置で深鉢353を検出した。深鉢は、ほぼ正位を保つように遺存する下半部内に上半部が崩落した状態で出土した。調査時は礫を地山を構成するものと考え、深鉢を埋設した遺構と理解していた。しかし、深鉢の器高は50cmを越えるうえ器面の風化も甚だしいことから、現時点では人為的な集石の中央に据えられていたものと判断している。

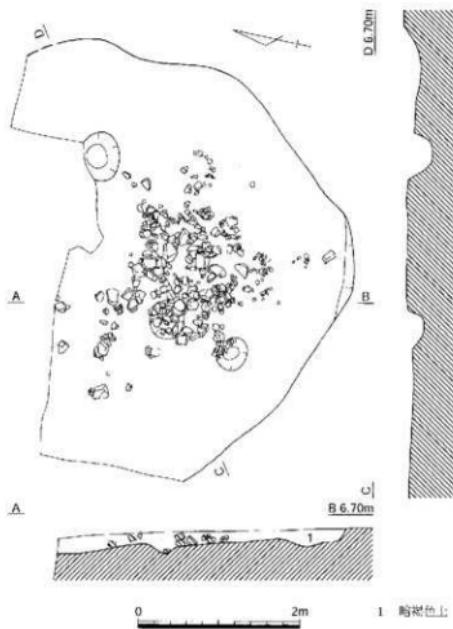
353は口径43.5cm、器高56.5cmに復元される深鉢で、わずかに肥厚した口縁部には山形の沈線文と縄文を飾り、段をなす下端には刺突を連続して施す。器面はナデで調整しており、径11.8cmを測る底部は平底となる。

土器窪まり（第5・31~34図、図版5・12）

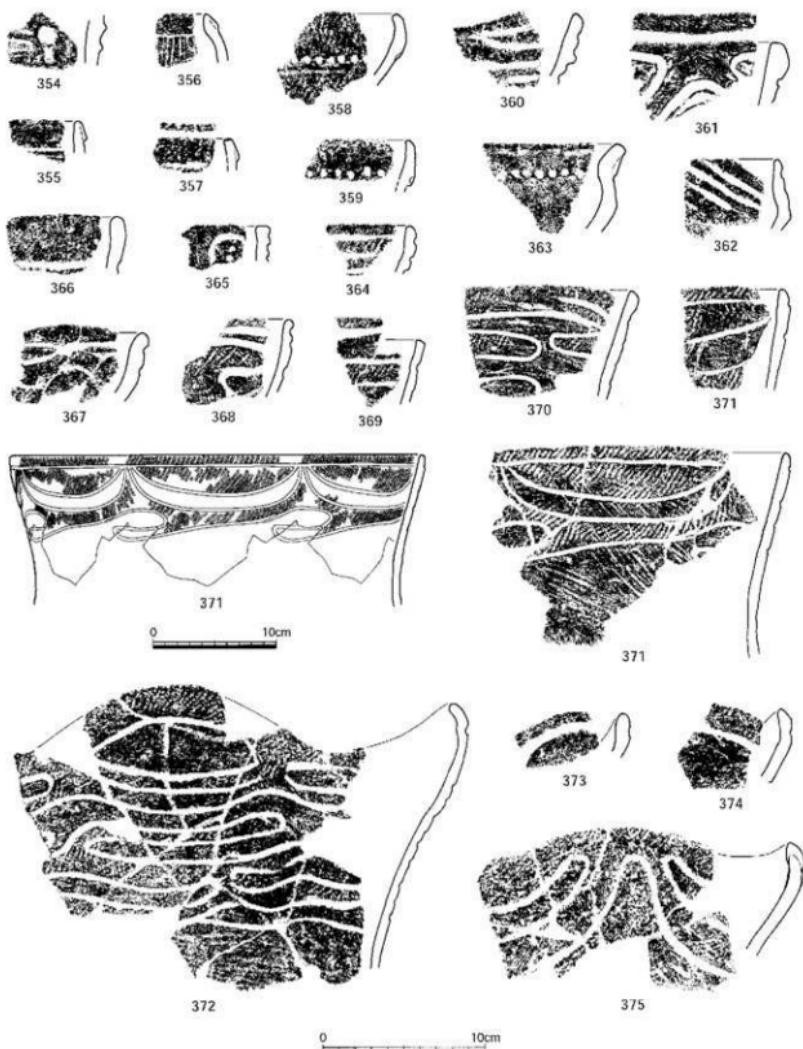
竪穴住居2の北東1.5mに位置する。北のトレーニングにかかって確認したもので、二次にわたって調査を行った。土器や礫を多く含む暗褐色土の広がりとして検出したが、遺構が浅いうえ造成時の擾乱が広範囲に及んでいた。このため遺構の輪郭は必ずしも明瞭ではないが、現状では長さ512cm、幅502cm、深さ20cmの方形を呈する。トレーニングの掘削に際して焼上面が確認されたことから竪穴住居の可能性も考えられたが、上柱の掘り方と見られるようなピット等は確認されずその性格を明らかにするには至らなかった。

遺物は、縄文土器が3箱出土している。354~356は船元~里木式の深鉢である。357は折り返した口縁部に縄文を施し端部に刻み目を付した深鉢である。深鉢358・359は肥厚した口縁部に縄文を施し段をなす下端に刺突を連続して施している。360は直行する口縁部を階帯によって両する深鉢で、波状をなす口縁部には区画文を飾る。362・363は口縁部が屈曲する深鉢で、362には幅広の沈線で短直線を描き、363は屈折して段をなす口縁の中程に刺突文をめぐらす。366~371は水平口縁をもつ深鉢で、沈線文や刺突文を飾るものと磨消縄文を施すものがある。このうち、371は三日月形の区画文の下に丁字文を磨消縄文で表している。372~377は波状口縁の深鉢である。372は波頂部に橢円形の区画文、その下に丁字文を磨消縄文で表す。

375も磨消縄文で楕円状の区画文を描

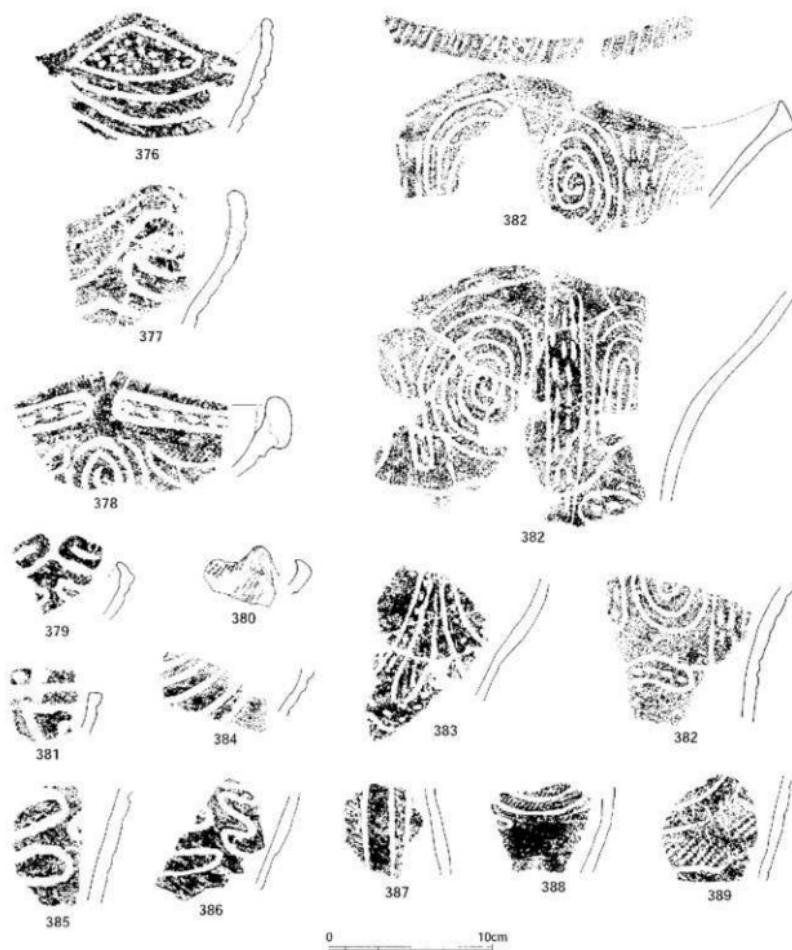


第31図 土器窪まり(1/60)



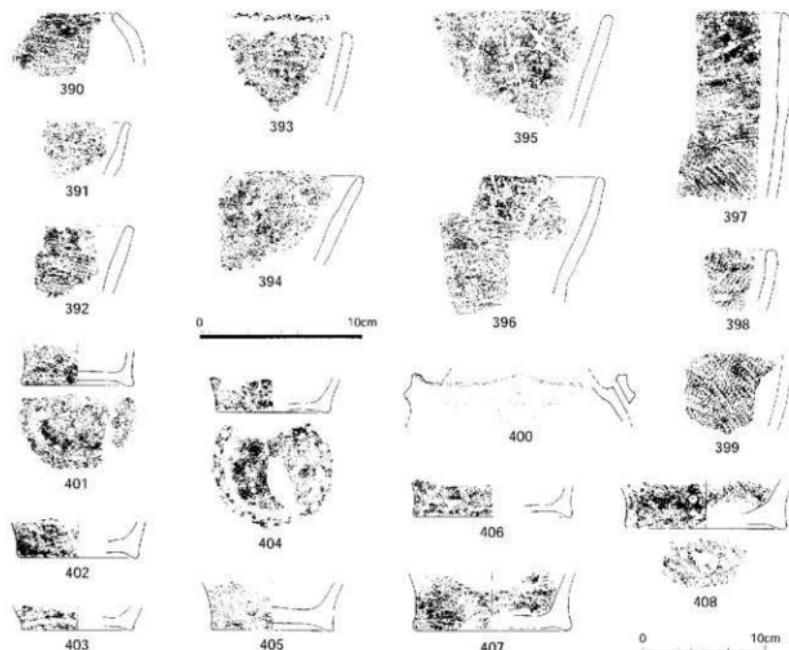
第32図 土器溜まり出土遺物1(1/3・1/4)

く深鉢である。また、376は波頂部に刺突文を充填した区画文を飾り、377は横走する渦巻文を描く沈線文の深鉢である。378は屈曲した口縁部に刺突文帯を飾り、波頂部に配した渦巻文の左右には三日月形の区画文を磨消繩文で表す。382は波状口縁をもつ深鉢で、口縁部から垂下した刺突文帯と胸部



第33図 土器窯より出土遺物 2 (1/3)

を横走する刺突文帯の間に大きな渦巻文を描く。また、肥厚した口縁端部には刻み目を施している。383も波紋部に刺突文帯で縁取られた心葉形の区画文を飾る深鉢である。無文の深鉢390～399は口縁部が直行ないし外反するものが多く、内凹するものは少ない。また、口縁端部に刻み目を施す393も見られる。398はL Rの縄文、399は巻貝による擬似縄文を施す。底部は径7～13cmが見られるが、高台底が大半を占める。これらの中には周縁に押圧を施す404や巻貝の压痕が残る408がある。400は磨消繩文を飾る壺で、胴部に貼り付けた双耳の上縁を結ぶように突帯をめぐらす。外面にはベンガラと



第34図 土器溜まり出土遺物 3(1/3・1/4)

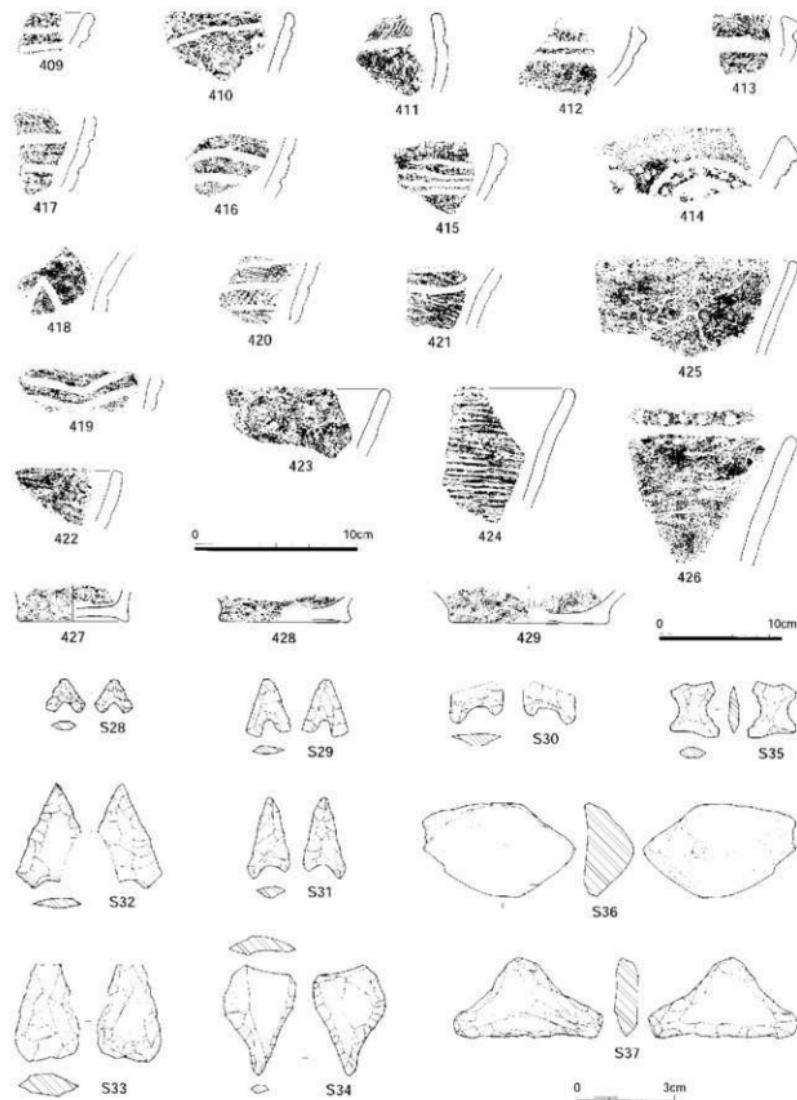
見られる赤色顔料が遺存する。

遺構に伴わない遺物（第35図、図版15）

ここで説明する遺物は遺構検出中に出土したもののか、第1章第2節で述べたような縫縫から出土遺構が不明になったものである。409は口縁部を隆起で画する深鉢である。410は斜め上方にのびる口縁部に横走する「」字文を描く。崩落鉢文を飾る411は波状口縁をもつ深鉢である。414は大きな波状をなす深鉢の口縁部で、厚くつくられた端部は面をなす。波頂部には弧状の刺突文帯を飾り、堅穴住居3の192と同一個体の可能性がある。422～426は無文の深鉢で、426は口縁端部に刻み目を施す。高台底427と凹底428は深鉢、大形の平底429は浅鉢になる可能性がある。

石器はいずれもサヌカイト製で、石鐵のほか石錐、石匙などがある。石錐S28～33は基部を抉る四基鐵で、長さ1cm、幅1cm、重量0.2gのS28から長さ3cm、重量1.5gのS32まである。また、長さ3cm、幅1.9cmを測るS33は未成品と見られる。S34は側縁を加工した石錐で、長さ3.3cm、幅2.2cm、重量3.5gを測る。長さ1.6cm、幅1.4cm、重量0.8gを測るS35は、両端から抉りを入れた糸巻形の異形石器である。三角形に整えられたS37は横型の石匙で、長さ4.6cm、幅2.4cm、重量8.6gを測る。S36は長さ9.4cm、幅5.7cmあるサヌカイトの円錐を半割したもので、このほかに長さ19.4cm、幅19.1cm、厚さ4.2cm、重量1.6kgの板状を呈する素材も出土している。

(亀山)



第35図 遺構に伴わない遺物(1/3・1/4・2/3)

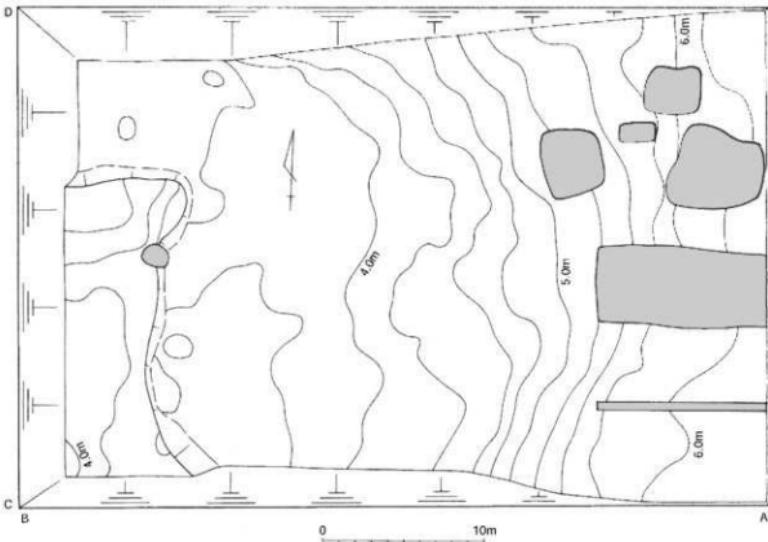
第2節 TA区の調査

1 概要

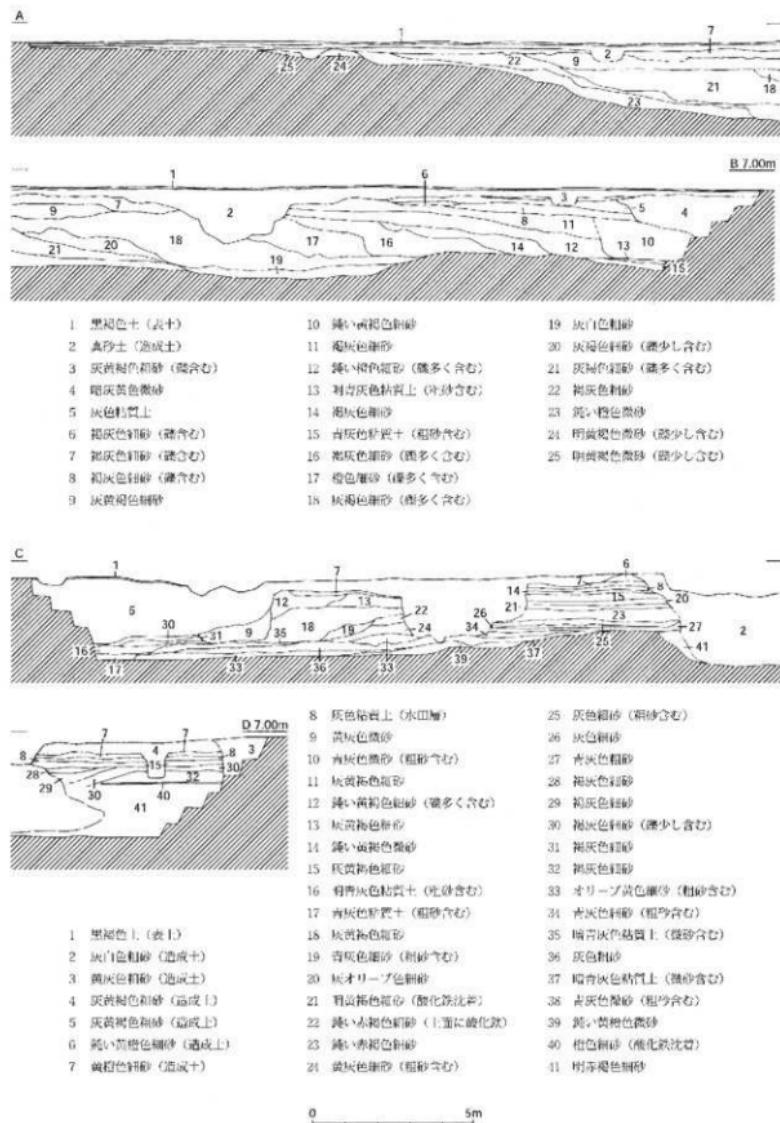
位置と層位（第4・36・37図）

TA区はSA区の南約75mの地点に位置する。東側部分は丘陵斜面を削りし学校用地を造成していいたため、地山面が露出していた。

調査区の北側と南側に設定されていた確認調査のトレーニングを、それぞれ西方向に拡張して地山面まで深く掘り下げるところ、北側と南側では土層の堆積状況が著しく異なることが判明した。すなわち、北側は表土面から地山面まで灰白色を呈する粗砂が厚く堆積しているだけで、遺構や遺物は検出できなかったが、南側では灰褐色の砂礫で覆われた微高地状の高まりと、その上に堆積する遺物包含層（第37図上段6～8層）を確認した。この遺物包含層は、上位に中世の土器や陶磁器が、下位に古代の土器が多く認められた。さらに詳しく状況を把握するため、調査区の西側に南北方向のトレーニングを新しく設定して掘り下げる。その結果、微高地状の高まりが存在するのは南西部分のみであり、東側の丘陵斜面との間に幅15～20mの河床が健形を呈するように北西から南東へ向けて流れていることが判明した。また、その流路が完全に埋積した後、古代～中世の遺物が東方から流入して包含層を形成したものと考えられた。



第36図 TA区全体図 (1/300)



第37図 T A区土層断面図 (1/150)

2 遺構・遺物

河道（第36・37、図版16）

TA区の南西で検出した微高地状の高まりは、南北18m、東西8mの長方形を呈し、その北・東辺は高さ1mあまりの崖面をなしていた。東側の丘陵から延びる斜面との間は幅15~20mの溝状を呈し、北西から南東へ流走する河道の痕跡と考えられた。河道内には灰白色の粗砂が厚く堆積していたものの、長期にわたって水が流れた様子はうかがわえない。

この砂層からは摩滅した縄文時代早期の押型文土器430が出土しており、河道の形成はこの頃まで遡る可能性がある。

出土遺物（第38~40図、図版17）

TA区から出土した遺物の多くは、西側に遺存していた包含層に伴うもので、東方から流入したものと考えられる。

430は河道から出土した縄文土器の深鉢で、摩滅が著しいものの外面に山形の押型文が見られる。

431は弥生時代中期中葉の壺で、わずかに肥厚した口縁部を櫛描文や刺突文で飾る。

古墳時代の土器は図示していないが、前期の高杯や後期の壺・製塙土器などがごく少量出土している。

432~449は奈良~平安時代の須恵器である。蓋は総じて遺存が悪く、わずかに基石状のつまみをもつ432のみ図示した。高台をもつ杯には、口径に比して浅い434・435と深い436・437がある。また、438のような稜楕や転用楕と見られる433もある。439は口縁部を失っているが、20cmを超える高台をからして皿になるものと思われる。灰白色の軟質に焼成された440は、断面三角形の高台を貼り付ける平安時代の杯である。441は平瓶、444は壺の口縁部である。肩の張る442・443は、いずれも口頭部を欠いているが、長頸壺になる可能性が高い。446は上方に開く広口壺の頸部で平安時代にまで下る。447~449は中・大形の壺の口縁部である。

450は断面三角形の低い高台を貼り付けた内面黒色の楕で、この地域の黒色土器でも占相を呈する。451は和泉型の瓦器楕、452は備前焼の楕である。備前焼の楕は灰白色の軟質に焼成されたものが多く、小皿455・456とともに底部に糸切り痕を残す。これらに比して上師器の楕・小皿は少なく、かろうじて453・454を図化できたにすぎない。458・459は土師器の壺、460は壺である。461は三足を備えた鍋で、この地域では13世紀以降に現れる畿内系の瓦質土器である。

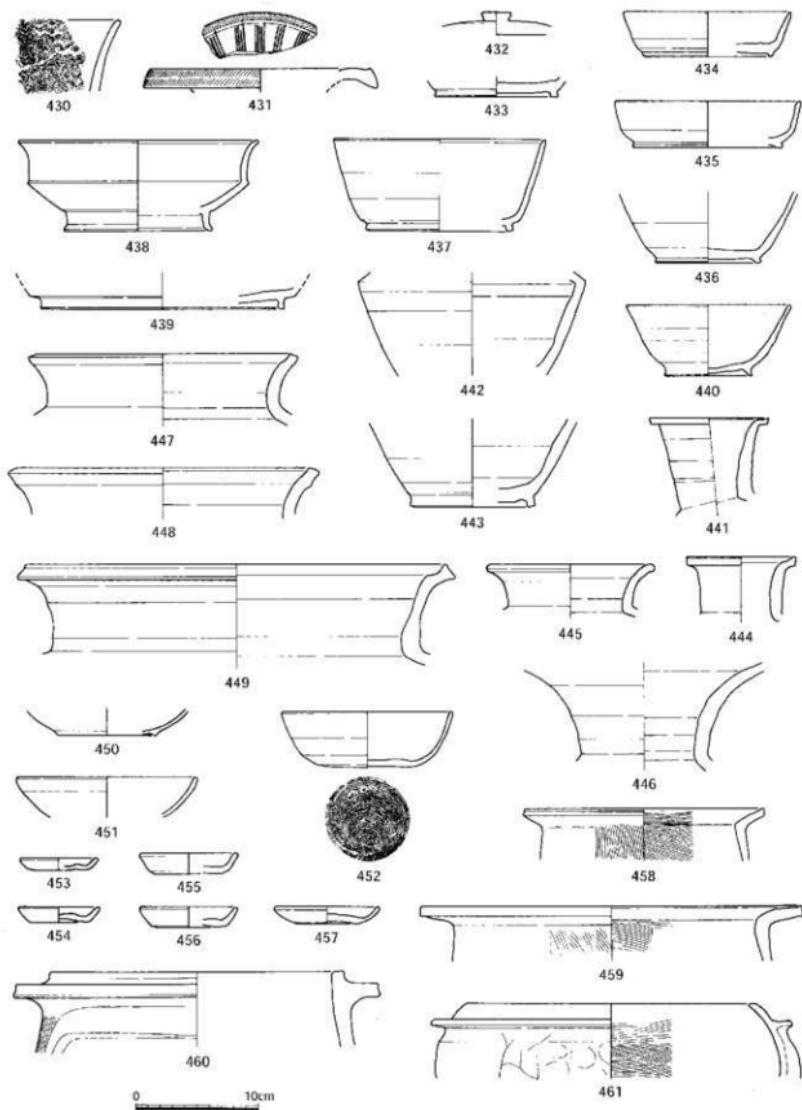
462~466・468~476は鎌倉~江戸時代の備前焼で、擂鉢462~466や壺468~470・475・476、壺472・473、匣鉢471、平鉢474がある。また467は18世紀の関西系擂鉢である。

縫釉陶器の楕・IIIには9世紀前半の洛北岸477と長門岸478がある。また、東海産の灰釉陶器には楕479と瓶480が見られる。481~484は白磁碗、485~489は青磁碗で、鎌倉~室町時代にわたっている。このうち、487・488は高台に沿って体部を意図的に打ち欠き転用している。490は17世紀前半の唐津の皿で、見込みに砂目積みの痕跡を残す。

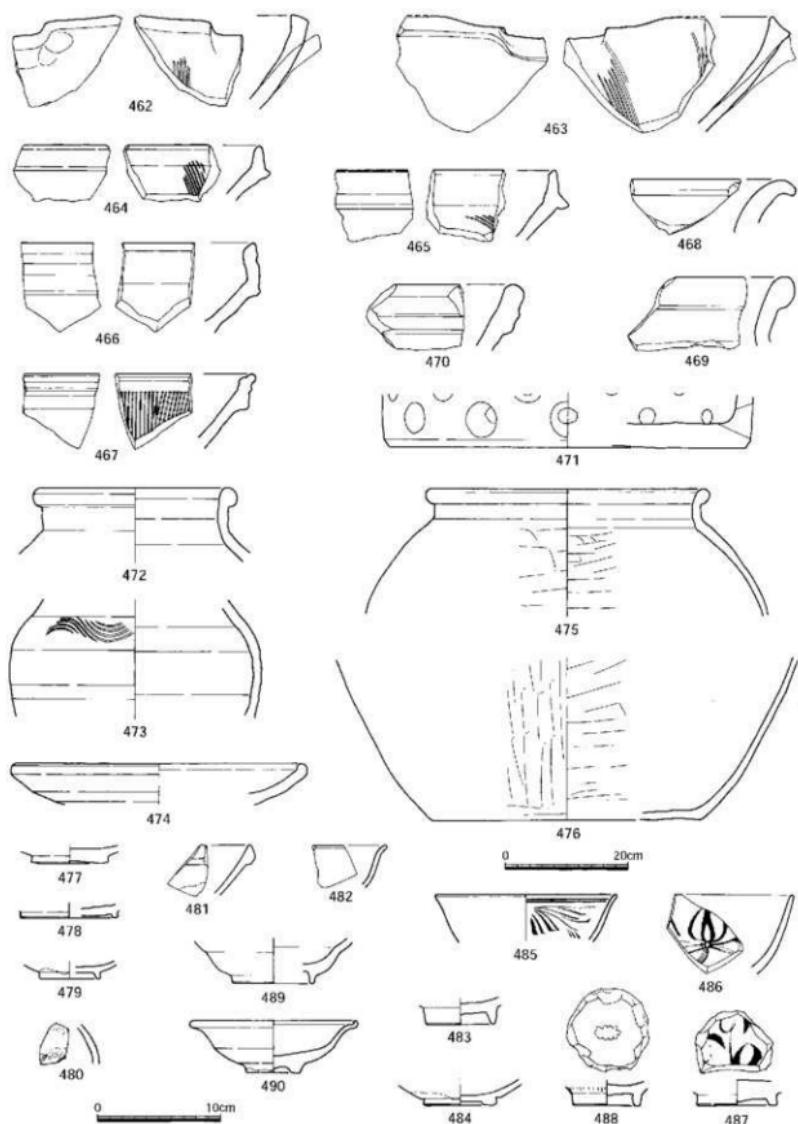
十鍾は、重量31gの有溝C1・2と3~68gの管状C3~10、10数gの棒状C11を図示した。また、少量出土した瓦はいずれも円面に布目を残す半瓦で、縫目叩きC13と格子目叩きC14・15がある。

金属製品には、銅鏡（北宋鏡M1~3・新寛永M4）や煙管M5のほか、鉄釘が2点出土しているが、ここでは図示していない。

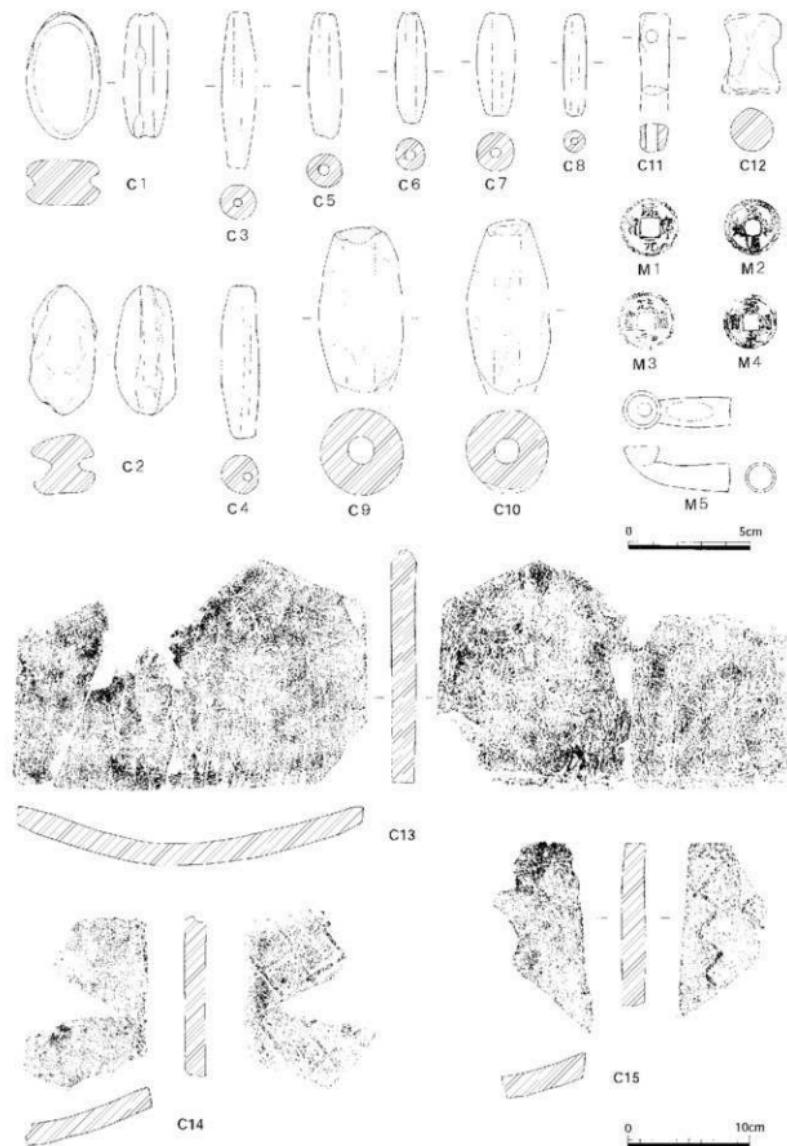
（福田）



第38図 T A区出土遺物 1 (1/4)



第39図 TA区出土遺物2(1/4・1/8)



第40図 T A区出土遺物 3 (1/2 - 1/4)

第3節 BD区の調査

1 概要

位置と層位（第4・41図）

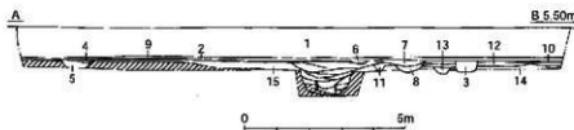
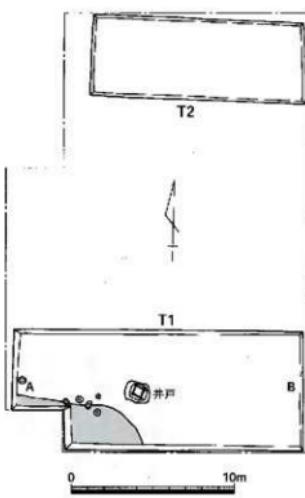
BD区は、高校敷地内の東端に位置する。周辺は「武道館」の建設に際して造成が行われており、厚さ1m前後にわたって真砂土が入れられている。造成上の直下には、旧水田耕作土が残されており、以下暗黄灰色土、黄灰色土、暗灰褐色土と続き、黄褐色砂質の基盤土層に至る。井戸や柱穴群等の遺構は、水田耕作土直下の暗黄灰色土上面で検出され、上部は削平を受けているものと思われる。また、須恵器を含む暗灰色の包含層は、調査区南西部の斜面に部分的に残されているのみである。

2 遺構・遺物

井戸（第41～43図、巻頭図版4）

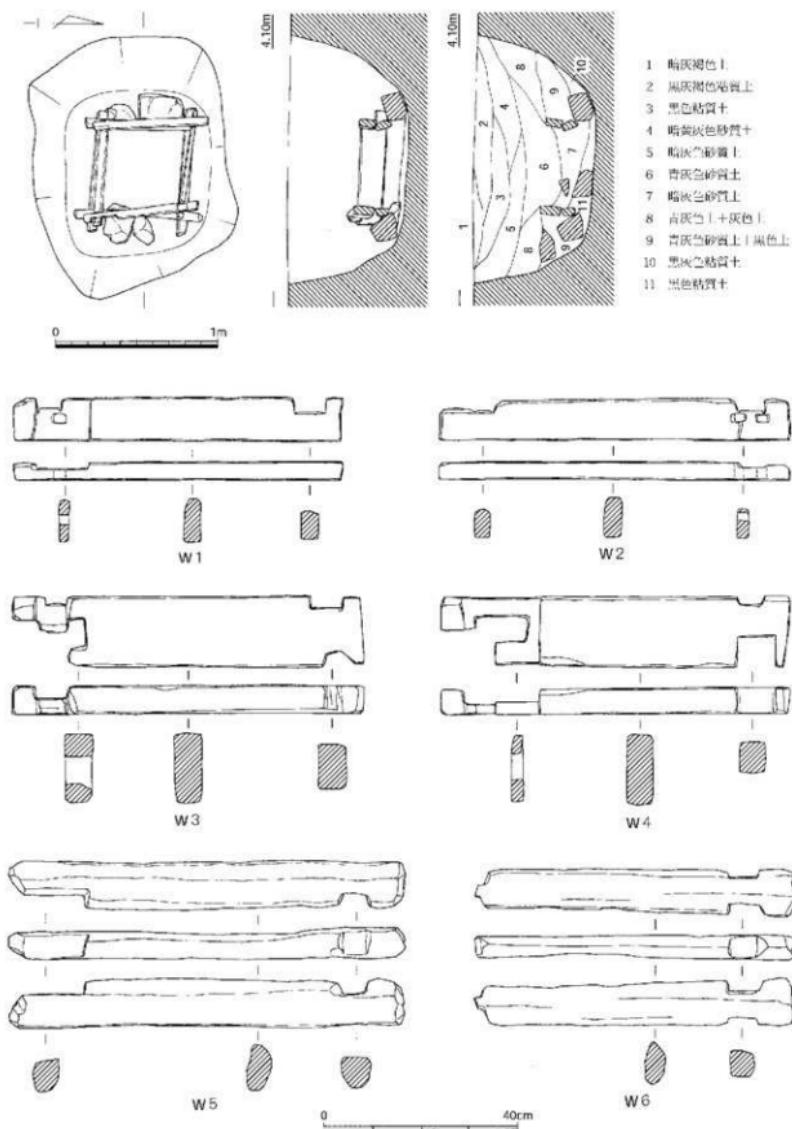
T1の中央やや西寄りで検出された。井戸の上部は削平されており、井戸底から約1mの高さまでが残存している。1.6×1.2mのややいびつな長方形の掘り方の中央には、内法約45cm四方、現存高約20cmの方形の木製井戸枠が据えられている。井戸枠は、相欠き仕口横板組により2段分が残されており、上段は長さ70cm前後の納穴等が残された建築用板材を転用したもので、両端には井戸枠として組み合わせるための切欠が入れられている。下段は、両端に切欠を入れた径10cmほどの表皮が残る丸太を半蔵した材を用いており、人頭人の角砾の上に据えられている。

井戸底から遺物は検出されていないが、井戸内の壁土上層から杯益や壺などの須恵器片および甕や皿などの土師器片が出土している。

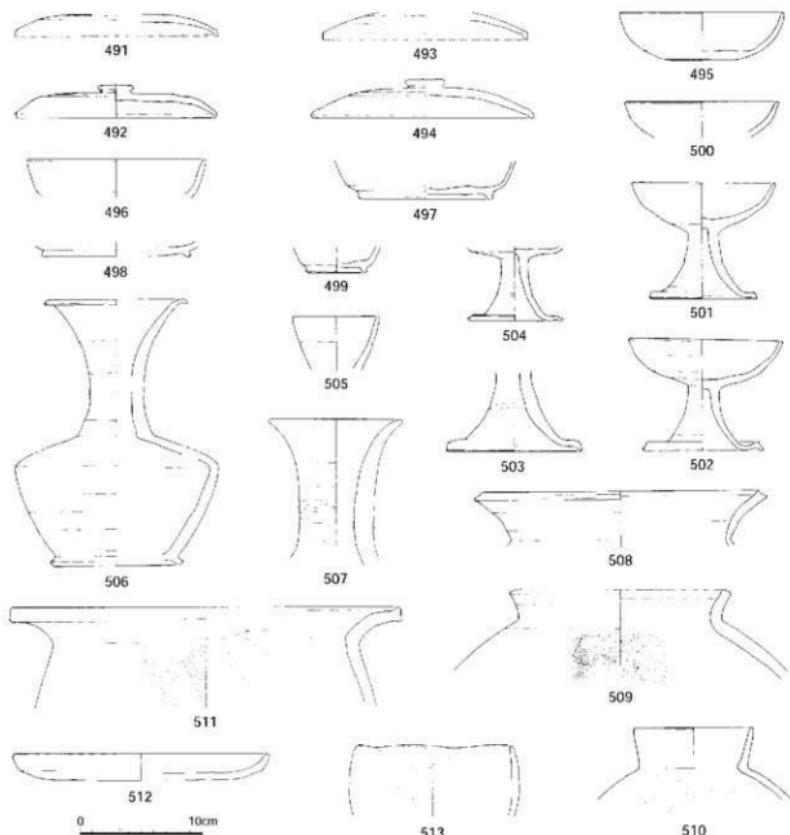


1 暗黄褐色土（造成土）	6 暗褐色土+黄褐色土	11 黒灰色土
2 暗灰色土（水田耕作土）	7 脱灰褐色土	12 黄灰色土
3 灰褐色土+灰色土（暗黒）	8 暗黄褐色土+暗灰色土	13 暗灰色土
4 灰褐色土+黄褐色土	9 暗褐色土（水田耕作土）	14 黄灰色土+暗灰色土
5 噴灰褐色土（鉛膏土）	10 暗黄褐色土	15 噴灰褐色土（漆多く含む）

第41図 全体図 (1/300)・土層断面図 (1/150)



第42図 井戸 (1/30)・出土部材 (1/10)



第43図 BD区出土遺物（1/4）

出土遺物（第43図、巻頭図版4）

出土遺物には、須恵器、土師器および製塩土器等が見られた。これらの遺物は、T 1 南西部の斜面の包含層で最も多く出土し、井戸内の埋土上層および井戸掘り方の埋土中からも出土している。

包含層出土の遺物には須恵器が多く見られ、扁平なつまみをもつ蓋494や高台の付かない杯495、低い高台をもつ杯497・498をはじめ、長脚で口縁部が丸みをもって立ち上がる高杯500～503や、肩に明瞭な棱をもち良く外反する口頭部をもつ長頸壺506などがある。井戸の埋土からは、長頸壺の口頭部507や壺508などの須恵器とともに土師器の皿512や壺511が出土している。また、井戸掘り方の埋土中からは、口縁部が内湾して立ち上がり、外面と口縁内面に指頭圧痕の見られる製塩土器513も出土している。

(福本)

縄文土器観察表

番号	出土位置	地盤	種類	目次	形状	性状	文様	測定	色	器種	器名	種別
1	縄文土器1 床下	深 色	I 横形	1.0	側面文	ナシ	赤茶・褐色	1.0×5mmの砂程	褐色	縄文		
2	縄文土器1 床下	深 色	I 横形	1.2	側面文	ナシ	褐色	0.5×1mmの砂程	褐色	縄文		
3	縄文土器1 床下	深 色	I 横形	1.6	側面文	ナシ	赤茶・褐色	1~1.5mmの砂程	褐色	縄文		
4	縄文土器1 床下	深 色	I 横形	0.7	皮膜・半焼付箇所	ナシ	赤茶	0.5~1mmの砂程	土本式	縄文		
5	縄文土器1 床下	深 色	I 横形	0.5	表面文装飾	ナシ	褐色	0.5~1.5mmの砂程	褐色	縄文		
6	縄文土器1 床下	深 色	I 横形	0.5	表面文装飾	ナシ	褐色	0.5~1mmの砂程	褐色	縄文		
7	縄文土器1 床下	深 色	I 横形	0.7	側面文(横)	ナシ	褐色	0.5~1mmの砂程	褐色	縄文		
8	縄文土器1 床下	深 色	I 横形	1.4	文部文(横)	ナシ	褐色	0.5~2.5mmの砂程	褐色	縄文		
9	縄文土器1 床下	深 色	I 横形	0.5	文部文(横)	ナシ	褐色	0.5~1mmの砂程	褐色	縄文		
10	縄文土器1 床下	深 色	I 横形	0.5	皮膜文(横)	ナシ	褐色	0.5~1mmの砂程	褐色	縄文		
11	縄文土器1 床下	深 色	I 横形	0.5	皮膜文(横)	ナシ	褐色	0.5~1mmの砂程	褐色	縄文		
12	縄文土器1 床下	深 色	I 横形	0.8	皮膜文(横)	ナシ	褐色	0.5~1.5mmの砂程	褐色	縄文		
13	縄文土器1 床下	深 色	I 横形	0.5	皮膜文(横)	ナシ	褐色	0.5~1.5mmの砂程	褐色	縄文		
14	縄文土器1 床下	深 色	I 横形	11.0	側面文(横)と 底面	ナシ	褐色	0.5~1mmの砂程	褐色	縄文		
15	縄文土器1 床下	深 色	I 横形	1.5	側面文(横)と 底面	ナシ	褐色	0.5~1mmの砂程	褐色	縄文		
16	縄文土器1 床下	深 色	I 横形	1.0	側面文(横)と 底面	ナシ	褐色	0.5~1mmの砂程	褐色	縄文		
17	縄文土器1 床下	深 色	I 横形	0.6	皮膜文(横)	ナシ	褐色	0.5~1mmの砂程	褐色	縄文		
18	縄文土器1 床下	深 色	I 横形	0.5	皮膜文(横)	ナシ	褐色	0.5~1mmの砂程	褐色	縄文		
19	縄文土器1 床下	深 色	I 横形	0.5	側面文(横)	ナシ	褐色	0.5~2mmの砂程	褐色	縄文		
20	縄文土器1 床下	深 色	I 横形	28.0	側面文(横)	ナシ	褐色	1~3mmの砂程	褐色	縄文		
21	縄文土器1 床下	深 色	I 横形	0.6	側面文(横)	ナシ	褐色	0.5~1mmの砂程	褐色	縄文		
22	縄文土器1 床下	深 色	I 横形	33.0	側面文(横)	ナシ	褐色	1~3mmの砂程	褐色	縄文		
23	縄文土器1 床下	深 色	I 横形	0.5	側面文(横)	ナシ	褐色	0.5~1mmの砂程	褐色	縄文		
24	縄文土器1 床下	深 色	I 横形	0.8	側面文(横)と 底面	ナシ	褐色	0.5~1mmの砂程	褐色	縄文		
25	縄文土器1 床下	深 色	I 横形	0.5	側面文(横)	ナシ	褐色	0.5~1.5mmの砂程	褐色	縄文		
26	縄文土器1 床下	深 色	I 横形	0.5	側面文(横)	ナシ	褐色	0.5~2mmの砂程	褐色	縄文		
27	縄文土器1 床下	深 色	I 横形	0.5	側面文(横)	ナシ	褐色	0.5~4mmの砂程	褐色	縄文		
28	縄文土器1 床下	深 色	I 横形	0.5	側面文(横)	ナシ	褐色	0.5~5mmの砂程	褐色	縄文		
29	縄文土器1 床下	深 色	I 横形	0.5	側面文(横)	ナシ	褐色	0.5~2mmの砂程	褐色	縄文		
30	縄文土器1 床下	深 色	I 横形	0.8	側面文(横)	ナシ	褐色	0.5~3mmの砂程	褐色	縄文		
31	縄文土器1 床下	深 色	I 横形	1.5	側面文(横)	ナシ	褐色	0.5~3mmの砂程	褐色	縄文		
32	縄文土器1 床下	深 色	I 横形	13.5	側面文(横)	ナシ	褐色	0.5~3mmの砂程	褐色	縄文		
33	縄文土器1 床下	深 色	I 横形	0.5	皮膜文(横)	ナシ	褐色	0.5~3mmの砂程	褐色	縄文		
34	縄文土器1 床下	深 色	I 横形	7.4	側面文(横)	ナシ	褐色	0.5~3mmの砂程	褐色	縄文		
35	縄文土器1 床下	深 色	I 横形	1.5	側面文(横)	ナシ	褐色	0.5~3mmの砂程	褐色	縄文		
36	縄文土器1 床下	深 色	I 横形	13.0	側面文(横)	ナシ	褐色	0.5~3mmの砂程	褐色	縄文		
37	縄文土器1 床下	深 色	I 横形	0.5	ナシ	ナシ	褐色	0.5~1mmの砂程	褐色	縄文		
38	縄文土器2 床下	深 色	I 横形	1.0	側面文	ナシ	褐色	0.5~2mmの砂程	褐色	縄文		
39	縄文土器2 床下	深 色	I 横形	0.8	皮膜文(横)	ナシ	褐色	0.5~1mmの砂程	褐色	縄文		
40	縄文土器2 床下	深 色	I 横形	0.5	皮膜文(横)	ナシ	褐色	0.5~1mmの砂程	褐色	縄文	(A)木式	
41	縄文土器2 床下	深 色	I 横形	0.7	側面文	ナシ	褐色	0.5~2mmの砂程	褐色	縄文		
42	縄文土器2 床下	深 色	I 横形	0.5	皮膜文(横)	ナシ	褐色	0.5~2mmの砂程	褐色	縄文		
43	縄文土器2 床下	深 色	I 横形	0.5	皮膜文(横)	ナシ	褐色	0.5~2mmの砂程	褐色	縄文		
44	縄文土器2 床下	深 色	I 横形	0.2	側面文(横)	ナシ	褐色	0.5~2mmの砂程	褐色	縄文		
45	縄文土器2 床下	深 色	I 横形	0.6	皮膜文(横)	ナシ	褐色	0.5~2mmの砂程	褐色	縄文		
46	縄文土器2 床下	深 色	I 横形	0.4	皮膜文(横)	ナシ	褐色	0.5~2mmの砂程	褐色	縄文		
47	縄文土器2 床下	深 色	I 横形	0.4	皮膜文(横)	ナシ	褐色	0.5~2mmの砂程	褐色	縄文		
48	縄文土器2 床下	深 色	I 横形	0.4	皮膜文(横)	ナシ	褐色	0.5~2mmの砂程	褐色	縄文		

品名	文様	地	色	目	厚	文種	發	心	四	船	備考
49 縦文(山)2 下 横	深 薄	褐色	0.3	縦筋文(山)	アテ	1.5~2mmの細	DYR 5.1	0.5~4mmの細			
50 縦文(山)2 上 横	深 薄	褐色	1.9	縦筋文(山)	アテ	1.5~2mmの細	DYR 5.4	0.5~3mmの細			
51 縦文(山)2 下 横	深 薄	褐色	0.4	縦筋文(山)	アテ	1.5~2mmの細	DYR 5.4	0.5~3mmの細			
52 縦文(山)2 1. 純	深 薄	褐色	0.9	縦筋文(山)	アテ	1.5~2mmの細	DYR 5.2	0.5~1mmの細			
53 縦文(山)2 上 横	深 薄	褐色	1.2	縦筋文(山)	アテ	1.5~2mmの細	DYR 5.3	0.5~5mmの細			
54 縦文(山)2 2. 純	深 薄	褐色	0.3	縦筋文(山)	アテ	1.5~2mmの細	DYR 5.2	0.5~1mmの細			
55 縦文(山)2 3. 純	深 薄	褐色	0.7	縦筋文(山)	アテ	1.5~2mmの細	DYR 5.3	0.5~1mmの細			
56 縦文(山)2 下 横	深 薄	褐色	1.0	縦筋文(山)	アテ	1.5~2mmの細	DYR 5.4	0.5~2mmの細少	Sと同一個		
57 縦文(山)2 中	深 薄	褐色	0.7	縦筋文(山)	アテ	1.5~2mmの細	DYR 5.5	0.5~3mmの細			
58 縦文(山)2 2. 純	深 薄	褐色	0.4	縦筋文(山)	アテ	1.5~2mmの細	DYR 5.2	0.5~1mmの細			
59 縦文(山)2 3. 純	深 薄	褐色	0.5	縦筋文(山)	アテ	1.5~2mmの細	DYR 5.3	0.5~3mmの細			
60 縦文(山)2 4. 純	深 薄	褐色	0.6	縦筋文(山)	アテ	1.5~2mmの細	DYR 5.4	0.5~2mmの細			
61 縦文(山)2 5. 純	深 薄	褐色	0.7	縦筋文(山)	アテ	1.5~2mmの細	DYR 5.5	0.5~3mmの細			
62 縦文(山)2 6. 純	深 薄	褐色	0.5	縦筋文(山)	アテ	1.5~2mmの細	DYR 5.4	0.5~1mmの細	比較標		
63 縦文(山)2 7. 純	深 薄	褐色	0.3	縦筋文(山)	アテ	1.5~2mmの細	DYR 5.3	0.5~1mmの細			
64 縦文(山)2 8. 純	深 薄	褐色	0.1	縦筋文(山)	アテ	1.5~2mmの細	DYR 5.2	0.5~1mmの細			
65 縦文(山)2 9. 純	深 薄	褐色	0.4	縦筋文(山)	アテ	1.5~2mmの細	DYR 5.3	0.5~3mmの細			
66 縦文(山)2 10. 純	深 薄	褐色	0.2	縦筋文(山)	アテ	1.5~2mmの細	DYR 5.2	0.5~3mmの細			
67 縦文(山)2 11. 純	深 薄	褐色	0.3	縦筋文(山)	アテ	1.5~2mmの細	DYR 5.3	0.5~3mmの細			
68 縦文(山)2 12. 純	深 薄	褐色	0.1	縦筋文(山)	アテ	1.5~2mmの細	DYR 5.2	0.5~1mmの細			
69 縦文(山)2 13. 純	深 薄	褐色	0.4	縦筋文(山)	アテ	1.5~2mmの細	DYR 5.3	0.5~3mmの細			
70 縦文(山)2 14. 純	深 薄	褐色	0.2	縦筋文(山)	アテ	1.5~2mmの細	DYR 5.2	0.5~3mmの細			
71 縦文(山)2 15. 純	深 薄	褐色	0.3	縦筋文(山)	アテ	1.5~2mmの細	DYR 5.3	0.5~3mmの細多			
72 縦文(山)2 16. 純	深 薄	褐色	0.2	縦筋文(山)	アテ	1.5~2mmの細	DYR 5.2	0.5~3mmの細			
73 縦文(山)2 17. 純	深 薄	褐色	0.1	縦筋文(山)	アテ	1.5~2mmの細	DYR 5.1	0.5~1mmの細			
74 縦文(山)2 18. 純	深 薄	褐色	0.3	縦筋文(山)	アテ	1.5~2mmの細	DYR 5.3	0.5~3mmの細			
75 縦文(山)2 19. 純	深 薄	褐色	0.3	縦筋文(山)	アテ	1.5~2mmの細	DYR 5.3	0.5~3mmの細			
76 縦文(山)2 20. 純	深 薄	褐色	0.1	縦筋文(山)	アテ	1.5~2mmの細	DYR 5.2	0.5~1mmの細			
77 縦文(山)2 21. 純	深 薄	褐色	0.3	縦筋文(山)	アテ	1.5~2mmの細	DYR 5.3	0.5~3mmの細			
78 縦文(山)2 22. 純	深 薄	褐色	32.0	縦筋文(山)	アテ	1.5~2mmの細	DYR 5.3	0.5~3mmの細少			
79 縦文(山)2 23. 純	深 薄	褐色	0.4	縦筋文(山)	アテ	1.5~2mmの細	DYR 5.2	0.5~2mmの細			
80 縦文(山)2 24. 純	深 薄	褐色	33.4	縦筋文(山)	アテ	1.5~2mmの細	DYR 5.3	0.5~3mmの細多			
81 縦文(山)2 25. 純	深 薄	褐色	0.4	縦筋文(山)	アテ	1.5~2mmの細	DYR 5.3	0.5~3mmの細			
82 縦文(山)2 26. 純	深 薄	褐色	0.8	縦筋文(山)	アテ	1.5~2mmの細	DYR 5.4	0.5~3mmの細			
83 縦文(山)2 27. 純	深 薄	褐色	0.7	縦筋文(山)	アテ	1.5~2mmの細	DYR 5.3	0.5~3mmの細			
84 縦文(山)2 28. 純	深 薄	褐色	0.2	縦筋文(山)	アテ	1.5~2mmの細	DYR 5.2	0.5~3mmの細			
85 縦文(山)2 29. 純	深 薄	褐色	0.2	縦筋文(山)	アテ	1.5~2mmの細	DYR 5.2	0.5~3mmの細			
86 縦文(山)2 30. 純	深 薄	褐色	1.1	縦筋文(山)	アテ	1.5~2mmの細	DYR 5.2	0.5~2mmの細	後と同一	個体	
87 縦文(山)2 31. 純	深 薄	褐色	0.4	縦筋文(山)	アテ	1.5~2mmの細	DYR 5.2	0.5~2mmの細			
88 縦文(山)2 32. 純	深 薄	褐色	0.3	縦筋文(山)	アテ	1.5~2mmの細	DYR 5.2	0.5~2mmの細			
89 縦文(山)2 33. 純	深 薄	褐色	0.2	縦筋文(山)	アテ	1.5~2mmの細	DYR 5.2	0.5~2mmの細			
90 縦文(山)2 34. 純	深 薄	褐色	0.9	縦筋文(山)	アテ	1.5~2mmの細	DYR 5.3	0.5~3mmの細			
91 縦文(山)2 35. 純	深 薄	褐色	0.1	縦筋文(山)	アテ	1.5~2mmの細	DYR 5.2	0.5~1mmの細			
92 縦文(山)2 36. 純	深 薄	褐色	0.7	縦筋文(山)	アテ	1.5~2mmの細	DYR 5.4	0.5~3mmの細			
93 縦文(山)2 37. 純	深 薄	褐色	0.8	縦筋文(山)	アテ	1.5~2mmの細	DYR 5.5	0.5~4mmの細			
94 縦文(山)2 38. 純	深 薄	褐色	0.7	縦筋文(山)	アテ	1.5~2mmの細	DYR 5.4	0.5~3mmの細			
95 縦文(山)2 39. 純	深 薄	褐色	0.7	縦筋文(山)	アテ	1.5~2mmの細	DYR 5.4	0.5~3mmの細			
96 縦文(山)2 40. 純	深 薄	褐色	0.9	縦筋文(山)	アテ	1.5~2mmの細	DYR 5.5	0.5~3mmの細			

番号	上器類別	おもな 種類	部	寸 法 (mm)	記 号	文 様	構 造	色 調	基 土	注 考
145	縫穴付器3	深 溝	溝部	0.8 0.1	縫穴付文様 (縫文)	ナシ	灰褐色 D.S.R.6.~7.	0.2~2mmの砂質		
146	縫穴付器3	深 溝	溝部	0.4	縫穴付文様	ナシ	灰褐色 D.S.R.6.~7.	0.2~2mmの砂質 T.S.V.R.6.~7.	跡?	
147	縫穴付器3	深 溝	溝部	0.8 0.4	縫穴付文様 (縫文)	ナシ	灰褐色 T.S.V.R.6.~7.	0.2~2mmの砂質	既存・複数	既存・複数
148	縫穴付器3	深 溝	溝部	0.6 0.1	縫穴付文様 (縫文)	ナシ	灰褐色 D.Y.R.4.~5.	0.2~1mmの砂質	既存・複数	既存・複数
149	縫穴付器3	深 溝	溝部	0.9 0.2	縫穴付文様	ナシ	灰褐色 D.S.R.6.~7.	0.2~1mmの砂質	既存・複数	既存・複数
150	縫穴付器3	深 溝	溝部	0.9 0.4	縫穴付文様	ナシ	灰褐色 T.S.V.R.6.~7.	0.2~2mmの砂質		
151	縫穴付器3	深 溝	溝部	0.8 0.5	縫穴付文様	ナシ	灰褐色 D.Y.R.7.~8.	0.2~2mmの砂質		
152	縫穴付器3 下 部	深 溝	溝部	0.9 0.4	縫穴付文様 (縫文)	ナシ	灰褐色 D.Y.R.7.~8.	0.2~2mmの砂質		
153	縫穴付器3 下 部	深 溝	溝部	1.1 0.1	縫穴付文様	ナシ	灰褐色 D.Y.R.7.~8.	0.2~2mmの砂質		
154	縫穴付器3	深 溝	溝部	0.8 0.5	縫穴付文様	ナシ	灰褐色 D.Y.R.7.~8.	0.2~1mmの砂質		
155	縫穴付器3 下 部	深 溝	溝部	15.0 0.1	縫穴付文様 (縫文)	ナシ	灰褐色 D.Y.R.4.~5.	0.5~5mmの砂質		
156	縫穴付器3 下 部	深 溝	溝部	0.8 0.4	縫穴付文様	ナシ	灰褐色 D.Y.R.5.~6.	0.2~2mmの砂質		
157	縫穴付器3 上 部	深 溝	溝部	0.8 0.4	縫穴付文様	ナシ	灰褐色 D.Y.R.7.~8.	0.2~2mmの砂質		
158	縫穴付器3 上 部	深 溝	溝部	0.8 0.3	縫穴付文様 (縫文)	ナシ	灰褐色 D.Y.R.7.~8.	0.2~2mmの砂質		
159	縫穴付器3 下 部	深 溝	溝部	16.0 0.1	縫穴付文様 (縫文)	ナシ	灰褐色 D.Y.R.6.~7.	0.2~1mmの砂質		
160	縫穴付器3	深 溝	溝部	0.8 0.5	縫穴付文様	ナシ	灰褐色 D.Y.R.5.~6.	0.2~2mmの砂質		
161	縫穴付器3	深 溝	溝部	1.0 0.3	縫穴付文様	ナシ	灰褐色 D.Y.R.5.~6.	0.2~2mmの砂質		
162	縫穴付器3 下 部	深 溝	溝部	0.8 0.1	縫穴付文様 (縫文)	ナシ	灰褐色 D.Y.R.6.~7.	0.2~3mmの砂質		
163	縫穴付器3	深 溝	溝部	0.5 0.5	縫穴付文様 (縫文)	ナシ	灰褐色 D.Y.R.5.~6.	0.2~1mmの砂質	既存・複数	既存・複数
164	縫穴付器3	深 溝	溝部	0.5 0.3	縫穴付文様 (縫文)	ナシ	灰褐色 D.Y.R.6.~7.	0.2~1mmの砂質	既存・複数	既存・複数
165	縫穴付器3	深 溝	溝部	0.5 0.3	縫穴付文様 (縫文)	ナシ	灰褐色 D.Y.R.6.~7.	0.2~1mmの砂質	既存・複数	既存・複数
166	縫穴付器3	深 溝	溝部	0.5 0.3	縫穴付文様	ナシ	灰褐色 D.Y.R.6.~7.	0.2~1mmの砂質	既存・複数	既存・複数
167	縫穴付器3	深 溝	溝部	0.8 0.3	縫穴付文様 (縫文)	ナシ	灰褐色 D.Y.R.5.~6.	0.2~2mmの砂質		
168	縫穴付器3	深 溝	溝部	0.8 0.4	縫穴付文様	ナシ	灰褐色 D.Y.R.7.~8.	0.2~3mmの砂質		
169	縫穴付器3	深 溝	溝部	0.8 0.4	縫穴付文様	ナシ	灰褐色 D.Y.R.7.~8.	0.2~2mmの砂質		
170	縫穴付器3 上 部	深 溝	溝部	0.5 0.3	縫穴付文様 (縫文)	ナシ	灰褐色 D.Y.R.7.~8.	0.2~1mmの砂質		
171	縫穴付器3 下 部	深 溝	溝部	1.0 0.4	縫穴付文様	ナシ	灰褐色 D.Y.R.6.~7.	0.2~2mmの砂質		
172	縫穴付器3 上 部	深 溝	溝部	0.8 0.4	縫穴付文様	ナシ	灰褐色 D.Y.R.7.~8.	0.2~2mmの砂質		
173	縫穴付器3 上 部	深 溝	溝部	0.6 0.4	縫穴付文様	ナシ	灰褐色 D.Y.R.6.~7.	0.2~2mmの砂質		
174	縫穴付器3 上 部	深 溝	溝部	0.9 0.3	縫穴付文様	ナシ	灰褐色 D.Y.R.6.~7.	0.2~2mmの砂質		
175	縫穴付器3	深 溝	溝部	0.8 0.1	縫穴付文様 (縫文)	ナシ	灰褐色 D.Y.R.5.~6.	0.2~1mmの砂質		
176	縫穴付器3	深 溝	溝部	0.9 0.1	縫穴付文様 (縫文)	ナシ	灰褐色 D.Y.R.5.~6.	0.2~1mmの砂質		
177	縫穴付器3	深 溝	溝部	0.8 0.2	縫穴付文様	ナシ	灰褐色 D.Y.R.6.~7.	0.2~3mmの砂質		
178	縫穴付器3 下 部	深 溝	溝部	0.8 0.5	縫穴付文様	ナシ	灰褐色 D.Y.R.7.~8.	0.2~4mmの砂質		
179	縫穴付器3 上 部	深 溝	溝部	0.8 0.1	縫穴付文様 (縫文)	ナシ	灰褐色 D.Y.R.6.~7.	0.2~2mmの砂質		
180	縫穴付器3 上 部	深 溝	溝部	0.8 0.4	縫穴付文様	ナシ	灰褐色 D.Y.R.6.~7.	0.2~2mmの砂質		
181	縫穴付器3	深 溝	溝部	0.7 0.5	縫穴付文様	ナシ	灰褐色 D.Y.R.6.~7.	0.2~2mmの砂質		
182	縫穴付器3	深 溝	溝部	0.8 0.5	縫穴付文様	ナシ	灰褐色 D.Y.R.6.~7.	0.2~2mmの砂質		
183	縫穴付器3	深 溝	溝部	0.8 0.1	縫穴付文様	ナシ	灰褐色 D.Y.R.6.~7.	0.2~2mmの砂質		
184	縫穴付器3 上 部	深 溝	溝部	0.8 0.1	縫穴付文様 (縫文)	ナシ	灰褐色 D.Y.R.6.~7.	0.2~2mmの砂質		
185	縫穴付器3 上 部	深 溝	溝部	1.0 0.5	縫穴付文様	ナシ	灰褐色 D.Y.R.6.~7.	0.2~3mmの砂質		
186	縫穴付器3	深 溝	溝部	0.8 0.1	縫穴付文様	ナシ	灰褐色 D.Y.R.6.~7.	0.2~2mmの砂質		
187	縫穴付器3 下 部	深 溝	溝部	1.0 0.4	縫穴付文様 (縫文)	ナシ	灰褐色 D.Y.R.7.~8.	0.2~4mmの砂質		
188	縫穴付器3	深 溝	溝部	1.0 0.8	縫穴付文様 (縫文)	ナシ	灰褐色 D.Y.R.6.~7.	0.2~3mmの砂質	既存・複数	既存・複数
189	縫穴付器3	深 溝	溝部	1.0 0.8	縫穴付文様 (縫文)	ナシ	灰褐色 D.Y.R.6.~7.	0.2~3mmの砂質	既存・複数	既存・複数
190	縫穴付器3	深 溝	溝部	0.9 0.5	縫穴付文様	ナシ	灰褐色 D.Y.R.6.~7.	0.2~2mmの砂質	既存・複数	既存・複数
191	縫穴付器3	深 溝	溝部	0.7	縫穴付文	ナシ	灰褐色 D.Y.R.6.~7.	0.2~2mmの砂質		
192	縫穴付器3	深 溝	溝部	0.8 0.5	縫穴文 (縫文)	ナシ	灰褐色 D.Y.R.6.~7.	0.2~2mmの砂質		

番号	河川名	地 点	河 川	上 游	出 水	文 品	種 類	色 相	上 游	目 標
193	豊川(西)3	深 谷	日高川	○	0.9	汎用文通駆	ナシ	に点(黄赤)	3.5~2cmの範囲	
			日高川	○	0.9			10YR 5/6	3	
194	豊川(西)3	深 谷	日高川	○	0.4	汎用文通駆(白)	ナシ	無色	3.5~4cmの範囲	
			日高川	○	0.4	(改変文・路文)		7.5YR 6/6		
195	豊川(西)3	深 谷	東 源	○	0.9	汎用文通駆	ナシ	に点(黄赤)	3.5~5cmの範囲	
			東 源	○	0.9			10YR 5/4	4	
196	豊川(西)3	深 谷	日高川	○	0.7	汎用文通駆(白)	ナシ	に点(黄赤)	3.5~2cmの範囲	
			日高川	○	0.5	(改変文・路文)		10YR 6/3	3	
197	豊川(西)3	深 谷	東 源	○	0.7	汎用文通駆(白)	ナシ	無色	3.5~4cmの範囲	
			東 源	○	0.5			2.5Y 6/2		
198	豊川(西)3	深 谷	東 源	○	0.7	汎用文通駆	ナシ	無色	3.5~2cmの範囲	
			東 源	○	0.4			10YR 8/4	2	
199	豊川(西)3	深 谷	東 源	○	0.9	汎用文(改変)	ナシ	無色	3.5~3cmの範囲	
			東 源	○	0.1			2.5Y 3/1		
200	豊川(西)3	深 谷	東 源	○	0.3	汎用文(改)	ナシ	無色	3.5~2cmの範囲	
			東 源	○	0.3			10YR 6/4		
201	豊川(西)3	深 谷	東 源	○	0.9	汎用文送(改)	ナシ	無色	3.5~3cmの範囲	
			東 源	○	0.4			2.5Y 6/1		
202	豊川(西)3	深 谷	東 源	○	0.1	汎用文送(改)	ナシ	無色	3.5~5cmの範囲	
			東 源	○	0.1			10YR 6/4	4	
203	豊川(西)3	深 谷	東 源	○	0.7	汎用文(改)	ナシ	無色	3.2~13cmの範囲	
			東 源	○	0.3			7.5Y R 5/6	6	
204	豊川(西)3	深 谷	東 源	○	0.9	汎用文通駆	ナシ	に点(黄赤)	3.5~5cmの範囲	
			東 源	○	0.3			10YR 7/4	4	
205	豊川(西)3	深 谷	東 源	○	0.7	西瀬川(航行監視)	ナシ	に点(黄赤)	3.5~2cmの範囲	
			東 源	○	0.4			10YR 7/3		
206	豊川(西)3	深 谷	東 源	○	1.1	汎用文通駆(白)	ナシ	無色	3.5~4cmの範囲	
			東 源	○	0.5			10Y 3/1		
207	豊川(西)3	深 谷	東 源	○	0.9	汎用文通駆	ナシ	汎用色	3.5~2cmの範囲	
			東 源	○	0.4			10YR 3/4		
208	豊川(西)3	深 谷	東 源	○	0.7	汎用文通駆(白)	ナシ	無色	3.5~5cmの範囲	
			東 源	○	0.4			10YR 7/3		
209	豊川(西)3	深 谷	東 源	○	1.1	西瀬川(航行監視)	ナシ	無色	3.5~13cmの範囲	
			東 源	○	0.5			10YR 5/2		
210	豊川(西)3	深 谷	東 源	○	0.9	汎用文通駆	ナシ	無色	3.5~4cmの範囲	
			東 源	○	0.5			10YR 4/4	4	
211	豊川(西)3	深 谷	東 源	○	0.6	汎用文(改)	ナシ	無色	3.5~4cmの範囲	
			東 源	○	0.3	(改)		2.5Y 5/2		
212	豊川(西)3	深 谷	東 源	○	0.7	西瀬川(改)	ナシ	無色	3.5~2cmの範囲	
			東 源	○	0.3	(改)		10Y R 5/2		
213	豊川(西)3	深 谷	東 源	○	0.9	西瀬川(改)	ナシ	無色	3.5~2cmの範囲	
			東 源	○	0.5	(改)		10YR 5/4		
214	豊川(西)3	深 谷	東 源	○	0.6	西瀬川(改)	ナシ	無色	3.2~2cmの範囲	
			東 源	○	0.3	(改)		2.5Y R 4/2		
215	豊川(西)3	深 谷	東 源	○	0.7	西瀬川(改)	ナシ	無色	3.5~5cmの範囲	△△△△→個体
			東 源	○	0.5	(改)		2.5Y 3/2		
216	豊川(西)3	深 谷	東 源	○	0.7	汎用文通駆(改)	ナシ	に点(黄赤)	3.5~5cmの範囲	
			東 源	○	0.3			10Y R 7/3		
217	豊川(西)3	深 谷	東 源	○	0.6	西瀬川(改)	ナシ	無色	3.5~5cmの範囲	
			東 源	○	0.4			10Y R 7/3		
218	豊川(西)3	深 谷	東 源	○	0.6	汎用文通駆	ナシ	無色	3.5~2cmの範囲	
			東 源	○	0.4			10Y R 6/1		
219	豊川(西)3	深 谷	東 源	○	1.1	西瀬川(改)	ナシ	汎用色	3.5~1cmの範囲	
			東 源	○	0.4			10Y R 3/2		
220	豊川(西)3	深 谷	東 源	○	0.6	汎用文通駆	ナシ	無色	3.5~3cmの範囲	
			東 源	○	0.3			7.5Y R 6/6		
221	豊川(西)3	深 谷	東 源	○	0.8	汎用文通駆	ナシ	無色	3.5~3cmの範囲	
			東 源	○	0.5			10Y R 8/2		
222	豊川(西)3	深 谷	東 源	○	0.6	汎用文通駆	ナシ	無色	3.2~3cmの範囲	
			東 源	○	0.3			10Y R 8/6		
223	豊川(西)3	深 谷	東 源	○	0.5	西瀬川(改)+路文	ナシ	無色	3.5~4cmの範囲	
			東 源	○	0.3			2.5Y 8/3		
224	豊川(西)3	深 谷	東 源	○	1.3	西瀬川(改)+路文	ナシ	に点(黄赤)	3.5~1.5cmの範囲	
			東 源	○	0.1	(改)		7.5Y R 6/4	4	
225	豊川(西)3	深 谷	東 源	○	0.7	西瀬川(改)	ナシ	無色	3.5~4cmの範囲	
			東 源	○	0.5			10Y R 7/3		
226	豊川(西)3	深 谷	東 源	○	0.6	西瀬川(改)	ナシ	無色	3.5~5cmの範囲	
			東 源	○	0.4			10Y R 9/4	4	
227	豊川(西)3	深 谷	東 源	○	0.6	西瀬川(改)	ナシ	無色	3.5~3cmの範囲	
			東 源	○	0.3			10Y R 7/4		
228	豊川(西)3	深 谷	東 源	○	1.3	西瀬川(改)	ナシ	無色	3.5~4cmの範囲	△△△△→個体
			東 源	○	0.4	(改)		2.5Y 3/2		
229	豊川(西)3	深 谷	東 源	○	0.7	西瀬川(改)	ナシ	無色	3.5~5cmの範囲	
			東 源	○	0.4			10Y R 7/3		
230	豊川(西)3	深 谷	東 源	○	0.6	西瀬川(改)	ナシ	無色	3.2~1.5cmの範囲	
			東 源	○	0.3			10Y R 5/4		
231	豊川(西)3	深 谷	東 源	○	0.5	西瀬川(改)	ナシ	に点(黄赤)	3.5~3cmの範囲	
			東 源	○	0.2	(改)		7.5Y R 6/4	4	
232	豊川(西)3	深 谷	東 源	○	0.4	西瀬川(改)	ナシ	無色	3.5~3cmの範囲	
			東 源	○	0.1	(改)		10Y R 7/4		
233	豊川(西)3	深 谷	東 源	○	0.6	西瀬川(改)	ナシ	無色	3.5~3cmの範囲	
			東 源	○	0.3			10Y R 7/3		
234	豊川(西)3	深 谷	東 源	○	0.7	西瀬川(改)	ナシ	無色	3.5~5cmの範囲	
			東 源	○	0.3			10Y R 7/3		
235	豊川(西)3	深 谷	東 源	○	0.6	西瀬川(改)	ナシ	無色	3.2~2cmの範囲	
			東 源	○	0.3			10Y R 1/1		
236	豊川(西)3	深 谷	東 源	○	0.8	西瀬川(改)	ナシ	無色	3.5~4cmの範囲	
			東 源	○	0.5			10Y R 7/2		
237	豊川(西)3	深 谷	東 源	○	0.5	西瀬川(改)	ナシ	無色	2.2~3cmの範囲	
			東 源	○	0.2	(改)		7.5Y R 6/4	4	
238	豊川(西)3	深 谷	東 源	○	0.6	西瀬川(改)	ナシ	無色	2.2~3cmの範囲	
			東 源	○	0.3			10Y R 7/2		
239	豊川(西)3	深 谷	東 源	○	0.5	西瀬川(改)	ナシ	無色	2.2~3cmの範囲	
			東 源	○	0.2	(改)		7.5Y R 6/4	4	
240	豊川(西)3	深 谷	東 源	○	0.6	西瀬川(改)	ナシ	無色	2.2~3cmの範囲	
			東 源	○	0.3			10Y R 7/2		
241	豊川(西)3	深 谷	東 源	○	0.5	西瀬川(改)	ナシ	無色	2.2~3cmの範囲	
			東 源	○	0.2	(改)		7.5Y R 6/4	4	
242	豊川(西)3	深 谷	東 源	○	0.6	西瀬川(改)	ナシ	無色	2.2~3cmの範囲	
			東 源	○	0.3			10Y R 7/3		
243	豊川(西)3	深 谷	東 源	○	0.7	西瀬川(改)	ナシ	無色	2.2~3cmの範囲	
			東 源	○	0.3			10Y R 7/3		
244	豊川(西)3	深 谷	東 源	○	0.6	西瀬川(改)	ナシ	無色	2.2~3cmの範囲	
			東 源	○	0.3			10Y R 7/3		
245	豊川(西)3	深 谷	東 源	○	0.6	西瀬川(改)	ナシ	無色	2.2~3cmの範囲	
			東 源	○	0.3			10Y R 7/3		
246	豊川(西)3	深 谷	東 源	○	0.6	西瀬川(改)	ナシ	無色	2.2~3cmの範囲	
			東 源	○	0.3			10Y R 7/3		
247	豊川(西)3	深 谷	東 源	○	0.6	西瀬川(改)	ナシ	無色	2.2~3cmの範囲	
			東 源	○	0.3			10Y R 7/3		
248	豊川(西)3	深 谷	東 源	○	0.6	西瀬川(改)	ナシ	無色	2.2~3cmの範囲	
			東 源	○	0.3			10Y R 7/3		
249	豊川(西)3	深 谷	東 源	○	0.6	西瀬川(改)	ナシ	無色	2.2~3cmの範囲	
			東 源	○	0.3			10Y R 7/3		
250	豊川(西)3	深 谷	東 源	○	0.6	西瀬川(改)	ナシ	無色	2.2~3cmの範囲	
			東 源	○	0.3			10Y R 7/3		
251	豊川(西)3	深 谷	東 源	○	0.6	西瀬川(改)	ナシ	無色	2.2~3cmの範囲	
			東 源	○	0.3			10Y R 7/3		
252	豊川(西)3	深 谷	東 源	○	0.6	西瀬川(改)	ナシ	無色	2.2~3cmの範囲	
			東 源	○	0.3			10Y R 7/3		
253	豊川(西)3	深 谷	東 源	○	0.6	西瀬川(改)	ナシ	無色	2.2~3cmの範囲	
			東 源	○	0.3			10Y R 7/3		
254	豊川(西)3	深 谷	東 源	○	0.6	西瀬川(改)	ナシ	無色	2.2~3cmの範囲	
			東 源	○	0.3			10Y R 7/3		
255	豊川(西)3	深 谷	東 源	○	0.6	西瀬川(改)	ナシ	無色	2.2~3cmの範囲	
			東 源	○	0.3			10Y R 7/3		
256	豊川(西)3	深 谷	東 源	○	0.6	西瀬川(改)	ナシ	無色	2.2~3cmの範囲	
			東 源	○	0.3			10Y R 7/3		
257	豊川(西)3	深 谷	東 源	○	0.6	西瀬川(改)	ナシ	無色	2.2~3cmの範囲	
			東 源	○	0.3			10Y R 7/3		
258	豊川(西)3	深 谷	東 源	○	0.6	西瀬川(改)	ナシ	無色	2.2~3cmの範囲	
			東 源	○	0.3			10Y R 7/3		
259	豊川(西)3	深 谷	東 源	○	0.6	西瀬川(改)	ナシ	無色	2.2~3cmの範囲	
			東 源	○	0.3			10Y R 7/3		
260	豊川(西)3	深 谷	東 源	○	0.6	西瀬川(改)	ナシ	無色	2.2~3cmの範囲	
			東 源	○	0.3			10Y R 7/3		
261	豊川(西)3	深 谷	東 源	○	0.6	西瀬川(改)	ナシ	無色	2.2~3cmの範囲	
			東 源	○	0.3			10Y R 7/3		
262	豊川(西)3	深 谷	東 源	○	0.6	西瀬川(改)	ナシ	無色	2.2~3cmの範囲	
			東 源	○	0.3			10Y R 7/3		
263										

番号	上器種類	おもな 形状	主 要 部	計 算 式	文 様	構 造	Q 値	面 上	説 明
241	扇形上器3 上部	深 縦	直 角	0.7 0.1	扇形文様	ナシ	1.75×R6.7 7.5×R6.7	0.2~2mmの範 囲	
242	扇形上器3 下部	深 縦	直 角	0.7 0.1	扇形文様	ナシ	1.75×R6.7 7.5×R6.7	0.2~2mmの範 囲	
243	扇形上器3 上部	深 縦	直 角	1.0 0.4	扇形文様	ナシ	1.75×R6.7 7.5×R6.7	0.2~2mmの範 囲	
244	扇形上器3 上部	深 縦	直 角	0.6 0.3	扇形文様	ナシ	1.75×R6.7 7.5×R6.7	0.2~2mmの範 囲	
245	扇形上器3 上部	深 縦	直 角	0.7 0.2	扇形文様	ナシ	1.75×R6.7 7.5×R6.7	0.2~2mmの範 囲	
246	扇形上器3 上部	深 縦	直 角	0.7 0.4	扇形文様	ナシ	1.75×R6.7 7.5×R6.7	0.2~2mmの範 囲	
247	扇形上器3 上部	深 縦	直 角	0.7 0.1	扇形文様	ナシ	1.75×R6.7 7.5×R6.7	0.2~2mmの範 囲	
248	扇形上器3 上部	深 縦	直 角	1.0 0.3	扇形文様(丸)	ナシ	1.75×R6.7 7.5×R6.7	0.2~2mmの範 囲	内側式
249	扇形上器3 上部	深 縦	直 角	1.1 0.2	扇形文様(丸)	ナシ	1.75×R6.7 7.5×R6.7	0.2~2mmの範 囲	内側式
250	扇形上器3 上部	深 縦	直 角	0.4 0.1	扇形文様	ナシ	1.75×R6.7 7.5×R6.7	0.2~2mmの範 囲	扇形上器
251	扇形上器3 上部	深 縦	直 角	1.2 0.3	扇形文様(丸)	ナシ	1.75×R6.7 7.5×R6.7	0.2~2mmの範 囲	扇形上器
252	扇形上器3 上部	深 縦	直 角	1.4 0.1	扇形文様(丸)	ナシ	1.75×R6.7 7.5×R6.7	0.2~2mmの範 囲	扇形上器
253	扇形上器3 上部	深 縦	直 角	0.9	扇形ナラフ		2.5×R6.7	0.5~1mmの範 囲	
254	扇形上器3 上部	深 縦	直 角	0.7 0.2	扇形ナラフ		1.75×R6.7 7.5×R6.7	0.2~2mmの範 囲	
255	扇形上器3 上部	深 縦	直 角	0.8 0.2	扇形ナラフ		1.75×R6.7 7.5×R6.7	0.2~2mmの範 囲	
256	扇形上器3 上部	深 縦	直 角	0.8 0.2	扇形ナラフ		1.75×R6.7 7.5×R6.7	0.2~2mmの範 囲	
257	扇形上器3 上部	深 縦	直 角	0.9 0.2	扇形ナラフ		1.75×R6.7 7.5×R6.7	0.2~2mmの範 囲	
258	扇形上器3 上部	深 縦	直 角	1.0 0.2	扇形ナラフ		1.75×R6.7 7.5×R6.7	0.2~2mmの範 囲	
259	扇形上器3 上部	深 縦	直 角	0.7 0.2	二枚貝文様		1.75×R6.7 7.5×R6.7	0.2~2mmの範 囲	
260	扇形上器3 上部	深 縦	直 角	0.8 0.2	二枚貝文様		1.75×R6.7 7.5×R6.7	0.2~2mmの範 囲	
261	扇形上器3 上部	深 縦	直 角	1.0 0.2	二枚貝文様		1.75×R6.7 7.5×R6.7	0.2~2mmの範 囲	
262	扇形上器3 上部	深 縦	直 角	0.8 0.2	二枚貝文様		1.75×R6.7 7.5×R6.7	0.2~2mmの範 囲	
263	扇形上器3 下部	深 縦	直 角	0.9 0.2	扇形ナラフ		1.75×R6.7 7.5×R6.7	0.2~2mmの範 囲	
264	扇形上器3 下部	深 縦	直 角	1.0 0.2	扇形ナラフ		1.75×R6.7 7.5×R6.7	0.2~2mmの範 囲	
265	扇形上器3 下部	深 縦	直 角	0.7 0.2	扇形ナラフ		1.75×R6.7 7.5×R6.7	0.2~2mmの範 囲	
266	扇形上器3 下部	深 縦	直 角	0.9 0.2	扇形ナラフ		1.75×R6.7 7.5×R6.7	0.2~2mmの範 囲	
267	扇形上器3 下部	深 縦	直 角	0.7 0.2	扇形ナラフ		1.75×R6.7 7.5×R6.7	0.2~2mmの範 囲	
268	扇形上器3 下部	深 縦	直 角	0.6 0.2	扇形ナラフ		1.75×R6.7 7.5×R6.7	0.2~2mmの範 囲	
269	扇形上器3 下部	深 縦	直 角	0.9 0.2	扇形ナラフ		1.75×R6.7 7.5×R6.7	0.2~2mmの範 囲	ZIIと同一類体
270	扇形上器3 下部	深 縦	直 角	0.9 0.2	扇形ナラフ		1.75×R6.7 7.5×R6.7	0.2~2mmの範 囲	ZIIと同一類体
271	扇形上器3 下部	深 縦	直 角	0.7 0.2	扇形ナラフ		1.75×R6.7 7.5×R6.7	0.2~2mmの範 囲	ZIIと同一類体
272	扇形上器3 下部	深 縦	直 角	0.8 0.2	扇形ナラフ		1.75×R6.7 7.5×R6.7	0.2~2mmの範 囲	ZIIと同一類体
273	扇形上器3 下部	深 縦	直 角	0.9 0.2	扇形ナラフ		1.75×R6.7 7.5×R6.7	0.2~2mmの範 囲	ZIIと同一類体
274	扇形上器3 下部	深 縦	直 角	4.0 0.2	二枚貝文様		1.75×R6.7 7.5×R6.7	0.2~2mmの範 囲	ZIIと同一類体
275	扇形上器3 下部	深 縦	直 角	2.6 0.2	二枚貝文様		1.75×R6.7 7.5×R6.7	0.2~2mmの範 囲	ZIIと同一類体
276	扇形上器3 下部	深 縦	直 角	0.7 0.2	二枚貝文様		1.75×R6.7 7.5×R6.7	0.2~2mmの範 囲	ZIIと同一類体
277	扇形上器3 下部	深 縦	直 角	0.7 0.2	二枚貝文様		1.75×R6.7 7.5×R6.7	0.2~2mmの範 囲	ZIIと同一類体
278	扇形上器3 下部	深 縦	直 角	0.7 0.2	二枚貝文様		1.75×R6.7 7.5×R6.7	0.2~2mmの範 囲	ZIIと同一類体
279	扇形上器3 下部	深 縦	直 角	0.6 0.2	二枚貝文様		1.75×R6.7 7.5×R6.7	0.2~2mmの範 囲	ZIIと同一類体
280	扇形上器3 下部	深 縦	直 角	0.7 0.2	二枚貝文様		1.75×R6.7 7.5×R6.7	0.2~2mmの範 囲	ZIIと同一類体
281	扇形上器3 下部	深 縦	直 角	0.7 0.2	二枚貝文様		1.75×R6.7 7.5×R6.7	0.2~2mmの範 囲	ZIIと同一類体
282	扇形上器3 下部	深 縦	直 角	0.8 0.2	二枚貝文様		1.75×R6.7 7.5×R6.7	0.2~2mmの範 囲	ZIIと同一類体
283	扇形上器3 下部	深 縦	直 角	0.7 0.2	二枚貝文様		1.75×R6.7 7.5×R6.7	0.2~2mmの範 囲	ZIIと同一類体
284	扇形上器3 下部	深 縦	直 角	0.7 0.2	二枚貝文様		1.75×R6.7 7.5×R6.7	0.2~2mmの範 囲	ZIIと同一類体
285	扇形上器3 下部	深 縦	直 角	0.9 0.2	扇形文様	ナシ	1.75×R6.7 7.5×R6.7	0.2~2mmの範 囲	ZIIと同一類体
286	扇形上器3 下部	深 縦	直 角	0.8 0.2	扇形文様	ナシ	1.75×R6.7 7.5×R6.7	0.2~2mmの範 囲	ZIIと同一類体
287	扇形上器3 下部	深 縦	直 角	0.7 0.2	扇形文様	ナシ	1.75×R6.7 7.5×R6.7	0.2~2mmの範 囲	ZIIと同一類体
288	扇形上器3 下部	深 縦	直 角	0.6 0.2	扇形文様	ナシ	1.75×R6.7 7.5×R6.7	0.2~2mmの範 囲	ZIIと同一類体

第2章 調査の概要

番号	上位階級	階級	学年	性別	年齢	学年	文 品	種 類	色 痕	印 上	備 考
288	笠置山口3	深 鮎	1年生	男	0.6		ナシ	黒色 2.5Y R 6 / 6	2.5~3cmの部分 と2.5cmの部分	口内に歯状部	
290	笠置山口W3 - 間	深 鮎	1年生	女	1.0		ナシ	黒色 2.5Y R 6 / 6	2.5~3cmの部分	單孔	
291	笠置山口3	深 鮎	1年生	男	1.2		ナシ	黒色 2.5Y R 8 / 3	2.5~3cmの部分		
292	笠置山口3	深 鮎	1年生	女	0.7		ナシ	黒色 2.5Y 7 / 4	2.5~1.5cmの部分		
293	笠置山口W3 - 間	深 鮎	1年生	男	0.6	1.2	ナシ	黒色 2.5Y R 6 / 4	2.5~3cmの部分		
294	笠置山口3	深 鮎	1年生	女	0.6	1.1	ナシ	黒色 2.5Y R 3 / 2	2.5~4cmの部分		
295	笠置山口3	深 鮎	1年生	男	7.5	0.9	ナシ	黒色 2.5Y R 6 / 6	2.5~4cmの部分 内側に赤色斑		
296	笠置山口W3 - 間	深 鮎	1年生	男	0.6	0.5	ナシ	黒色 2.5Y R 3 / 3	2.5~3cmの部分		
297	笠置山口3	深 鮎	1年生	男	8.4	1.0	ナシ	黒色 2.5Y R 6 / 3	2.5~3cmの部分		
298	笠置山口W3 - 間	深 鮎	1年生	男	5.8	1.1	ナシ	黒色 2.5Y R 6 / 2	2.5~4cmの部分		
299	笠置山口3	深 鮎	1年生	男	10.0	0.8	ナシ	黒色 2.5Y R 5 / 6	2.5~1cmの部分		
300	笠置山口3	深 鮎	1年生	男	10.2	1.2	ナシ	黒色 2.5Y R 5 / 6	2.5~2cmの部分		
301	笠置山口3	深 鮎	1年生	男	11.8	0.8	ナシ	黒色 2.5Y R 7 / 3	2.5~4cmの部分		
302	笠置山口W3 - 間	深 鮎	1年生	男	10.5	0.9	ナシ	黒色 2.5Y R 7 / 3	2.5~3cmの部分		
303	笠置山口3	深 鮎	1年生	男	11.1	0.6	ナシ	黒色 2.5Y 7 / 3	2.5~1cmの部分		
304	笠置山口W3 - 間	深 鮎	1年生	男	11.7	1.1	ナシ	黒色 2.5Y R 7 / 4	2.5~3cmの部分		
305	笠置山口3	深 鮎	1年生	男	11.6	1.3	ナシ	黒色 2.5Y R 7 / 3	2.5~3cmの部分		
306	笠置山口3	深 鮎	1年生	男	10.8	1.2	ナシ	黒色 2.5Y R 7 / 3	2.5~4cmの部分		
307	笠置山口W3 - 間	深 鮎	1年生	男	11.6	1.3	ナシ	黒色 2.5Y R 7 / 3	2.5~3cmの部分		
308	笠置山口3	深 鮎	1年生	男	10.8	1.2	ナシ	黒色 2.5Y R 7 / 3	2.5~4cmの部分		
309	笠置山口3	深 鮎	1年生	男	13.0	1.1	ナシ	黒色 2.5Y R 6 / 6	2.5~4cmの部分		
310	笠置山口3	深 鮎	1年生	男	13.3	0.8	ナシ	黒色 2.5Y R 6 / 5	2.5~3cmの部分		
311	「鮭」 トレンチ	深 鮎	1年生	男	0.8	新規	ナシ	黒色 2.5Y R 6 / 4	2.5~1cmの部分	赤色	
312	「鮭」	深 鮎	1年生	男	0.7	新規	ナシ	黒色 2.5Y R 6 / 3	2.5~2cmの部分	赤色+甲本式	
313	「鮭」	深 鮎	1年生	男	1.5	新規	ナシ	黒色 2.5Y R 6 / 2	2.5~1cmの部分	赤色+甲本式	
314	「鮭」	深 鮎	1年生	男	0.5	新規	ナシ	黒色 2.5Y R 6 / 3	2.5~2cmの部分	黒+赤	
315	土鰐 1 - 間	深 鮎	1年生	男	0.7	既往文頭部	ナシ	黒色 2.5Y R 6 / 4	2.5~1cmの部分	黒+赤+白	
316	土鰐 1 トレンチ	深 鮎	1年生	男	0.4	既往文頭部	ナシ	黒色 2.5Y R 6 / 3	2.5~1cmの部分	黒+赤+白	
317	「鮭」 1年生	深 鮎	1年生	男	0.4	既往文頭部	ナシ	黒色 2.5Y R 6 / 3	2.5~1cmの部分	黒+赤+白	
318	「鮭」 トレンチ	深 鮎	1年生	男	0.5	既往文頭部	ナシ	黒色 2.5Y R 6 / 4	2.5~1cmの部分	黒+赤+白	
319	「鮭」 トレンチ	深 鮎	1年生	男	0.5	既往文頭部	ナシ	黒色 2.5Y R 6 / 4	2.5~1cmの部分	黒+赤+白	
320	「鮭」 トレンチ	深 鮎	1年生	男	0.5	既往文頭部	ナシ	黒色 2.5Y R 6 / 4	2.5~1cmの部分	黒+赤+白	
321	「鮭」 トレンチ	深 鮎	1年生	男	0.5	既往文頭部	ナシ	黒色 2.5Y R 6 / 4	2.5~1cmの部分	黒+赤+白	
322	「鮭」 トレンチ	深 鮎	1年生	男	0.4	既往文頭部	ナシ	黒色 2.5Y R 6 / 3	2.5~1cmの部分	黒+赤+白	
323	「鮭」 トレンチ	深 鮎	1年生	男	0.8	既往文頭部	ナシ	黒色 2.5Y R 6 / 4	2.5~1cmの部分	黒+赤+白	
324	「鮭」 トレンチ	深 鮎	1年生	男	0.8	既往文頭部	ナシ	黒色 2.5Y R 6 / 4	2.5~1cmの部分	黒+赤+白	
325	「鮭」 トレンチ	深 鮎	1年生	男	0.8	既往文頭部	ナシ	黒色 2.5Y R 6 / 4	2.5~1cmの部分	黒+赤+白	
326	「鮭」 トレンチ	深 鮎	1年生	男	1.1	既往文頭部	一概に新規	黒色 2.5Y R 5 / 3	2.5~3cmの部分		
327	「鮭」	深 鮎	1年生	男	0.8	既往文頭部	ナシ	黒色 2.5Y R 6 / 6	2.5~1cmの部分		
328	「鮭」 トレンチ	深 鮎	1年生	男	0.4	既往文頭部	ナシ	黒色 2.5Y R 6 / 1	2.5~2cmの部分		
329	「鮭」 トレンチ	深 鮎	1年生	男	0.3	既往文頭部	ナシ	黒色 2.5Y R 6 / 1	2.5~2cmの部分		
330	「鮭」 トレンチ	深 鮎	1年生	男	0.3	既往文頭部	ナシ	黒色 2.5Y R 6 / 1	2.5~2cmの部分		
331	「鮭」 トレンチ	深 鮎	1年生	男	1.2	既往文頭部	ナシ	黒色 2.5Y R 3 / 3	2.5~2cmの部分		
332	「鮭」	深 鮎	1年生	男	0.8	既往文頭部	ナシ	黒色 2.5Y R 3 / 3	2.5~1cmの部分		
333	「鮭」 トレンチ	深 鮎	1年生	男	0.8	既往文頭部	ナシ	黒色 2.5Y R 3 / 3	2.5~1cmの部分		
334	「鮭」 トレンチ	深 鮎	1年生	男	0.8	既往文頭部	ナシ	黒色 2.5Y R 3 / 3	2.5~1cmの部分		
335	「鮭」 トレンチ	深 鮎	1年生	男	0.8	既往文頭部	ナシ	黒色 2.5Y R 3 / 3	2.5~1cmの部分		
336	「鮭」 トレンチ	深 鮎	1年生	男	1.4	既往文頭部	ナシ	黒色 2.5Y R 3 / 3	2.5~5cmの部分	2/2+1個体	

番号	上器類別	おもな 種類	地 質	上 位 層 名	文 様	構 造	寸 寸	施 工	備 考		
339	一端1	深 溝	新成 岩	1.3 9.0	縫隙裂隙文(縫隙)	ナテ	に深い黄色 D3Y R 5 - 4	0.5~1mmの砂粒			
340	端1	深 溝	新成 岩	1.1	縫隙裂隙	ナテ	に深い黄色 D3Y R 5 - 3	0.5~2mmの砂粒			
341	端1	深 溝	新成 岩	1.5		三日月食	に深い黄色 D3Y R 5 - 3	0.5~5mmの砂粒			
342	端1	深 溝	新成 岩	0.8	縫隙裂隙	一枚貝殻	に深い黄色 D3Y R 5 - 3	1~2mmの砂粒			
343	二端1	深 溝	新 成 岩	1.0 1.3	縫隙裂隙	ナテ	に深い黄色 D3Y R 6 - 1	0.5~3mmの砂粒			
344	二端1	深 溝	高 原 (台地)	10.0	3.3	貝殻系食	褐色 Y3G 6 - b	0.5~4mmの砂粒			
345	端1	深 溝	成 岩	14.0	3.3	ナテ	に深い黄色 D3Y R 6 - 4	0.5~3mmの砂粒			
346	一端1	深 溝	新成 岩	15.6	1.3	三日月食	褐色 Y3G 6 - b	0.5~4mmの砂粒			
347	一端1	深 溝	新成 岩	10.8	1.5	縫隙裂隙	一枚貝殻	に深い黄色 D3Y R 6 - 2	0.5~2mmの砂粒		
348	端4	深 溝	新成 岩	0.8 0.1	縫隙裂隙文(縫隙) (文向文、透視)	ナテ	に深い黄色 D3Y R 6 - 3	0.5~3mmの砂粒			
349	端4	深 溝	新成 岩	23.0	0.7	透視文(字、波状)	三日月食	に浅黄色 D3Y R 6 - 3	0.5~3mmの砂粒		
350	一端6	深 溝	新成 岩	0.4		貝殻系食	1.段、青色 D3Y R 6 - 3	0.5~1mmの砂粒			
351	一端6	深 溝	新成 岩	9.0		貝殻系食	ナテ	0.5~1mmの砂粒			
352	端6	深 溝	新 成 (平 式)	1.1		ナテ	に深い黄色 D3Y R 4 - 5	0.5~3mmの砂粒			
353	端石目	深 溝	深成 岩	12.0	1.2	比翼之山形 縫隙裂隙	ナテ	に深い黄色 D3Y R 6 - 2	0.5~1mmの砂粒		
354	ナゴヤシタ スル	深 溝	新成 岩	43.5	1.1	透視文	ナテ	0.5~1mmの砂粒		△	
355	ナゴヤシタ スル	深 溝	新成 岩	11.8	0.8	一枚貝殻	に深い黄色 D3Y R 6 - 4	0.5~1mmの砂粒	限りなし		
356	ナゴヤシタ スル	深 溝	新成 岩	0.9	透視	一枚貝殻	に深い黄色 D3Y R 6 - 1	0.5~1mmの砂粒	限りなし		
357	ナゴヤシタ スル	深 溝	新成 岩	0.6	透視	ナテ	に深い白色 D3Y R 6 - 4	0.5~3mmの砂粒	限りなし		
358	ナゴヤシタ スル	深 溝	新成 岩	0.8	透視文、斜角	一枚貝殻食	に深い白色 D3Y R 7 - 2	0.5~5mmの砂粒			
359	ナゴヤシタ スル	深 溝	新成 岩	0.8	透視	ナテ	透視	透視	0.5~3mmの砂粒		
360	ナゴヤシタ スル	深 溝	新成 岩	1.0 0.4	透視文、斜角文	ナテ	透視	透視	0.5~3mmの砂粒		
361	ナゴヤシタ スル	深 溝	新成 岩	1.3	透視文、透視	ナテ	に深い白色 D3Y R 7 - 4	0.5~2mmの砂粒			
362	ナゴヤシタ スル	深 溝	新成 岩	0.7	透視文、透視	ナテ	に深い白色 D3Y R 7 - 1	0.5~4mmの砂粒			
363	ナゴヤシタ スル	深 溝	新成 岩	1.1	透視	透視	に深い白色 D3Y R 7 - 4	0.5~3mmの砂粒			
364	ナゴヤシタ スル	深 溝	新成 岩	0.7 0.5	透視文(透視)	ナテ	透視	透視	0.5~1mmの砂粒		
365	ナゴヤシタ スル	深 溝	新成 岩	0.8	透視文(透視)	ナテ	に深い白色 D3Y R 4 - 2	0.5~1mmの砂粒			
366	ナゴヤシタ スル	深 溝	新成 岩	0.9	透視文(透視)	ナテ	に深い白色 D3Y R 4 - 2	0.5~1mmの砂粒			
367	ナゴヤシタ スル	深 溝	新成 岩	0.9	透視文(透視)	一枚貝殻	透視 D3Y R 6 - 6	0.5~5mmの砂粒			
368	ナゴヤシタ スル	深 溝	新成 岩	0.6	縫隙裂隙文(縫隙)	一枚貝殻食	透視 D3Y R 5 - 2	0.5~3mmの砂粒			
369	ナゴヤシタ スル	深 溝	新成 岩	0.1	透視文	貝殻系食	透視 D3Y R 5 - 2	0.5~1mmの砂粒			
370	ナゴヤシタ スル	深 溝	新成 岩	0.9	透視文(透視)	三日月食	透視 D3Y R 6 - 4	0.5~4mmの砂粒			
371	ナゴヤシタ スル	深 溝	新成 岩	0.7	透視文(透視)	透視	透視 D3Y R 6 - 4	0.5~2mmの砂粒			
372	ナゴヤシタ スル	深 溝	新成 岩	0.3	透視文(透視)	透視	透視 D3Y R 6 - 3	0.5~5mmの砂粒			
373	ナゴヤシタ スル	深 溝	新成 岩	31.0	0.9	透視文(透視)	ナテ	透視	0.5~3mmの砂粒		
374	ナゴヤシタ スル	深 溝	新成 岩	0.4	透視文(透視)	透視	透視 D3Y R 6 - 4	0.5~2mmの砂粒			
375	ナゴヤシタ スル	深 溝	新成 岩	1.1	透視文(透視)	透視	透視 D3Y R 5 - 1	0.5~2mmの砂粒			
376	ナゴヤシタ スル	深 溝	新成 岩	0.8	透視文(透視)	透視	透視 D3Y R 7 - 4	0.5~1mmの砂粒			
377	ナゴヤシタ スル	深 溝	新成 岩	0.3	透視文(透視)	透視	透視 D3Y R 6 - 6	0.5~2mmの砂粒			
378	ナゴヤシタ スル	深 溝	新成 岩	0.1	透視文(透視)	透視	透視 D3Y R 6 - 3	0.5~1mmの砂粒			
379	ナゴヤシタ スル	深 溝	新成 岩	1.1	透視文(透視)	透視	透視 D3Y R 7 - 4	0.5~3mmの砂粒			
380	ナゴヤシタ スル	深 溝	新成 岩	1.0	透視文(透視)	透視	透視 D3Y R 6 - 4	0.5~2mmの砂粒			
381	ナゴヤシタ スル	深 溝	新成 岩	1.0	透視文(透視)	透視	透視 D3Y R 5 - 2	0.5~1mmの砂粒			
382	ナゴヤシタ スル	深 溝	新成 岩	0.8	透視文(透視)	透視	透視 D3Y R 6 - 4	0.5~3mmの砂粒	限りなし		
383	ナゴヤシタ スル	深 溝	新成 岩	0.7	透視文(透視)	透視	透視 D3Y R 5 - 6	0.5~4mmの砂粒			
384	ナゴヤシタ スル	深 溝	新成 岩	0.8	透視文(透視)	透視	透視 D3Y R 6 - 2	0.5~2mmの砂粒			

第3章 考 察

第1節 繩文時代の遺構・遺物

1 壁穴住居の構造

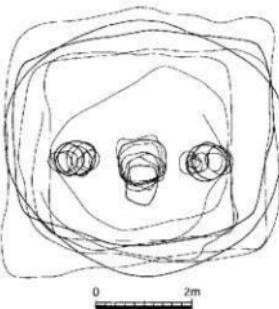
長縄手遺跡では3軒の壁穴住居が検出されているが、長方形で主柱をもたない壁穴住居1、長方形で2本柱の壁穴住居2、椭円形で2本柱の壁穴住居3とそれぞれ異なる特徴をもつ。これらは後述するようにその山土土器から壁穴住居1→壁穴住居2・3の順に変遷するものと想定される。縄文時代中期末、屋内がをもつ2本柱の方形住居が兵庫県西部を中心とする特徴的な分布を示すことは既に指摘されており¹、この遺跡の壁穴住居も鳥取県智頭枕田遺跡²とともにその分布の西限にあたるものと考えられる。そこで、これらの住居を比較してみると(第44図)³、床面積20~23m²を測る壁穴住居2・3はこれらのなかでも比較的大きい部類に属する。また、壁穴住居2は兵庫県西部の住居に比べて長方形度が強く、智頭枕田遺跡の住居に類似する。しかし、智頭枕田遺跡では主柱が壁穴の主軸上にあるのに対し、壁穴住居2・3ではやや離れた位置にある点で兵庫県西部の壁穴住居に近い。一方、屋内炉は主柱の間に設けられる点でいずれも共通しているが、長縄手遺跡の住居の中で最も新しい可能性のある壁穴住居2が長方形平面とともに石圓炉を採用していることは注意される。石圓炉は中期後半に東日本から近畿地方へ伝わったとされ⁴、壁穴住居2の石圓炉は中国地方でも最も早い例になる可能性がある。こうしたことからすると2本主柱や方形平面、石圓炉といった住居構造が段階的に受容されて行ったことも考えられる。

2 中期末の縄文土器

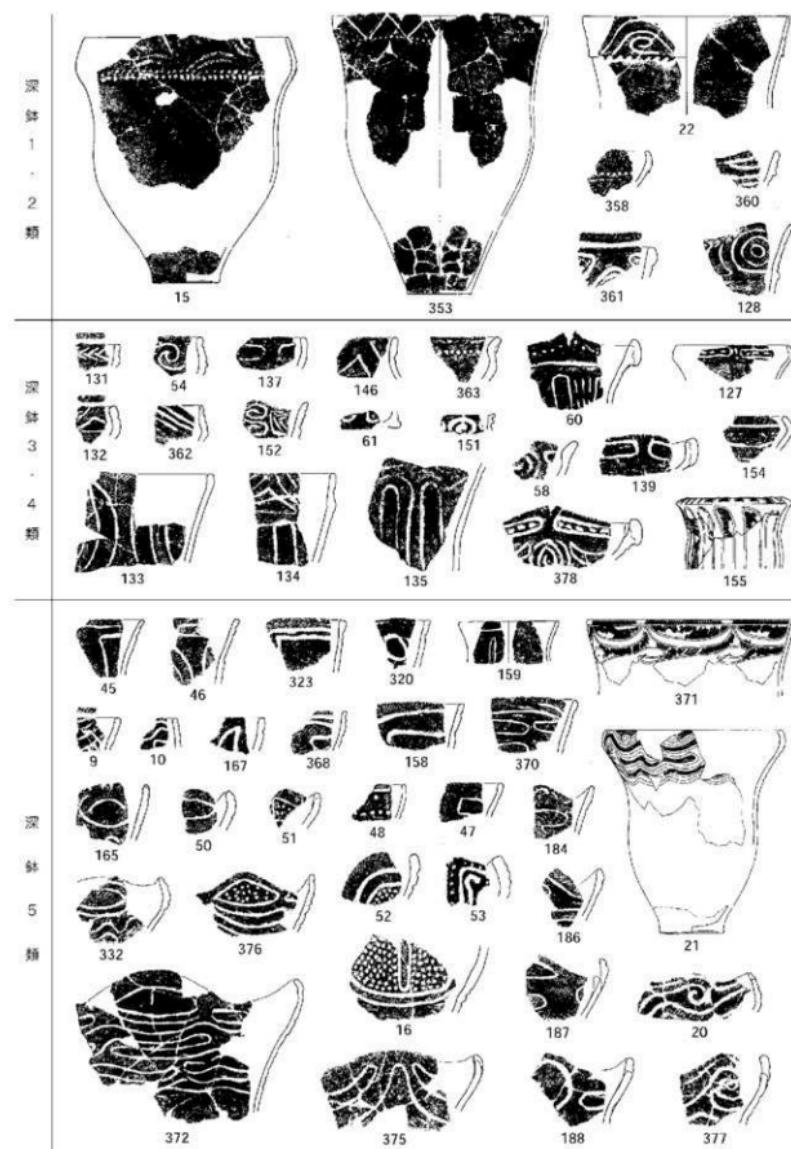
この遺跡では整理箱40箱ほどの縄文土器が出土したが、その大半は中期末に属するものである。出土した器種には深鉢のほか鉢・浅鉢・壺が少量あるが、ここでは主体をなす深鉢を中心に検討し、長縄手遺跡出土土器の位置づけを行う。

深鉢の類型(第45・46図)

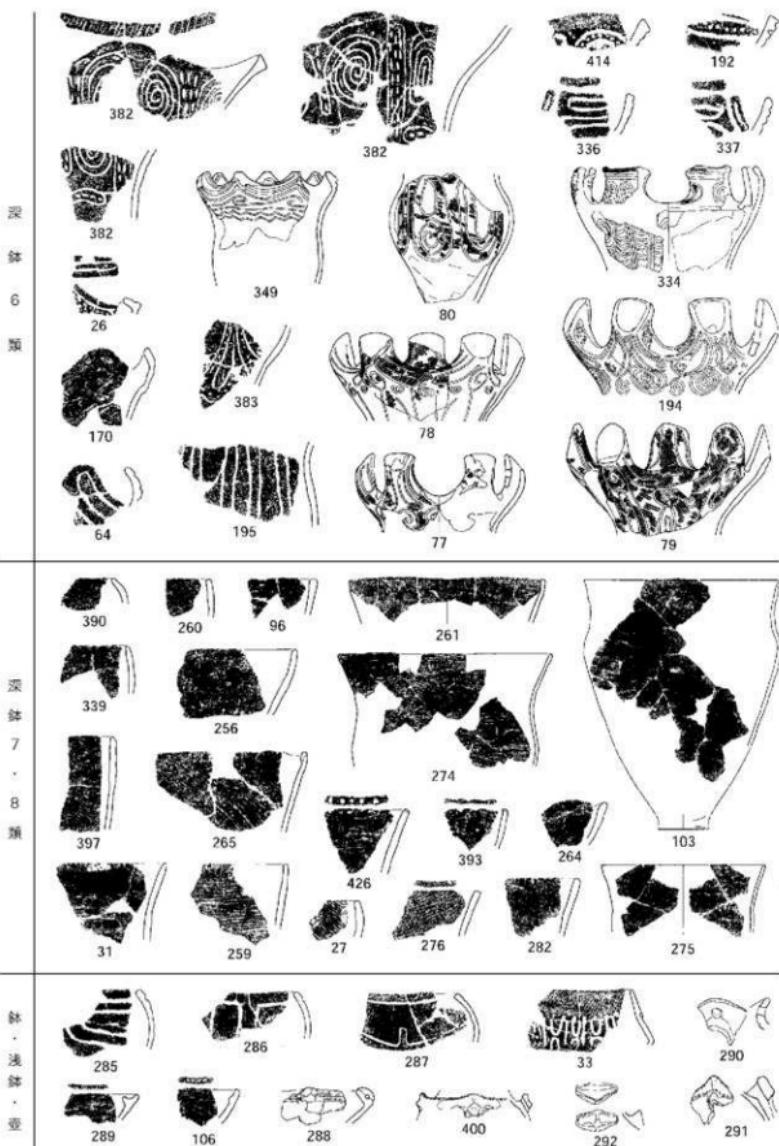
口縁部の形態などから1~8類に分類した。壁穴住居1を中心に9点出土している1類は、水平口縁をわずかに肥厚させ段をなす下端に刺突を連続して施すもので、胴部は無文である。口縁部が内折するものをa、直立するものをbとする。1a類は壁穴住居1や土器溜まりで出土している。L Rの縄文を施す358のほか、対向する連弧文を描く15や半裁竹管による斜線文を飾る317などがある。これ



第44図 2本主柱住居規模比較図
(太線は長縄手遺跡住居 1/100)



第45図 繩文土器の類型 1 (1/6 - 1/8)



第46図 縄文土器の類型2(1/6・1/8)

らは矢部奥田遺跡⁶の1・173（第47図1・4）に類似し、矢野健一のA 1類⁶にあたる。矢野のA 2類に相当する1 b類は22と353がある。集石造構から出土した353は、沈線で連続する山形文を描きL Rの縄文を施したもので、複線で表現する重層山形文は矢部奥田遺跡（第47図8）や里木貝塚⁷に類例がある。22は二重の弧線で区画された中に渦巻文を飾る。同様なモチーフは大阪府馬場川遺跡⁸に例があるが（第47図15）、矢部奥田遺跡では渦巻文が小さな弧帯に置き換えられている（第47図14）。

隆帯で口縁部を区画する2類は矢野のB 2類にあたり、竪穴住居3などから5点出土している。波状口縁になるようで、竪穴住居3で出土した128は波頂部に二重の円文を飾り、その左右に半月形の区画文を配する。隆帯で隔てられた胴部は無文のものが多いようであるが、上器溜まりの360には文様が認められる。128と類似したモチーフは奈良県下茶屋地蔵谷遺跡⁹に例（第47図13）がある。

竪穴住居2・3などから21点出土している3類は口縁部が屈曲するもので、口縁部と胴部にそれぞれ文様帯が展開する。屈曲の弱い3 a類には羽状文を飾る131や山形文を飾る132・134が見られる。一方、強く屈曲して鶏状をなす3 b類は口縁部に区画文や刺突文を飾るものが多く、60・139・378のように小さな突起を設けて波状をなすものもある。下茶屋地蔵谷遺跡の2類（第47図16・23）にほぼ相当する。

口縁部が短く内折する4類は矢部奥田遺跡でも認められ（第47図27）、矢野のC類にあたる。数は3点と少なく、いずれも竪穴住居3からの出土である。柱穴から出土した155を見ると口径15cm、器高20cmほどの小形になるようで、口縁部と胴部にそれぞれ磨消縄文を飾る。

5類は口縁部と胴部の区分が明瞭でないもので、水平口縁aと波状口縁bがある。5 a類の21は内湾する水平口縁に円文を交互に配し、その下を飾る波状文は両端が閉じて蛇行帶となる。このほか、48のように口縁部が内湾するもの一部は3類に属する可能性がある。口縁部が直立しない外反するものでは、口縁下に窓枠状の区画文を飾る46・47や横走するJ字文を施す368・370などがある。また、半月形の区画文とJ字文を組み合わせた371は中津式に類似したモチーフがある。5 b類は、小さな波頂部に菱形16・50~52・332・372・376や円形188の区画文のほか、渦巻文20・377やJ字文184・186を飾るのが見られる。このうち、菱形の区画文を中心を重トする縄文帯により二分し刺突を加えるモチーフは矢部奥田遺跡に類例（第47図35）がある。これらは矢野のH類に含まれる。

6類は大きな波状口縁をもつ深鉢で、北白川C式の深鉢C類¹⁰にあたる。竪穴住居2・3、上器溜まりなどで31点出土しているが、これらは口唇部が肥厚するa、口唇部が屈折するb、台形の突起をもつc、筒形の突起をもつdに区分される。肥厚した口唇部に刻み目を施す382は、波頂下を縱走するいし横走する刺突文帯で区切り、その内部を縱長の渦巻文で充填する。6 b類は波頂下に渦文を飾る170や横走するJ字文を施す349、刺突文を充填する26などがある。波頂部が台形をなす6 c類は336・337のほか、185や380もこれに属する可能性がある。6つの筒形突起をもつ6 d類の中で、胴部を渦巻文と肋骨状の沈線文で埋める334は最も古い様相を示す。また、77・194において胴部に飾られていた渦巻文が、78・79では突起までせり上がり、より新しい様相を呈する。77~79・194は兵庫県片吹遺跡¹¹の例（第47図39）に類似する。

7類は無文の深鉢で235点あり、深鉢全体の48.5%を占める。口縁部が内湾するa、直立するb、外反するcがある。7 a類は竪穴住居1・3に多く見られるが、竪穴住居2では少ない。

23点ある8類は縄文を施す深鉢で、竪穴住居3にやまとまって見られるものの、7類に比較するとごくわずかである。



第47図 関連する縄文土器(1/6・1/8)

- | | | | | | |
|--|-------------------|----|--------|-------|-------|
| 1・4・8・10~12・14・27・29~32・34・35・38・40・41 | 矢部奥山遺跡 | 2 | 山岱山中遺跡 | 3 | 大油浜跡跡 |
| 9 津雲跡跡 | 13・16・25 下茶兒地蔵谷遺跡 | 15 | 馬場川遺跡 | 17・33 | 朝霞扇貝塚 |
| 19・42 北白川追分寺遺跡 | 20 丁柳ヶ源遺跡 | 21 | 阿津追出遺跡 | 22・36 | 栗谷遺跡 |
| 25・37・39 月吹遺跡 | 28 貝谷遺跡 | | | 24 | 丸見遺跡 |

深鉢の構成（第48図・表1）

次に、深鉢の構成やその特徴を、資料のまとまっている縫穴住居1～3、上塙1、上器溜まりについて検討する。縫穴住居1の深鉢は、1類（15%）、3類（11%）、5類（33%）、6類（4%）、7類（30%）、8類（7%）で構成される。63%を占める有文深鉢の中で主体をなす1・5類は口縁部に文様が集中する傾向にある。施文は定型化した磨消繩文が見られず、繩文はL.Rが48%、R.Lが52%を占める。また、無文深鉢では一枚貝条痕の残るもののが80%と多い。

上塙1は、深鉢1類（5%）、5類（37%）、6類（16%）、7類（37%）、8類（5%）からなる。有文深鉢が占める割合は58%で縫穴住居1に類似し、最も多い5類の割合もほぼ一致するが、縫穴住居1に見られた3類は出土していない。施文は、磨消繩文がほとんど見られない点でもこれと同様であり、繩文はR.Lが54%とわずかに多い点でも共通している。

縫穴住居3の深鉢は、2類（1%）、3類（7%）、4類（1%）、5類（32%）、6類（3%）、7類（50%）、8類（6%）で構成される。有文深鉢では、5類や6類の割合が縫穴住居1に類似する一方で、縫穴住居1で多く見られた1類ではなく、かわって2・4類が特徴的に認められる。2～5類では文様が脚部まで展開するとともに、磨消繩文が多用されており、繩文はL.Rが87%を占める。無文深鉢の占める割合は56%と有文深鉢よりも多く、その調整は巻貝条痕を残すものが60%と一枚貝条痕を上回っている。

縫穴住居2は、深鉢3類（7%）、5類（27%）、6類（8%）、7類（52%）、8類（6%）からなる。有文深鉢では1・2類が見られず、5類の占める割合も他遺構と比べてやや少ないが、その分大波状口縁をもつ6類の割合が多くなっている。これら有文深鉢の占める割合は42%で縫穴住居3と一致し、多用される磨消繩文においてもL.Rが87%と似たような傾向を示す。無文深鉢では巻貝条痕が80%を占め、縫穴住居3における割合よりも多い。

土器溜まりの深鉢は、1類（4%）、2類（2%）、3類（4%）、5類（30%）、6類（7%）、7類（51%）、8類（2%）で構成される。47%を占める有文深鉢に1・2類が見られる点では縫穴住

表1 深鉢の類型別出土量

	縫 穴 部								施 文 部								底 年				
	I類				II類		III類		IV類				V類		VI類		VII類				
	L	R	その他	L.R	L	R	その他	L.R	その他	L.R	その他	L.R	その他	L.R	その他	L.R	その他	L.R	その他	L.R	その他
縫穴住居1	3	1			1	2		2	3	4		1	6	2	1	2	34	16	20	47	14
	4				3				9	1		8		7		7	9	10	9	1	79
																		11	11	15	1
縫穴住居2					5	1	1	14	1	9		3	38	4	3	2	24	7	23	45	35
									9								81	108	172	172	35
縫穴住居3					2	1	9	1	7	2		21	24	5	3	11	18	21	11	22	24
																	117	22	48	5	1
					3	17	3	77	6	3		19		18		174	103	53	70	67	67
上 塙 1									2	1	5	1	2	6	1	1	6	3	6	7	1
																	9	11	11	17	2
七 床 3									1											1	2
																				1	2
上 塙 4									1		1	1	2	1						1	1
																				1	1
七 床 6									1		1	1	2	1						3	1
																				16	1
黒石遺跡																				16	1
																				1	1
牛頭廻									1		1	1	2	1							1
																					1
包 合 庫									1		1	1	2	1							1
																					1
物	3	1	3	3	2	15	2	14	2	1	30	12	37	14	17	22	179	34	16	7	222
	9		5		34		3	152	31		236		28		413	344	151	668			222

居1や土壙1と共に通するが、その主体となる5・6類の割合はむしろ竪穴住居2・3と類似する。さらに、脇部にまで展開する磨消縦文ではLRが95%を占め、無文深鉢における巻貝条痕が83%と優勢である点では竪穴住居2に近い傾向を示す。

	深鉢1・2類	深鉢3・4類	深鉢5類	深鉢6類	深鉢7・8類
竪穴住居1・土壙1					
竪穴住居3					
竪穴住居2・土壙涌まり					

第48図 類型の変遷(1/12・1/16)

以上、述べてきた各遺構の深鉢の構成を整理すると、竪穴住居1・土壙1と竪穴住居2・3の二群に大別することができる。前者は主に深鉢1・5・7類で構成され、口縁部に集中する文様も磨消繩文が一般化していない段階である。また、無文深鉢が占める割合は4割といまだ少なく、その調整も一枚貝によるものが主体をなすようである。後者は、主に深鉢3・5・7類からなり、口縁部から削部にかけて展開する文様には磨消繩文が多用されるとともに、繩文は1.Rが8割を占める。無文深鉢においてもその割合は有文深鉢を超え、調整も巻貝によるものが6~8割を占める。この二群に属する深鉢6類を比較すると、竪穴住居1・土壙1は竪穴住居2・3に先行するようであり、以後、前者を長縄手遺跡古段塗（第2節の第1期）、後者を新段塗（同第2期）と呼称する。

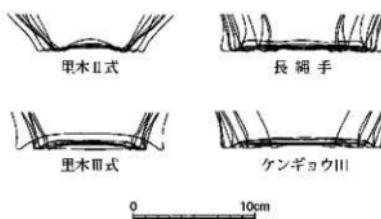
長縄手遺跡の編年的位置

前述したような長縄手遺跡古段階の諸特徴は矢部奥田遺跡の資料（中期IV類）とも概ね一致し、この段階が「矢部奥田式」と併行するものと考えてよいように思われる。一方、磨消繩文の多田や無文深跡あるいは巻尺条痕の増加といった新段階の諸特徴は中津式に繋がる要素であり、この段階を「矢部奥田式」と中津式の間に位置づけることが可能であろう。

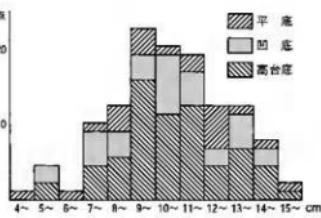
矢野健一は「矢部奥田式」を二段階に区分し、それぞれ北白川C式との併行関係を想定しているが、長縄手遺跡の深跡6類（北白川C式深鉢C類）を手掛かりとして検討すると、古段階は北白川C式3期、新段階は同4期に比定できるようである。もし、この推定が正しいとすると「矢部奥田式」は北白川C式3期を中心とした時期が考えられるが、その上限がどこまでさかのばり得るか今回の資料では明らかにできない¹⁴⁾。

第49図 縄文時代中期末の主要遺跡

ところで、北白川C式4期とされる片吹遺跡S B 08³では出土土器片の59%が無文であり、反縄手遺跡新段階と一致する。また、筒状突起をもつ深鉢6類の存在や浅鉢が少となる割成、L R優勢の縄文などでも共通し、前述したような住居構造などを考え合わせると、兵庫県西部に隣接するこの遺跡の位置を反映しているものと思われる（第49図）。しかし、長縄手遺跡では瀬戸内地方に特徴的な5類が常に有文深鉢の上位をなす点や、高台底が過半を占める点（第50・51図）、巻貝条痕がいち早く盛行する点で片吹遺跡などと異なっており、北白川C式の影響を強く受けた瀬戸内閣域東端の集落と評価したい。（角山）



第50图 底部断面比较图(1/4)



第51図 底部の形態別法量

本稿をなすにあたり、高橋 譲・千葉 豊・富井 真・柳澤清一の各氏から懇切な指導・助言を賜った。また、山本悦世・湯浅利彦の両氏には第15回 中四国縄文研究会において発表の機会を与えられ、当口・泉 拓良氏・矢野健一氏より有益な教示にあづかった。末筆ながら記して感謝する。

最後に、本書の刊行を心待ちにされながら平成12年に他界された平井 勝氏の御冥福を心よりお祈り申し上げる。

註

- 1 矢野健一「兵庫県の縄文時代住居の概要」『関西の縄文住居』関西縄文文化研究会、1999
- 2 木田 真・酒井雅代「智頭枕田遺跡における縄文時代後期の調査」『中津式の成立と展開』中四国縄文研究会、2004
- 3 註1文献をもとに作成。
- 4 註1文献
- 5 高畠知功ほか「矢部奥田遺跡」「岡山県埋蔵文化財発掘調査報告82」岡山県教育委員会、1986
- 6 矢野健一「北白川C式併行期の瀬戸内地方の土器」『古代古墳16』古代古墳研究会、1994
- 7 註6文献
- 8 下村貽文「馬場川遺跡発掘調査梗概IV」『東大阪市埋蔵文化財包蔵地調査概報16』東大阪市教育委員会、1976
- 9 坂 緒「南郷遺跡群IV」『奈良県立橿原考古学研究所調査報告76』奈良県立橿原考古学研究所、2000
- 10 泉 拓良「北白川追分町遺跡出土の縄文土器」『京都大学埋蔵文化財調査報告3』京都大学埋蔵文化財研究センター、1985
- 11 泉 拓良・卡田芳英「片吹遺跡」『龍野市文化財調査報告書VI』龍野市教育委員会、1985
- 12 ここでは竪穴住居1・上巣1と竪穴住居2・3をそれぞれ括して扱ったが、柳澤清一氏によると上巣1は竪穴住居1に先行し、竪穴住居3は竪穴住居2より古く位置づけられると言う（同氏教示）。
- 13 註5・6文献
- 14 泉拓良は里木Ⅲ式を二分し、Ⅲ式aが北白川C式1・2期、Ⅲ式bが同4期と併行とした。この里木Ⅲ式bには「矢部奥田式」と判する器種が含まれており、これが北白川C式前半まで遡る可能性は少ないように思われる。ただし、矢部奥田遺跡の資料には5・6・315・316のような「縁部を折り返す深鉢が多く含まれており、これが時期差と地域差のいずれによるものか判断できない。
- 泉 拓良「西日本縄文土器再考」『考古学論考』小林行雄古希記念論文集刊行会、1982
- 泉 拓良「中期木縄文土器の分析」『京都大学埋蔵文化財調査報告3』京都大学埋蔵文化財研究センター、1985
- 15 註11文献

第2節 遺構一括出土上の縄文土器の位置づけ

西日本縄文中期後半土器編年の基礎的作業

京都大学大学院文学研究科

富 井 真

1. 長縄手遺跡資料の意義

備前市長縄手遺跡で検出された縄文中期末頃の住居址や土壌は、東縁に位置するとはいえ瀬戸内地方で待望された当該期の良好な遺構一括土器群を提供してくれた。しかも、これまで瀬戸内で幾つか確認されている当該期の著名な資料に比べても、遺物量は劣らず破片は大きい。さらにこの遺跡では、遺構埋土は単層ではないものの、各遺構の切り合が極めて少ないことは利点と言える。小さな口縁部破片資料に依拠せざるを得ず、そして出土状況による検証の説得力を欠くことを甘受せざるを得なかった、これまでの編年に対し、当遺跡の資料群は極めて大きく貢献するはずである。

ここでは、まず瀬戸内の当該期編年研究の現状を整理した後に、長縄手遺跡の資料について時間的位置づけを確定し、次いでいわゆる矢部奥田式の生成について解説する。そして最後に当該期の広域比較を試みたい。時間的には、里木Ⅲ式から中津式にかけて、地域的には、九州地方の春日式や並木式から東海地方の神明式や山の神式にかけて、それぞれ関わりをもつてくることになる。なお、本論の立場の根幹は、一括資料に基づく型式組列の比較である¹。

2. 瀬戸内の中期後半編年の現状

里木Ⅲ式の基準資料は、1971年の岡山県里木貝塚の報告において、里木Ⅱ式に後続し中津式へ連なる土器群として抽出されたものである²。里木Ⅲ式の処遇についてその後の経緯は紙幅の都合上、大幅に割愛するが³、岡山県矢部奥田遺跡の出土土器の分析では、地点別出土傾向を基に、それまでの里木Ⅲ式が矢部奥田Ⅲ類と矢部奥田IV類とに時期細分された⁴。その後、この矢部奥田IV類を複数時期の資料とみなして形態差を時期差に置き換えた「矢部奥田式」が提唱されて、今日に至る⁵。

先行時期である里木Ⅱ式とのつながりからの里木Ⅲ式の解体についても触れておこう。攏糸地文の有無という地文の違いを時期差とみなすことによって提起された里木Ⅱ式と里木Ⅲ式に対し⁶、地文でなく施文手法や文様意匠から里木Ⅱ式と里木Ⅲ式を年代的に再編するのが、「船元・里木式土器様式」や「里木Ⅱ・Ⅲ式」の編年案である⁷。地文の多様性は兵庫県熊野郡遺跡住居の一括資料が示すところであるが⁸、これらの再編にしても、最後の段階の資料については、設定⁹当初の里木Ⅲ式から、地文以外の施文手法を里木Ⅱ式と共有する一群と上述の矢部奥田IV類とを除いたものであり、矢部奥田Ⅲ類がこれにはば等しい。以下、これを狭義の里木Ⅲ式と呼ぶ。

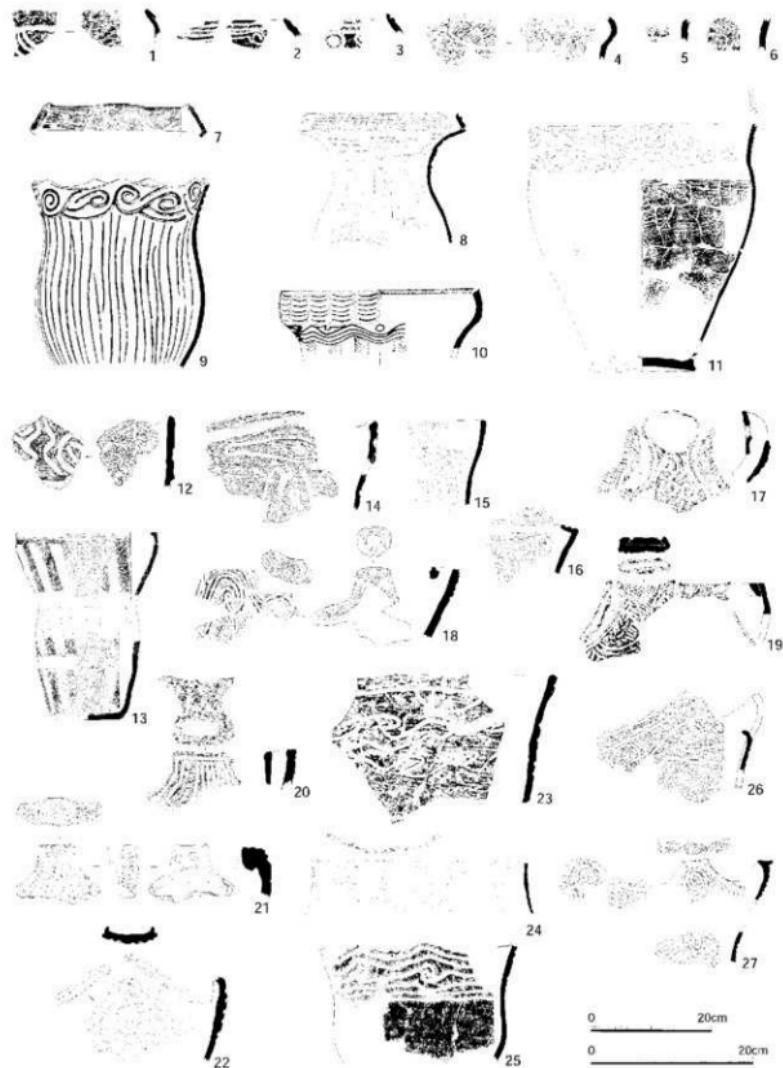
こうして、瀬戸内中期末編年に関する昨今の論点は、狭義の里木Ⅲ式に後続する矢部奥田IV類を、1段階の様式論的多様度として捉えるか、2段階ある矢部奥田式として時間的多段階と捉えるか、という点にあると言える¹⁰。いざれにしても、設定¹¹当初の里木Ⅲ式は单一時期のまとまりとはみなされなくなっている。本論では以下、「里木Ⅲ式」を、上述の狭義の里木Ⅲ式に限ることにする。

長綱手遺跡の資料にも関わる里木Ⅲ式を巡って、遺構一括資料として注目すべきは、岡山県阿津走出土遺跡上墳1である¹。上器点数が少ない上に埋土が複数層ありしかも個々の破片の出土層位は不明だが、遺構出土ということで、現時点では一括資料と考えておきたい(第52図1~6)。墓地の充填縦文・条痕地文・撚糸地文が伴って出土しており、折り返し口縁や棒状工具の沈線や半裁竹管状工具の2連沈線が認められる。情報量こそ少ないが、瀬戸内の里木Ⅲ式の研究は、これを里木Ⅲ式の一括資料として捉えることから再出発すべきであろう。そして、今回の長綱手遺跡の資料群は、津島岡大遺跡21次土坑の段階から²、阿津走出土墳1(=里木Ⅲ式)を経て続いてくる、中期末の矢部奥田式期の往昔の遺構一括資料群であり、瀬戸内の中期末の研究は、これを定点に再出発されるべきである。

3. 各遺構の組成概略と遺構群の前後関係

豊穴住居1 まず床面・下層出土の4点を探り上げる。里木Ⅲ式によく見られるような折り返し口縁の折り返し部を刻む第9図33は(以下、長綱手遺跡の上器については、図番を省き上器番のみとする)、隆蒂を口縁部の主文様と従文様との分離のみに用いて胴部との境界には巡らない点で北白川C式³の浅鉢と比較し得るが(第52図7)、条痕調整を残すことや、単木Ⅲ式やそれに後続する中期末の深鉢にはこの程度の内傾をするものもあることから(同8)、深鉢の可能性もある。口縁部文様の意匠が口縁部最大径の屈曲部をまたいで頸部にまで連続的に展開している内湾口縁の20・21は、器形は里木Ⅲ式に近く意匠は中津式にも近いという、縦文を作う蛇行沈線文意匠をもつ内湾口縁深鉢の時期比定の限界を、端的に示している。沈線文様のみで言えば、20は、渦を描く沈線の軌跡が中部地方西部の山の神式にも近く(第52図9)、21は、円文と短波長波状文の組合せが大阪湾岸の星田類型に近い(同10)。その一方で、同様の内湾口縁器形でも、屈曲部の列点によって器形に従った施文域をとる15は、矢部奥田類型に含まれようが、文様意匠では並木式との類似が指摘できる(第52図11)。撚糸地文などのキャリバー口縁の迎弧文上器と春日式前谷段階が併行し⁴、後続する春日式後半期は並木式と時期的に重なるとすれば⁵、並木式の文様意匠によく似た十器が存在しても不思議ない⁶。床面・下層出土以外では、九州地方とのつながりという点では、沈線間の單列刺突や縦位の連続蛇行沈線からなる25もその可能性がある(第52図11・12)。段状肥厚の矢部奥田類型である22は、全体的な印象は大阪府馬場川遺跡O地点の上器に近いが(第47図15)⁷、後者は口縁部と胴部とを削離で区分する。また22は、沈線の軌道が途切れがちで、意匠が中津式のような連続的なものにならない。26の大波状口縁深鉢は、波頂部直下が16のようになると思われるが、こうした大波状口縁深鉢の刺突充填については後述する。5・6は、33よりは折り返し幅が狭いけれども同様の折り返し口縁である。

豊穴住居2 床面や炉・柱穴・付属土壙から出土した破片は13点で、大ぶりのものもある。まず、それらを限定的単位として採り上げよう。条痕調整を残しつつも唯一磨消縦文意匠となる45は、中津式古相に充てられるだろう(口縁形状は異なるが第52図13が類似する)。胴部上半が大きく開く60は、單列刺突の口縁文様や屈曲の無さや器壁の厚さから、日本海岸に主導的に分布する平式とは趣が異なり、奈良県辺りに類例が多い類状口縁の一群として理解すべきであろう(第47図23)。破片の大きさの大波状口縁深鉢の79は、富士山形波頂部の上面観が台形で内側の長辺が外側の短辺よりも一際高く成形されているが、こうした特徴は兵庫県下に類例が多い(第47図39)。無文上器では、内湾口縁の縦文のものと直立口縁の無地のものがあるが、有文土器同様に折り返し口縁のものはない。従って、限定的単位と言えば、折り返し口縁の欠落に代表されるように単木Ⅲ式に遡る可能性はほとんど無い



第52図 関連する縄文土器 (7~11、13、24・25は1/8、ほかは1/6)

1~6阿波走出遺跡十城1。 7~19北白川並分町遺跡。 8清水塗防。 9林ノ峰遺跡。 10星田組遺跡。 11・12平原丘遺跡。 13鷹山寺遺跡。 14佐並遺跡。 15江川上原遺跡。 16南山古岸遺跡。 17無野遺跡。 18辰し又遺跡。 20野瀬遺跡。 21上崩川村平遺跡。 22堀之越遺跡。 23七五ヶ城遺跡。 24浜川遺跡。 25上川代遺跡。 26人浦浜遺跡。 27丸成洲遺跡。

方で、磨消繩文意匠の成立しているものと伴う、磨消繩文意匠の完成直前の土器を主体とした一群、という評価になる。次に、覆上全体を含めて考えてみよう。この邊構でもっとも目立つ大波状口縁深鉢の77~79はいずれも磨消繩文意匠になっていないが、磨消繩文意匠と思われる破片も散見でき（例えば46・54）、調整は特に丁寧ではなく通常のナデであるものの中津式に含めることもできる。資料全体でも、竪穴住居1の組合せとは異なり、磨消繩文意匠の土器をやや多く含む一方で矢部奥田類型や里木Ⅲ式はほとんど全く見られない。

竪穴住居3 出上土器総量は多いけれども、出土層位をれ穴・埋上下層に限定するならば小破片のみで約30点である。その中には、折り返し口縁のものは無い一方で、同心円や丁字文を描く磨消繩文意匠の深鉢があり、147のように中津式に比定し得るものもあるが、主体は竪穴住居2と同様に磨消繩文意匠の完成直前の土器である。従って限定期の時期としては、竪穴住居2と同様とみなすべきであろう。次に覆土全体を見てみよう。20に類似した内湾口縁の深鉢はあるが、折り返し口縁のものは出土していない。また、矢部奥田類型とみなしえる128は、口縁部と脣部とを区分する降帯の縄文がそのまま磨消繩文意匠に組み込まれているが、同様の資料は近畿地方中部でも散見できる（第52図14）。隆起部が磨消繩文意匠に組み込まれている点では134も同様である。磨消繩文土器の中では、286・287の浅鉢は沈縫施文後に丁寧なナデ調整が施されている。127は、口縁の最大径部よりも上位に楕円形区画文が収まっているので、139とともに、里木Ⅲ式の範疇で捉えるよりは矢部奥田IVg類とみなすべきであろう。133のような口縁部文様のない紡錘文ないし筒円文の磨消繩文土器は、近畿西部やそれ以西に散見できる（第52図15）。155は、器形や意匠が兵庫県南山高屋遺跡の土器に近いが（第52図16）¹⁰、磨消繩文意匠はそれ以上に意図されている。大波状口縁深鉢の194は、筒状部の形状は77と同じだが、区画内の矢羽充填という点で兵庫県福野遺跡の土器（第52図17）とよく似ている¹¹。

土 墓1 墓上は2層あるが、下層から出土していることが明確なのは細片2点のみであり、埋土全体で一まとまりとして考えてみたい。315・316のような折り返し口縁のものや、319のような里木Ⅲ式は出土しているが、矢部奥田類型も磨消繩文土器も出土していない。内湾口縁の332では、縄文の充填された楕円形区画文が口縁の最大径部を跨いで描かれており、里木Ⅲ式に匹敵し得る。334は、大波状口縁の富士山形波頭部が上面鏡で隅丸長方形で内側の長辺は外面からはほとんど見ることができない。こうした特徴は、中部地方西部の神明式の透かしを多用する深鉢に由来し、中部地方西部から大阪湾岸あたりにまで広く分布するので、併行関係をつかみやすい（第52図18~20）。また、主として波状口縁を呈する深鉢の従文様である区画文の中に刺穴を充填する手法は呪煙式以来のもので、これも中部地方西部から瀬戸内地方にかけて広く認められる（第52図21・22、第47図35）。しかし、同じ大波状口縁でも口脣部の幅の狭い336・337は、時期を特定できない。

土器遺物 下部の状況から、住居状の竪穴構造物の廃絶後の覆土中にまとめて投棄された土器群と解釈できるが、掘り込み内の一括資料ではないので、一括性が劣るだろう。条痕調整を残す破片も目立つが、375は完成された磨消繩文意匠の口縁部片であり、沈縫は太く深い。370~372の磨消繩文意匠は、完成されたものではないが中津式との距離をあまり感じさせず、文様意匠で見れば、371のように区画文を受ける沈縫が丁字文を描きながら展開するものや、372のように多重の横走沈縫が丁字文を描きながら巡るものは、瀬戸内海から九州東半にかけて目立つようである（第52図23~25）。377は器形も意匠も香川県大浦浜遺跡の土器（第52図26）に近い¹²。378は、脣部文様は平式に近いが、器壁の厚さも含めて器形は60と同様である。382は器形も意匠も兵庫県見嶽岡遺跡の波状口縁深鉢

(第52図27)に類似する。358・363の無文土器は、矢部奥田類型である。

遺構群の前後関係²² 型式変化を敏感に反映するとされる口縁部の文様意匠において、磨消繩文が確立している個体を後期初頭の土器とみなすならば、竪穴住居2・3・土器溜まりと、竪穴住居1・土壙1とに二分し、前者を後期初頭の土器群としてまず認識すべきである。型式組列を比べても、折り返し口縁を含め里木Ⅲ式に該当するものが前者には見られない点、後者的人波状口縁深鉢の筒部の形状の差異、これらから、前者が後者に後続すると言える。

竪穴住居2と竪穴住居3との間に時間差を見出すことは、深鉢組成から見ても、磨消繩文土器の意匠から見ても困難である。竪穴住居3から出土した調整の丁寧なボウル形の磨消繩文浅鉢の存在も、竪穴住居2から浅鉢が出上していない故に、比較対象が無く、時間的先後関係を決める切り札ではない。なお、土器溜まりについては、無文土器に矢部奥田類型が一定量あるが、一括性に劣る出土状態なので、細かな時間差については論じずにおこう。また、竪穴住居1と土壙1との間にも時間差を指摘しがたい。内湾口縁深鉢や人波状口縁深鉢の器形や意匠には型式学的差異を見出しがたく、また、他の遺構と異なりどちらも里木Ⅲ式を伴うからである。こうして、長縄手遺跡の一括資料群は、第1期(竪穴住居1・土壙1)、第2期(竪穴住居2・3)に細分できるだろう。

4. 矢部奥田類型と中期末の地域的差異

長縄手遺跡では、矢部奥田類型があまり出土していないが、上記の成果を基に、瀬戸内を特徴づける矢部奥田類型について少し触れておこう。以下は、これまでの出土資料に対する型式学的説明であり、今後検出されるであろう遺構・括資料に適用する物差しではもちろんない。

里木Ⅲ式は、瀬戸内の里木Ⅱ式に特徴的な折り返し口縁の有文土器では、折り返しの段差上下にまたがる沈線を施文しなくなる段階と言える。その結果、視覚的に、折り返し部の段差が明瞭となる。この段差の明瞭化が、後の矢部奥田類型の基調となるが、段差上位の折り返し部は幅狭で、刺突ないしはかつて段差際に施されていた1条蛇行沈線程度の施文域しかなく、無文のことが多い。段差下の連弧文も梢円形区画文も共に、前段階と同様にキャリバ一口縁の最大径部をまたがって展開する²³。

折り返しによる段差が明瞭化した後に折り返し部が拡張する過程は容易に辿れないが、この段差が器形に対応した施文域設定に用いられると、瀬戸内特有の矢部奥田類型が成立する。口縁の内湾しない深鉢は、里木Ⅲ式でもくびれ部に界線となる沈線が巡っていたのでその施文域を疊覆するかたちとなっているが、上記の沈線の放棄に応じてか、分界は段差や刺突やその組合せによってなされる(第47図10など)。内湾口縁のものは、およそ最大径部を境に段差や列点などで施文域を界している(第47図4など)。この、器形と対応した施文域の設定によって、連弧文や梢円形区画文で口縁の最大径部をまたぐものではなくなる。こうした点から、この段階を特徴づけるのは器形に対応した施文域設定と言えるが、この新たな施文域設定方法は、里木Ⅲ式・咲烟式の広域的類似性が解体して西日本の中期末の地域的差異が顕在化する一因ともなっている。すなわち施文域を、内湾口縁深鉢では芳しい屈曲によって分界して人波状口縁深鉢を生成し非内湾口縁では隆帶や多重沈線によって分界する近畿(第52図10・22)、深鉢口縁の内湾の有無にかかわらず段差や列点によって分界する瀬戸内、非内湾口縁では単沈線が界線となり²⁴、内湾口縁では段差によって分界する九州(第52図11・12)、という地域分化が見られるのである。

矢部奥田類型で隆帶によって分界するものの出現が遅れることは²⁵、長縄手遺跡の出土状況も支持

しているが、段差による分界のものでも、中津式のように太さの割に浅い沈線で描かれる磨消繩文意匠をもつものも少なくない（第47図9・10）。あるいは、中津貝塚の中津式にも、こうした段差を維持した形状の沈線文土器が伴う可能性は充分にあるようである。このような状況に抱れば、矢部奥田類型は、分界の上下に段を生じさせる隆帶分界のものが無い場合には新旧を判断しがたい。また、この隆帶によって分界するものは、北白川C式との関係で捉えるべきでもあり¹⁰、扱いは容易でない。

5. 広域編年にもむけて

長縄手遺跡は瀬戸内の東縁に位置するが、瀬戸内には検討に耐える同時期の遺構は見当たらないので、近畿西半に位置しおよそ同時に帰属する遺構一括資料との組成の対比から、長縄手遺跡の位置づけを試みよう。比較資料はいずれも兵庫県下の、篠原A遺跡住居址、清水遺跡住居、片吹遺跡SB07・同SB08、福野遺跡1号住居の5遺構となろう¹¹。まず、後期初頭に帰属する磨消繩文土器が少數見られる点で、第2期の資料は、片吹遺跡SB07との併行関係を指摘でき、人波状口縁深鉢の類似性もこれを支持する。片吹遺跡SB07では調整の丁寧な磨消繩文浅鉢が出土していないが、長縄手遺跡竪穴住居2・3も覆土下部などの既定的単位で見てみれば同様である。第1期と対比すべき資料は、神戸市篠原A遺跡住居址資料であろう。列点充填意匠の大波状口縁深鉢、折り返し部を刻む内湾口縁深鉢、上方開放連弧文をもつ内湾口縁土器、それらはどちらからも出土している。器形上の変換点に列点を施して口縁部を画する、矢部奥田類型のような手法も共有されている。そして、この他の3遺構は、長縄手第1期と第2期との間に位置することにならざるを得ないだろう。

長縄手遺跡では第1期と第2期との間に型式学的断絶は認めがたいのに、近畿西部ではその間に相当する時期に収まる一括資料がある。この原因として、①長縄手遺跡の資料体では、内湾口縁深鉢が単純な意匠を繰り返すこと、②矢部奥田類型があまり出土しないこと、③大波状口縁深鉢とそれ以外の深鉢とで磨消繩文の成立に時間差があること、などが考えられる。①については、単純な意匠ほど磨消繩文意匠を生みやすいので仕方がないことである。属性が少ないものの宿命と言えよう。②については、矢部奥田類型では、上述のように隆帶による分界のものが後出する可能性があるので、こうした土器が磨消繩文意匠を達成していない一群と組み合はならば、長縄手遺跡1期と2期との間にそれら全体が位置づけられる可能性がある。ただし、今のところは、その変化は出土状況では確認されていないようである。③は、①に関わるが、中津末の組成の中には、磨消繩文意匠が生じにくい器種や意匠があると思われ、それらがどのくらいの期間に及んで残存形態となって磨消繩文土器に伴うかが問題となる。磨消繩文意匠の初現によって時期決定する限りは、東部瀬戸内では、大波状口縁深鉢には磨消繩文意匠が達成されないものが残るということになる。このように、②については主に分布論的な問題であるが、①・③については、型式学に大きく関わる問題である。型式学を優先して概念的な土器組成を描いているうちは、こうした問題は解消される見込みはない。

こうした様相を踏まえ、表2に、長縄手遺跡の資料体を軸にして、西日本各地の一括資料を抽出しながら広域編年を射程にして配列してみた¹²。里木III式と中津式の段階は、九州から中部地方西部まで、型式学的に非常によく似た深鉢が各地で主体的に分布しており、いわば広域的十器型圖と言える。しかし、その中にあたる時期は、特徴的深鉢のこうした広域的類似性が損なわれており、いわば地域的土器型式が各地に存在していると言える。こうした中で瀬戸内を特徴づけているのが、段差や列点によって文様帯を分界する矢部奥田類型である。

表2 中期後半から後期初頭までの一括資料等対照表

九州	東部瀬戸内	近畿西部	近畿中部	日本海岸	東海北半	伊勢湾周辺
前谷2号住居	阿津出土土器	熊野部住居	(+)	山宮後尾SK104	山手宮前SB6	(針箱)
(南宮島/平原II)	長崎手住居1・土塙1 棚原A住居	北白川追分町SB1-2 岩の鼻SK98	宮ノ脇BSB16	大里西沖住居		
(黒縦V層)	×	福野1号住居 (無塙川Ⅲ次〇北点)	浜詰住居	瑞穂SB1	(林ノ峰H層)	
浜田M区D-19	長崎手住居2・3 片吹SB07	仏並247OO	桂巻炉内	前田土器群1 (林ノ峰G層)		

注：カッコは包含層、(+)は良好な公表資料がない、×は良好な資料を未確認、網掛は長絞手遍跡との型式学的類似度。

謝 辞 この場を与えて下さりまた意見交換して下さった亀山行雄さん、しばしば深く議論していただいた職場の先輩である千葉豈さん、中部地方西部の様相について議論に応じて下さった土岐市埋蔵文化財センターの高橋健太郎さんには、特に多くの御教示を賜りました。厚く御礼申し上げます。

註

- 開地性凹地への土器の施棄は、一括性という点で疑問を残すけれども、モンテリウス以来の考古学的方法の規範に準拠してみようと思う。
淡川耕作（訳）／モンテリウス（著）1932『考古学研究法』（原著はOscar Montelius, 1903, *Die Methode. Die älteren Kulturperioden im Orient und in Europa*, Stockholm. なお、1984年に臨川閣出版より復刻）。
- 設定当初は条痕地に限定せず、地文のないものも含まれていた。
間堀忠彦・間堀薫子1971『里木貝塚』（『青版考古学研究集録』第7号）。
- 里木III式と中津式の典型的な齊齊通文土器との型式学的な差異もあってか、里木III式と中津式とのあいだに「中期最末期」を設けたり、里木III式を「とbとに時期細分したりする作業」などもあったが、いずれにせよ、少ない資料を過度に抽象化せざるを得なかつたようである。あるいは、そうした資料の少なさ故に、里木II式とは改めて分離せずに「甲木II・III式」として細分をとどまる見解もあった。
 - 高橋 薫1981『近畿・中国・四国地方』『縄文土器大成2 中別』、164～165頁。
 - 泉 扱良1982『西日本縄文土器再考－近畿地方縄文中期後半を中心に－』『考古学論考』（小林行雄編『古稀記念論文集』）、75～99頁。
 - 澤下孝信1991『土器様式伝播論考－西日本の縄文時代後期齊齊通文土器を中心にして－』『古文化試義』第25集、15～41頁。
- 高畠知功1993『矢部奥田遺跡 縄文時代の遺構と遺物』『山陽自動車道建設に伴う発掘調査6』（岡山県埋蔵文化財発掘調査報告82）157～203頁。
- 矢部奥田式の設定は以下の文献aによるが、主たる分類体系は以下の文献bに既に示されていた。
 - 矢野健一1994『北白川C式併行期の瀬戸内地方の土器』『古代古墳』第16集、1～15頁。
 - 矢野健一1993『縄文時代中期後葉の瀬戸内地方』江口昌塚11（愛媛大学法文学部考古学研究報告第2冊）157～175頁。
- 針2文献。
- 泉 扱良1988『船元・里木式土器様式』『縄文土器大成3 中崩II』、307～310頁。
- 註5の文献b。「里木II・III式」の名稱は、註3の文献cと同じだが、註5の文献bは細分指向の立場である。
- 註5の文献bが指摘している。なお、熊野部遺跡の資料については以下に掲載されている。
神崎 騎1992『熊野部遺跡』『兵庫県史考古資料編』兵庫県史編集専門委員会、125頁。
- 矢部奥田式について筆者の解釈を示せば、①出土地点差を説明する資料の少なさ、②分類の曖昧さ、③前後の時期とのつながり、という点に困難を感じる。①については既に指摘されている。②については、從属属性の扱いの疑問はさておくにしても、実際問題として、A1類とF類との違いおよびB類とD・E類との違いが判然としない他、③にも該当するが新段階のA3類と狭義の里木III式とも区別し難い。③については、中津式に關わる、太さの別に浅い弦線による肩齊齊通文手法が確立しているものが、古段階のA1・A2類にありながら（第47図9・10）、新段階の資料には見られず、中津式とのつながりを困難にしている。①～③の解消のためには、分類の再検討が必要である。

- 討が望まれよう。ここでは筆者は、狭義の里木Ⅲ式に続く中津式までの十番を矢部奥田式と呼ぶにしても、分類については註4文献におよそ倣う。そして、口縁部と胴部を段によって区分する矢部奥田IV-a～d類を、「矢部奥田類型」と呼ぶことにする。
- a 深下孝信1997「縄文中期後半の西日本における様相」『研究紀要』第1号、下関市立考古博物館、5～13頁。
- 11 下澤公明・内藤善史1988「阿津走出遺跡の調査」『本州四国連絡橋陸上ルート地図に伴う発掘調査Ⅱ』(岡山県埋蔵文化財発掘調査報告71)、221～376頁。
- 12 この資料は¹¹、地文を撫糸文のみに限定しない、いわば広義の里木Ⅲ式に相当し¹²、地文を撫糸文に限定した註2文献の里木Ⅲ式の概念とは異なる。本論では、里木Ⅲ式については、混同を避けるために撫糸地文のものに限定して用いるので、沖島岡人遺跡の資料を、敢えて「里木Ⅲ式」とは呼ばなかった。
- a 痴田光秀2003「第21次調査」『津島岡大遺跡12』(岡山大学附内遺跡発掘調査報告第17回)、95～113頁。
- b 横山信一・佐原真1960「考古学資料目録 第1部」京都大学文学部、250頁。
- 13 泉 拓良1985「中期末縄文土器の分析」『京都大学埋蔵文化財調査報告Ⅲ』、京都大学埋蔵文化財研究センター、163～181頁。
- 14 東 和幸1989「春日式土器の型式組列」『兜尻鳥考古』第23号、38～45頁。
- 15 富井 良2001「西日本縄文土器としての並木式土器の評価－阿高式・中津式との関係－」『古文化談義』第47集、1～28頁。
- 16 ただし、並木式には、内湾気味の形態はあるがキャリパー形のものはない。
- 17 下村昭文1976「馬場川遺跡発掘調査概要Ⅳ」(東大阪市埋蔵文化財包蔵地調査概要16)。
- 18 古本 寛はか1997「南山古窯跡の調査結果」『南山古窯跡 南山古窯跡』(龍野市文化財調査報告17)、37～136頁。
- 19 遠内卓・片山昭信1992「福野遺跡」『兵庫県史 考古資料編』、兵庫県史編集専門委員会、145～147頁。
- 20 大山真充・真鍋昌宏(編)1988「瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告V 大浦浜遺跡」香川県教育委員会。
- 21 松井敬代(編)1997「足場岡遺跡其の二」(竹野町文化財調査報告書第11集)、兵庫県竹野町教育委員会。
- 22 ある一括資料において、直前ないし直後の時期といふ段階づけが型式学的根拠によってのみ想定されている資料が存在する場合、①直前期と考えられているものについては、残存形態とみなしてそれ以外のものとの同時性を容易には排除しない。(②直後期と考えられているもののときは、混入と考えずに先駆的のものとみなして同時と判断する。もしも、型式学的根拠によって①と②のどちらかでも否定するとすれば、セリエーションの否定となり、編年作業として方法的に重要な存立基盤を失うことになる。一括性的の意味はその資料の発掘方法の検討によって進められるものであって、その資料の型式学的推測によって進められるものではない。
- 23 この他の特徴として、縄網部の境界に油漬文が廻りするものもまだ多く、条痕地文や地文のないものが多いが撫糸文もあることが挙げられる。矢部奥田類型の生成に大きくは関わらないので、註として述べた。
- 24 註5の文献b。
- 25 註5の文献a。
- 26 佐藤寛介2004「倉敷市中津貝塚出土の縄文土器」『研究報告 第23・24合併号』(岡山県立博物館)、1～30頁。
- 27 註5の文献b。
- 28 紙幣の都合上、これらの資料を図示できないが、以下に文献を挙げておくのでお許し願いたい。
- a 定森秀夫(編)1984「神戸市灘区 蔭原A遺跡」、古代学協会。
- b 丁葉 勝1997「縄紋土器について」『南山古窯跡 南山古窯跡』(龍野市文化財調査報告17)、147～152頁。
- c 市村高規はか1985「引吹窑跡」(龍野市文化財調査報告書第11)。
- d 註19文献。
- 29 従来の当該期の編年と比べると、この編年は極めて「延縄」的である。東海地方で見れば、神明式と坂組式と島崎Ⅲ式などについては¹³、その多くの部分が一つの時期に収められている。また、近畿地方で見れば、北山川C式の1～3期と4期との2段階区分に等しい¹⁴。各地において、型式的にはいろいろな説明ができるそれによって多くの段階が想定されているが、各地の一括資料を広域的に比較することを目的にした場合には、限定的な空間での土器変遷は役に立たないので、この程度の段階区分にならざるを得まい。
- a 増子康彦1978「縄文中期後半土器の編年－東海地方西部地域－」『古代人』第34号、5～21頁。
- b 註13文献。

なお表2に挙げた一括資料等についての文献は以下の通りである。

前谷遺跡 古永正史・中村耕治（編）1986『前谷遺跡』（松山町埋蔵文化財調査報告書1）、施設鳥取県松山町教育委員会。

阿津走出遺跡 訂11文献。

熊野町遺跡 訂9文献。

山宮佐尾遺跡 気高町教育委員会1987『逢坂地域遺跡群発掘調査報告書 一山宮阿弥陀森遺跡・山宮茶山畠遺跡・山宮御城遺跡』（気高町文化財報告書XII）、鳥取県気高町教育委員会。

山手宮前遺跡 小谷和彦（編）1997『山手宮前遺跡』（岐阜県文化財保護センター調査報告書第28集）。

針箱遺跡 姶野町教育委員会1987『針箱遺跡・下之庄東方遺跡』（姶野町埋蔵文化財調査報告書4）、三重県姶野町教育委員会。

南宮島遺跡 青崎和康1977『南宮島遺跡』、鹿児島県姶良町教育委員会。

平原Ⅱ遺跡 徳永貞解1993『平原遺跡Ⅱ』（佐賀県文化財調査報告書第120集）。

猪原A遺跡 前記註28の文献a。

北白川追分町遺跡 訂13文献。

岩の鼻遺跡 緑谷克彦1987『岩の鼻遺跡Ⅱ』福井県教育委員会。

宮ノ筋遺跡B地点 吉田英敏1991『宮ノ筋遺跡B地点』、可児市教育委員会、7~96頁。

大里西沖遺跡 伊藤裕作ほか1992『津市大里地区内遺跡群』「平成3年度農業基盤整備事業地城埋蔵文化財発掘調査報告 一第1分冊-1」（三重県埋蔵文化財調査報告99-1）、18~26頁。

黒橋貝塚 高木正文・村崎孝弘編1998『黒橋貝塚』（熊本県文化財調査報告第166集）。

福野遺跡 訂19文献。

馬場川遺跡Ⅱ次 藤井直正ほか1971『馬場川遺跡Ⅱ』（東大阪市坪塚文化財ボランティア調査報告6）。

浜詰遺跡 二浦利（編）1993『浜詰遺跡発掘調査概要』（網野町文化財調査報告第8集）、京都府網野町教育委員会。

瑞穂遺跡 岸子康眞1992『名古屋市瑞穂遺跡S B 1 の縄文中期土器 一山の神式土器の検討一』『縄文時代』第3号、155~163頁。

林ノ峰貝塚 山下勝年（編）1983『林ノ峰貝塚』（南知多町文化財調査報告書第五集）、愛知県南知多町教育委員会。

浜田遺跡 関川透（編）1994『浜田遺跡・脇ノ浦遺跡・こうしんのう2号墳』（北九州市埋蔵文化財調査報告書第142集）。

片吹遺跡 訂28の文献c。

仏並遺跡 岩崎二郎（編）1986『仏並遺跡』（大阪府埋蔵文化財協会調査報告書第5編）。

林谷遺跡 木下哲夫1995『越前 林谷遺跡』『氣屋式土器検討委員会資料』。

前田遺跡 西部良治1985『前田遺跡』、恵那市教育委員会。

なお、第52回の土器について、これまでに文献が挙がらなかった資料の出典は、以下の通りである。

星田猪遺跡 因田茂弘1965『近畿』『日本の考古学 II 縄文時代』、河出書房、193~210頁。

池田寺遺跡 武内雅人ほか（編）1986『池田寺遺跡IV』（大阪府埋蔵文化財協会調査報告書第71編）。

江口貝塚 宮本一夫（編）1994『江口貝塚』（愛媛県波方町教育委員会）。

起し又遺跡 高橋順之・田井中洋介1998『起し又遺跡発掘調査報告書II』（伊吹町文化財調査報告書第11集）、滋賀県伊吹町教育委員会。

野塚遺跡 合田栄美1989『小坂遺跡出土縄文中期土器の検討』『小阪遺跡(その6-3) 一調査の概要』、大阪文化センター、75~78頁。

上岡田村平遺跡 武藤貞昭（編）1999『上岡田村平遺跡』（岐阜県文化財保護センター調査報告書第25集）。

塚之越遺跡 佐々木勝・宮井良1998『滋賀県守山市塚之越遺跡の調査』『第44回京都縄文研究会発表資料』。

七五三ヶ浦遺跡 守田五男・八木武弘1985『七五三ヶ浦遺跡』、愛媛県波方町教育委員会。

上田代遺跡 中野和信1997『田代地区遺跡群』（えびの市埋蔵文化財調査報告書第20集）。

第3節 長縄手遺跡における栽培植物

高 橋 護

1. はじめに

調査はプラントオパール分析の手法を用いて行ったものであり、資料は竪穴住居1の炉床に遺された灰屑、竪穴住居3の炉床に遺された灰屑、竪穴住居3の壁面の焼土塊、集石出土深鉢底部の上、土器底よりの包含層を用い、比較資料として竪穴住居3のが穴の埋土、同壁面背後の地山土層を調査した。

調査の発端は、発掘調査時に、竪穴住居3の床面の上を分析してイネの機動細胞珪酸体の含まれていることを確認したことである。

この時点で、住居址の床面はほぼ掘り上げられていたので、コンタミネーションの恐れの少ない資料として上記の資料を分析したものである。

検出されるプラントオパールの概況は、メダケ属が圧倒的に多く、少量のヨシ属、ササ属などが認められる。ササ属が、繩文時代中期末の時期に付近で生育していたことには疑問があり、古い地層中から遊動したものである可能性が否定できない。ササ属、メダケ属とともに、短細胞の珪酸体がほとんど検出できないので、メダケ属についても、多くは周囲の山地からの流入である可能性がある。

メダケ属のプラントオパールの占める量は極めて大きいが、付近一帯が全て芦藪に覆われていたことを想定することはできない。量的には多くないが、全体に *Oplismenus* (チジミザサ) が含まれているので、疎林を伴う里山的な景観を呈していたものと推定される。

栽培植物のプラントオパールでは、イネが多数を占めていて、他の栽培植物は極めて少数である。

抽出されたプラントオパールに後世のイネのものが混入しているか否かを検証するために、先端部形態の分類を試みた¹。その結果は付表1の通りであった。

付表1

		A	B1	B2	B3	B計	C1	C2	C3	C計	D	E	合計	C/B
住居3 竪十	J121	4	28	13	8	49	22	14	4	40	7	0	100	0.815327
土器底あり1	J461	2	25	28	12	65	2	39	15	56	1	0	124	0.861338
土器底あり2	J158	9	15	13	2	30	3	13	10	26	3	1	69	0.866667
土器底あり4	J460	7	41	42	20	103	19	48	27	94	4	0	208	0.912621

その結果からみて各地点間の資料に差はなく、ほぼ同一の集団に帰属するものと考えられる。

同様に、各時代にわたる資料から抽出されたイネ機動細胞プラントオパールの先端部形態分類による統計を表にしたものが、付表2である。

この表にみると、C/Bの数値は、基本的に年代順に並ぶ傾向を示している。これは、栽培地の耕作上や遺跡内の遺物包含層を資料としたものであり、それぞれの時代に、その遺跡で栽培されたイネに由来するプラントオパールの平均化された数値であると考えられるものである。遺跡内の土壤単位の資料では異なった結果を示す例が知られている。

このB・C比を現生の栽培品種で調査すると、品種によってかなりに顕著な相違を示す。純系分離が原始的な段階にあると考えられる縄文時代、弥生時代のイネでは、同系統のイネの中にもある程度の違いが存在していたと推測されるが、その他にモミガラの上表皮組織からみると、初めから複数の品種群の存在していたことが推定されるので、それらの品種群の組み合わせ比率の違いによっても違いを生じることが考えられる。

長縄手遺跡で検出されたイネのプラントオパールは縄文時代中期末の時代に相応しいC/B比を示すものであり、栽培種以外のものについても、新しい外来の雜草と考えられるものを含んでいないので、これらの結果から、後世のプラントオパールの混人は基本的にはないものと言ってよい。

付表2

時代	時期	遺跡名	A	B1	B2	B3	B4	C1	C2	C3	C4	D	E	合計	C/B
縄文	中期前半	如意塚	10	32	11	4	47	13	13	9	36	1	4	38	0.7660
	中期終末	長崎手子	23	111	161	43	255	46	120	61	227	15	1	521	0.8902
	後期中葉	高湯子	4	20	18	6	44	6	21	14	41	3	3	95	0.9316
	弥生以前	北方地蔵	1	22	16	11	49	18	18	12	48	2	2	102	0.9798
弥生	初期	同上	3	22	10	9	43	17	23	11	31	2	3	102	1.2439
	初期	日伊稚媛御場	5	25	15	7	47	18	27	10	55	2	0	109	1.1702
	前期	北方稻田	1	14	21	9	44	10	29	19	58	1	0	104	1.3182
	前期	北方地蔵	4	18	12	3	35	20	24	18	62	1	2	102	1.8788
中期後半	中期後半	北方稻田	0	9	11	15	35	11	32	27	70	3	1	109	2.0000
	中期後半	北方地蔵	5	28	9	6	43	20	21	19	60	0	3	111	1.3963
	後期	北方稻田	0	9	16	4	29	7	37	26	70	0	3	102	2.4138
	後期	野元島	4	17	24	7	48	9	30	14	53	0	5	110	1.1042
歴史	12C	政所	9	26	41	19	86	22	54	35	111	3	2	211	1.2907
	明治前半	岡大樹内	3	14	8	13	25	18	34	16	68	2	5	113	1.9429
	明治前半	岡大樹内	6	28	43	21	95	12	89	42	112	8	0	231	1.9947
	昭和3千年	瀬心園内	0	19	10	4	33	13	42	33	88	3	0	124	2.6667
現代	現代+古墳	西高砂地内	1	2	21	10	33	7	60	16	83	6	1	124	2.5152

2. 検出された栽培植物の概要

整穴住居1の炉床の灰層

Oryza sativa L. (イネ) 図版I-1~3 図版III-15 図版IV-4

Panicum miliaceum L. (キビ) 図版I-4~6

量的には多くないが、イネを主体とした栽培植物が検出される。図版I-7~8は *Setaria* (エノコログサ属)型のものである。この他に、*Saccharum* (サトウキビ属)ではないかとみられる資料があるが同定できていない。

整穴住居3の炉床の灰層

O. sativa (イネ) 図版I-9~12 図版III-11~16 図版IV-3

P. miliaceum (キビ) 図版I-13

Sorghum bicolor (L.) Moench (モロコシ) 図版I-14~17

Triticum (コムギ属) 図版I-18

集石出土深鉢底部の土

O. sativa (イネ) 図版I-19~25 図版III-17

P. miliaceum (キビ) 図版I-26

イネのプラントオパールの量は炉床の灰層よりは多いが、包含層中央部に比較するとかなり少ない。

整穴住居3の壁面焼土

O. sativa (イネ) 図版II-1~10

S. bicolor (モロコシ) 図版II-11~12

Triticum (コムギ属) 図版II-13・14

土器窓まり包含層

O. sativa (イネ) 図版II-15・26 図版III-12・13・14・18・19・20・21・22 図版IV-1・2・5

P. miliaceum (キビ) 図版III-8

S. bicolor (モロコシ) 図版II-27・31

Triticum (コムギ属) 図版III-1~7

図版III-9・10はキビ族型である。

全体を通じて注目されるのは、Triticum (コムギ属) の穎が検出されることである。この穎の長細胞の示す形態は、在来型の日本のコムギとよく一致している。したがって普通コムギ Triticum aestivum L. であると考えてよいだろう。図版I-7~8、III-9・10はキビ族型の中でも、Setaria (エノコログサ属) と考えられるものである。機動細胞の大きさからみて Setaria italica Beauv (アワ) と考えられるが、わずかに分散して検出されるに止まっているので正確に同定できない。

3. 長縄手遺跡で検出されるイネモミガラの形態について

この遺跡で検出されたイネのモミガラの上表皮の組織には、特異な組織が発達している。

イネのモミの上表皮細胞組織は、「稲学大成」などで一般に紹介されているものは正しくない。イネのモミについても、他の表皮細胞と同様に基本的に縦列する長細胞によって構成されているものであり、多くの品種では長細胞の間に点々と bristle (剛毛) が挟まれている。

この長細胞の珪酸化したものが参考資料の図版IV-6に示すものである。並列する長細胞との間で腕を組み合う部分が強固であり、柱状の高まりを示しているため、縦列する細胞列のような外観を呈するに過ぎない。

上表皮の組織を構成するのは、一般的にはこのような形態の長細胞であるが、部分的に Setaria (エノコログサ属) の穎に生じる細胞と同様に上端に一つの大きな papilla (乳頭状突起) を持つ細胞がみられることがある。(図版IV-7・8) この細胞が珪酸化すると図版IV-9のような石英細胞が生じる。

この形態の細胞では、しばしば大きな先頭部の中に二個の小さい papilla を生じたものがみられ、(図版IV-10) また、更に中央から左右に分割された形態を見ることができる。(図版IV-11・12) こうした変異の延長線上に図版IV-13にみるような三角形を呈する大形の papilla を先端の腕に持つ長細胞がある。

長細胞の先端に單一の大きな papilla を持つ長細胞の形態は、通常のモミの上表皮組織では基部に近い部位など、細胞が大きく発達しない場所にみられるものであるが、一部の品種では中央の大きく発達した部位の細胞にも出現する。

長縄手遺跡で検出されたモミガラ断片には、大きく発達した部位で、この特異な形態を示すものがかなりの比率で含まれている。図版III-11~14がそれであり、図版IIIの15・16は左右に分割された形態をもつものである。

Setariaの穎に似た形態の大きく発達した表皮細胞は、総社市南溝手遺跡の縄文時代後期のもの、岡山市上伊福九坪遺跡の弥生時代中期土壙、井原市高越遺跡の弥生時代後期土壙などでも検出されている他、岡山市津島の明治期の水田耕土に多数含まれている。

これらはいずれも図版III-17~22に示した tubercle (結節) が二つの大形の papilla (乳頭状突起)

で構成される形態の組織に伴って検出されている。

これと別に、図版IV-1～4に示す papilla の基部があまり大きく発達しない組織をもつものが相当数検出される。この形態の組織では表皮細胞上面の細胞壁での珪酸の沈着が、他の形態の組織に比較して弱い。

この形態の細胞組織を示すものは、アジアイネの中に広く出現するものであり、日本でも古くから明治期まで一貫して検出される形態である。

この両者は、現代アジアイネの類の組織に照合して異なった品種群に属するものと考えられる。この他に図版IV-5に示すものは、papilla が小さく tubercle が円錐丘を呈するものである。この形態のものも、縄文時代、弥生時代を通じて極微量に検出される。

4. 長縄手遺跡における農耕

この遺跡では、遺跡内の各所からイネのプラントオパールが検出され、包含層中には g 当たり 100 個強が検出される。これは縄文時代の遺跡内の検出状況としては異例のものであるが、それは西日本の縄文時代遺跡としては例外と言える程に良好に保存されていた竖穴住居址に示されるように、遺跡中心部の保存の良さが大きく影響しているものと考えられる。

検出された栽培植物の様子からみると、イネを中心として、モロコシ、コムギが栽培されており、キビも少量栽培されていたと考えられる。コムギの検出数は数字的には多くないが、検出されるのは穎の長細胞のみであるから、相対的に他の機動細胞プラントオパールに比較して少数になることは避けられない。

そのことを考慮するならば、この遺跡ではイネを主体として、コムギとモロコシを加えた作物が主力作物として栽培されていたものと考えられる。明瞭なヒエ属植物が検出できないことからみて、分散して僅かに検出されているアリ型の機動細胞プラントオパールは、ほぼアリであると考えてよいだろう。アワの機動細胞プラントオパール牛生量が極めて少ないと考慮すると、モロコシなどと同程度にアワの栽培が行われていた可能性がある。

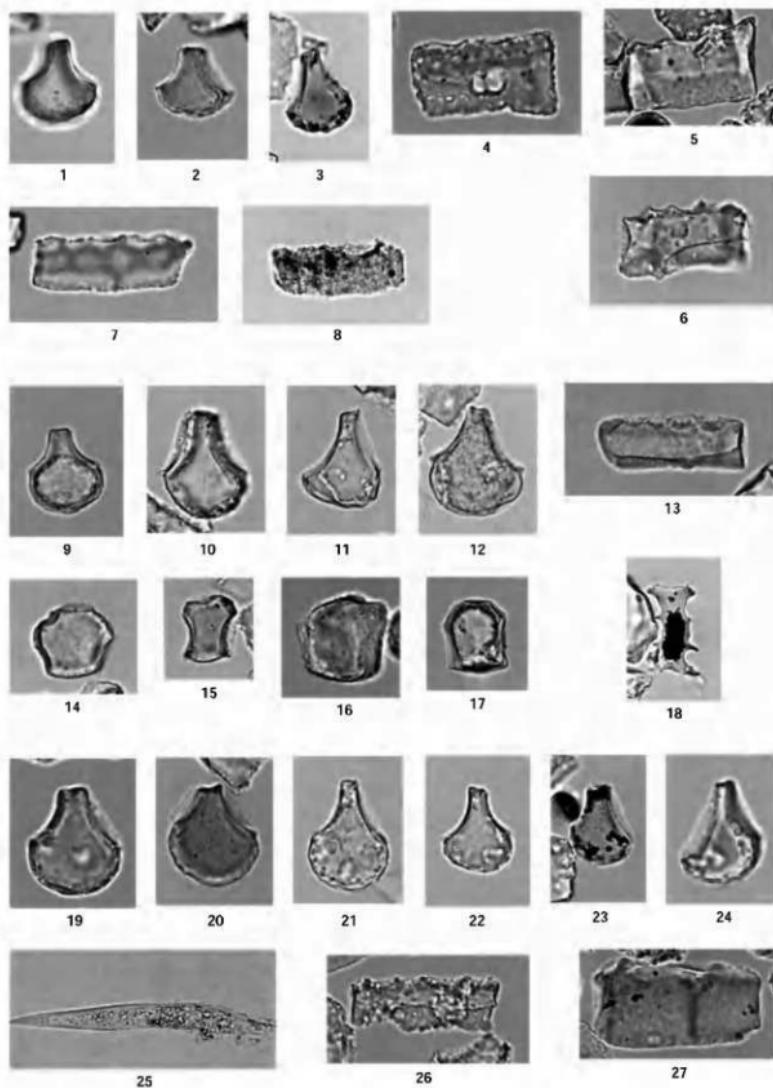
キビを除いて、イネ、コムギ、モロコシ、アワなどは、何れも付近の山地を利用した燒畑で栽培していたものと推定される。キビや蔬菜類の一部は、集落近辺の畑で栽培しているものと推測されるが、イヌビエなど雑草性の植物が全く検出されないことは、広い常畠の存在していなかったことを示すものである。

他の遺跡ではよく検出されるにもかかわらず、この遺跡では検出されなかった栽培植物としては、ヒエとジュズダマ属がある。図版I-27のものはヒエ-イヌビエ型のものと見られるが、全体を通じてこれ1点であり、確定できない。

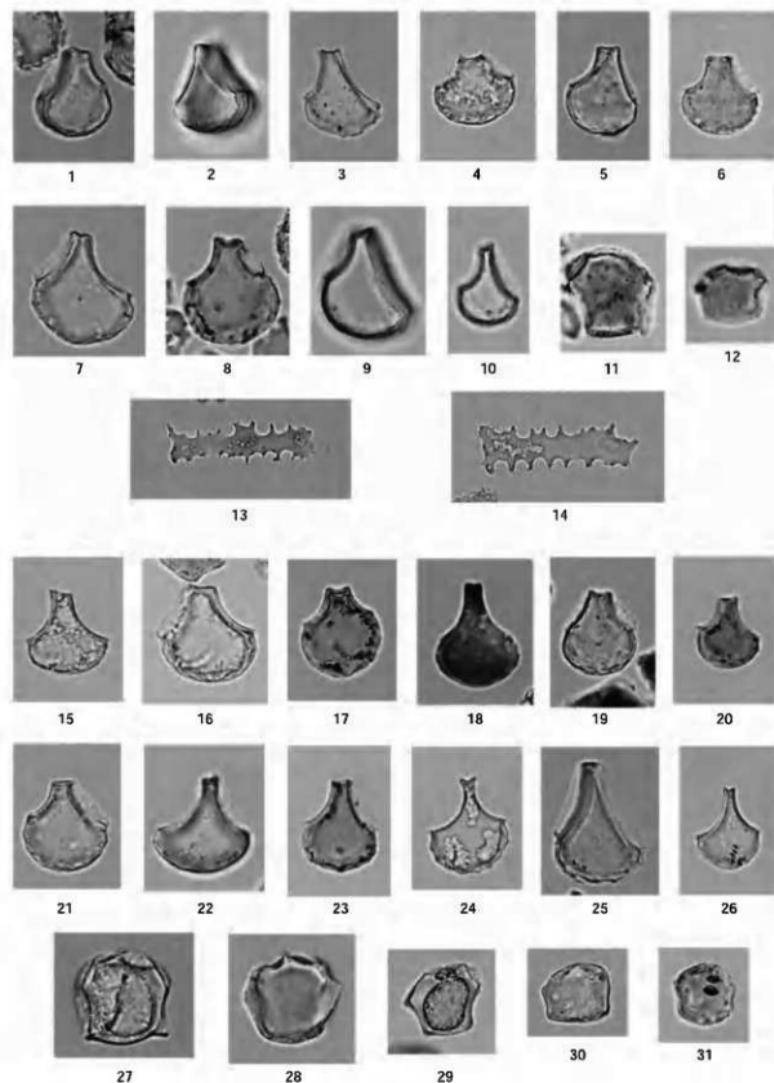
これは遺跡の周辺の地形が痩せ尾根が多く、平地を持たない湾奥の山麓に位置しているという特殊な環境から、利用可能な山地に制約があり、その狭隘さが栽培する作物の多様性に制約を加えていたことが考えられる。そのことから生産性の高いイネ、モロコシに栽培が集中し、併せてモロコシ等の裏作として活用できるコムギが栽培されていたものと考えられるのではなかろうか。

註

1. 高橋 譲「縄文時代中期稻作の探求」『堅田一尚先生古希記念論文集』真陽社 1997
2. 松尾孝徳『稻学大成』第一巻 1990

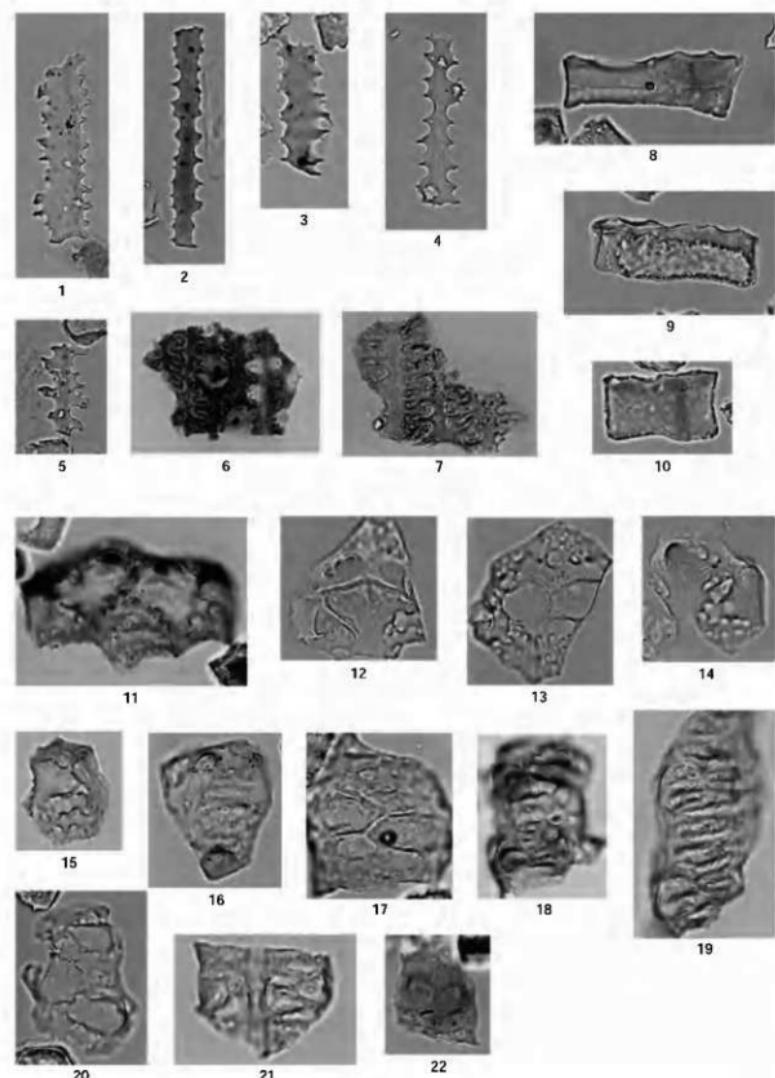
図版I 長縄手遺跡の植物珪酸体 ($\times 400$)

1～8 穴穴住居1号床底部の灰層出土
9～18 穴穴住居3号床底部の灰層出土
19～27 集石遺構川土深鉢底の土層出土



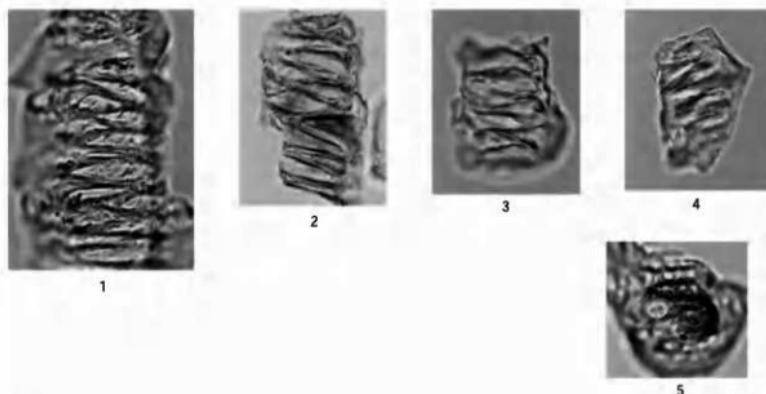
図版II 長縄手遺跡の植物珪酸体 ($\times 400$)

1~14 空穴住居3壁面焼土中出土 15~22 十湖洞より包含層出土.

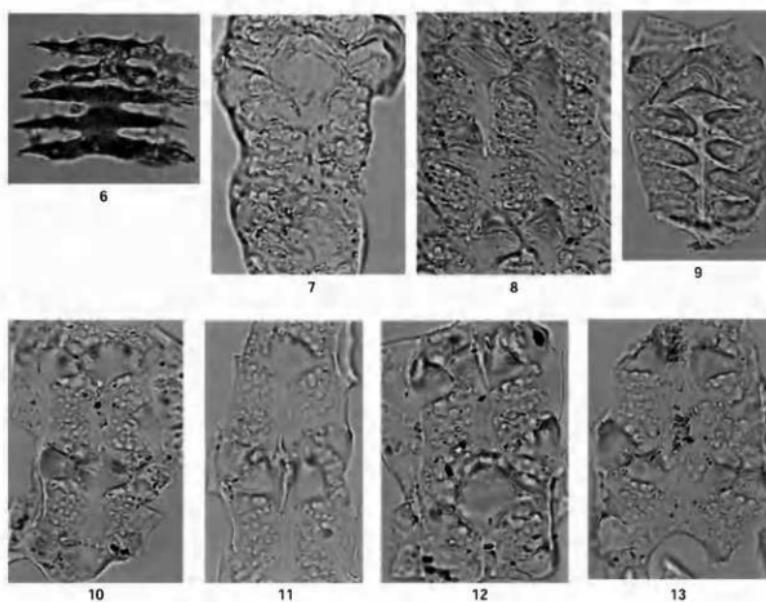


図版III 長縄手遺跡の植物珪酸体とイネ糊断片 ($\times 400$)

1~10 十瀬洞より包含層出土植物珪酸体 11~22 長縄手遺跡のイネ糊断片



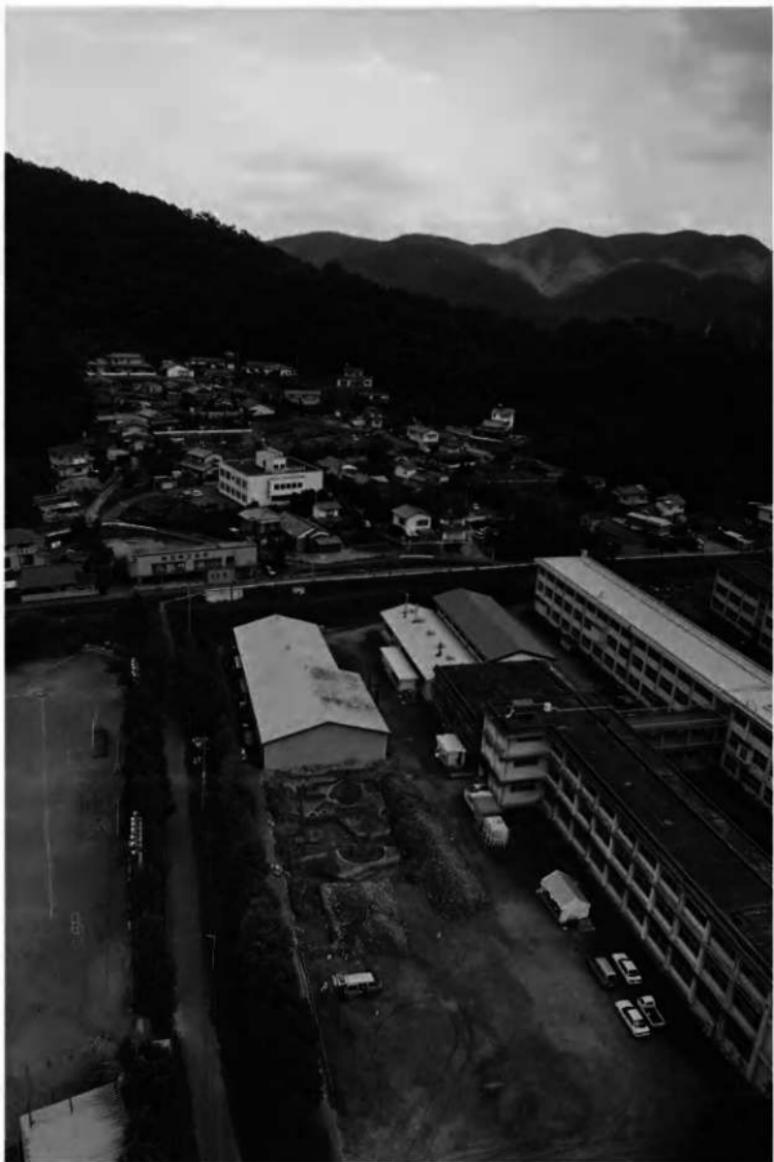
参考資料



図版IV 長縄手遺跡ほかのイネ糊殻断片 ($\times 400$)

1～5 長縄手遺跡のイネ糊殻断片

6～13 上伊福九坪遺跡NO.11土壙（弥生時代中期）のイネ糊殻断片



S A 区遠景（西上空から）

図版 2



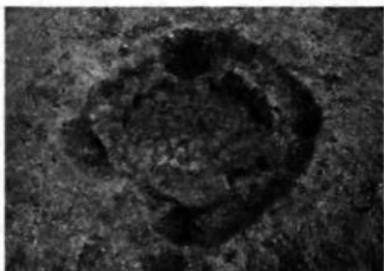
S A 区遺構全景（南から）



堅穴住居 1（南から）



竪穴住居2（北東から）



竪穴住居2炉（西から）



竪穴住居2遺物出土状況（北西から）



竪穴住居2柱穴（南西から）



竪穴住居2出土遺物（南から）

図版 4



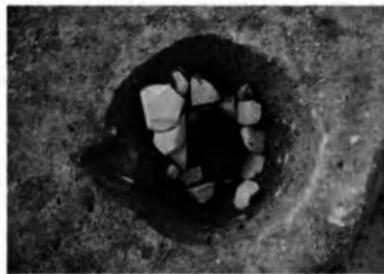
豊穴住居 3 (東から)



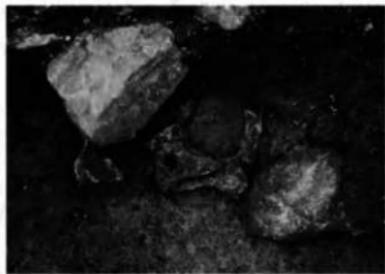
豊穴住居 3 炉 (東から)



豊穴住居 3 土層断面 (南東から)

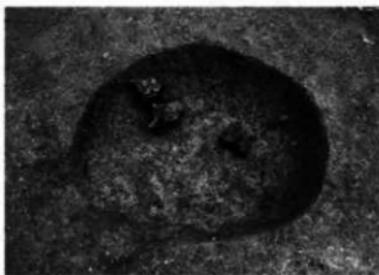


豊穴住居 3 柱穴 (南東から)

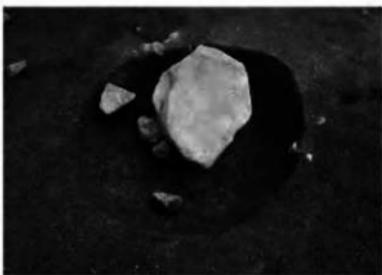


豊穴住居 3 遺物出土状況 (東から)

図版5



土壌4（北西から）



土壌5（北から）



集石遺構検出状況（南東から）

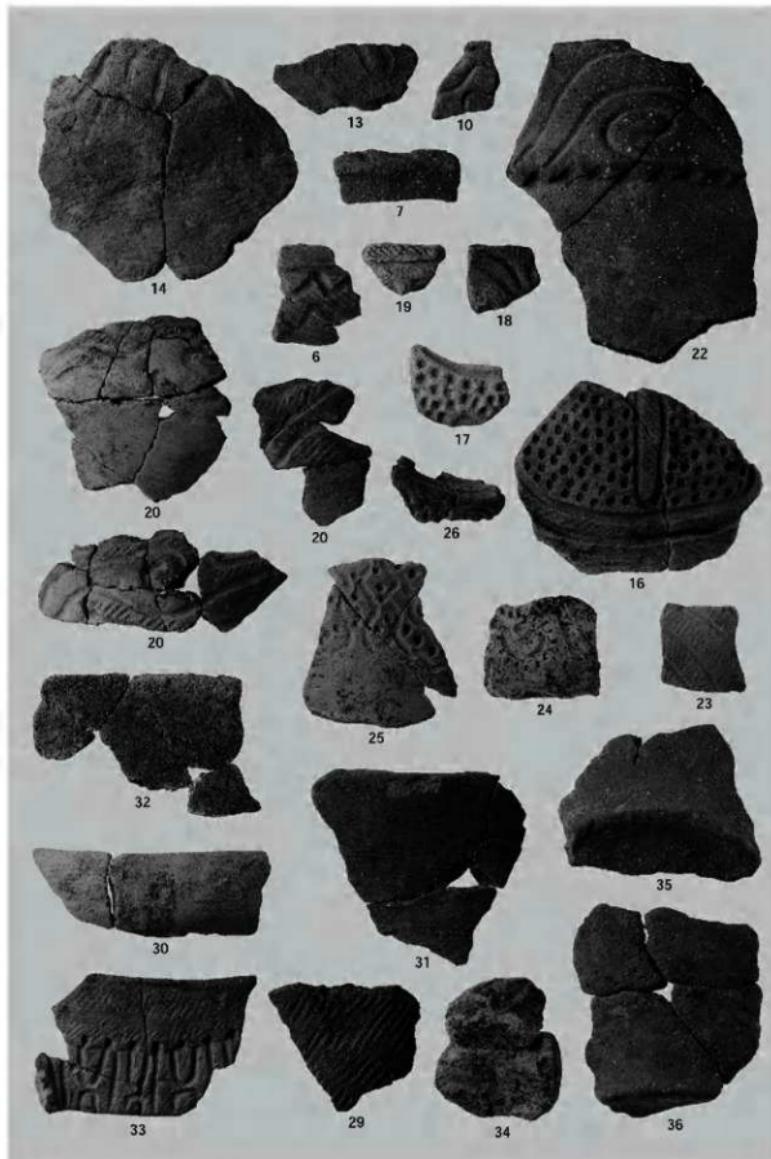


土器溜まり遺物出土状況（北西から）



土器溜まり（南から）

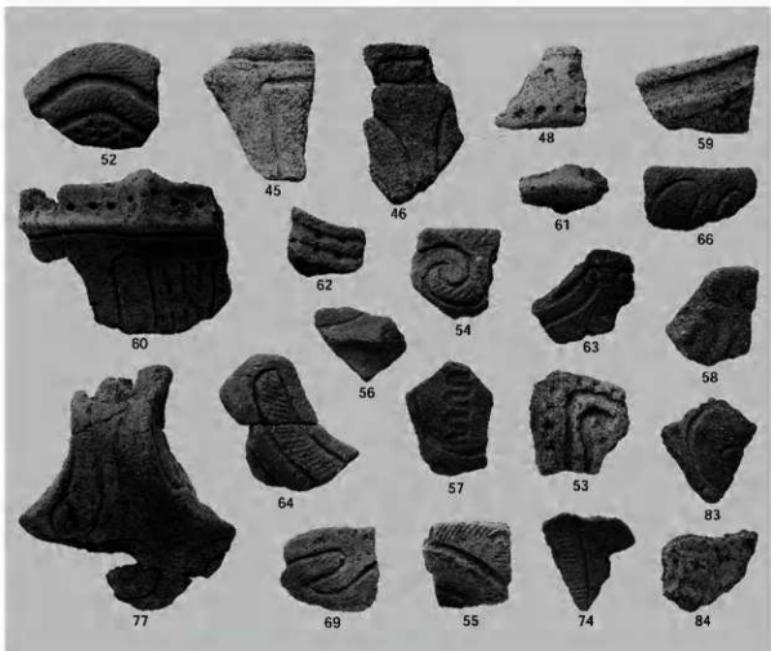
图版 6



竖穴住居 1 出土土器 1

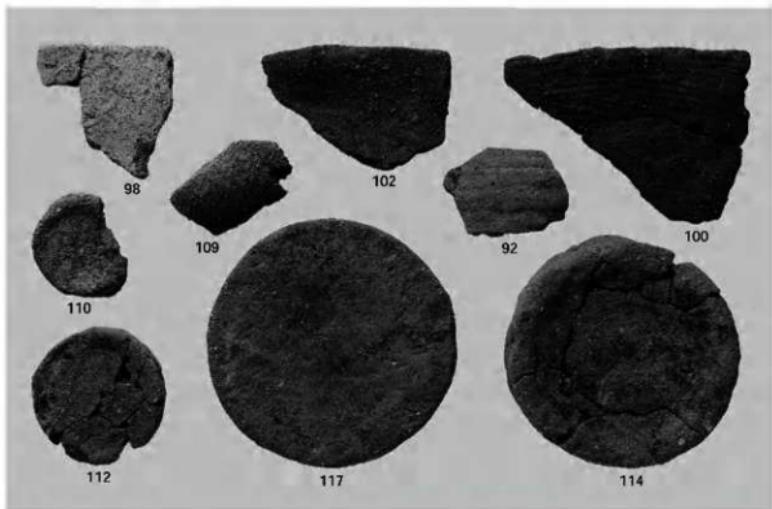


竪穴住居 1 出土土器 2

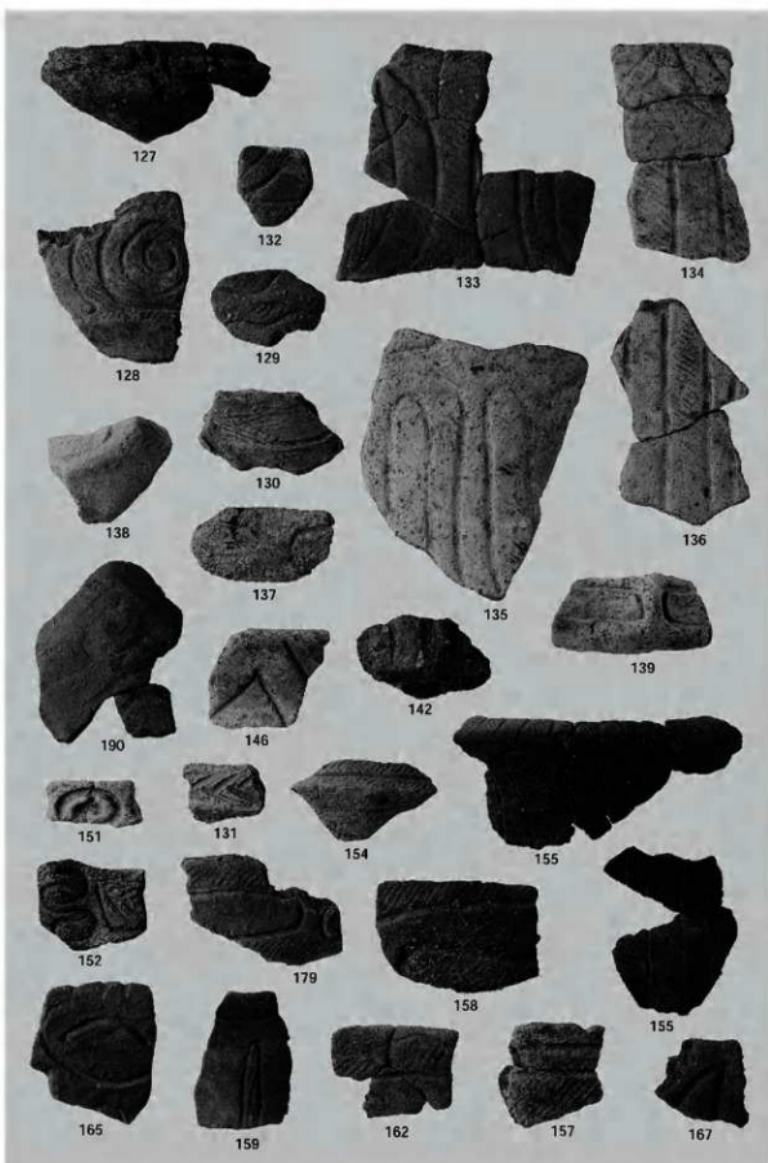


竪穴住居 2 出土土器 1

图版 8

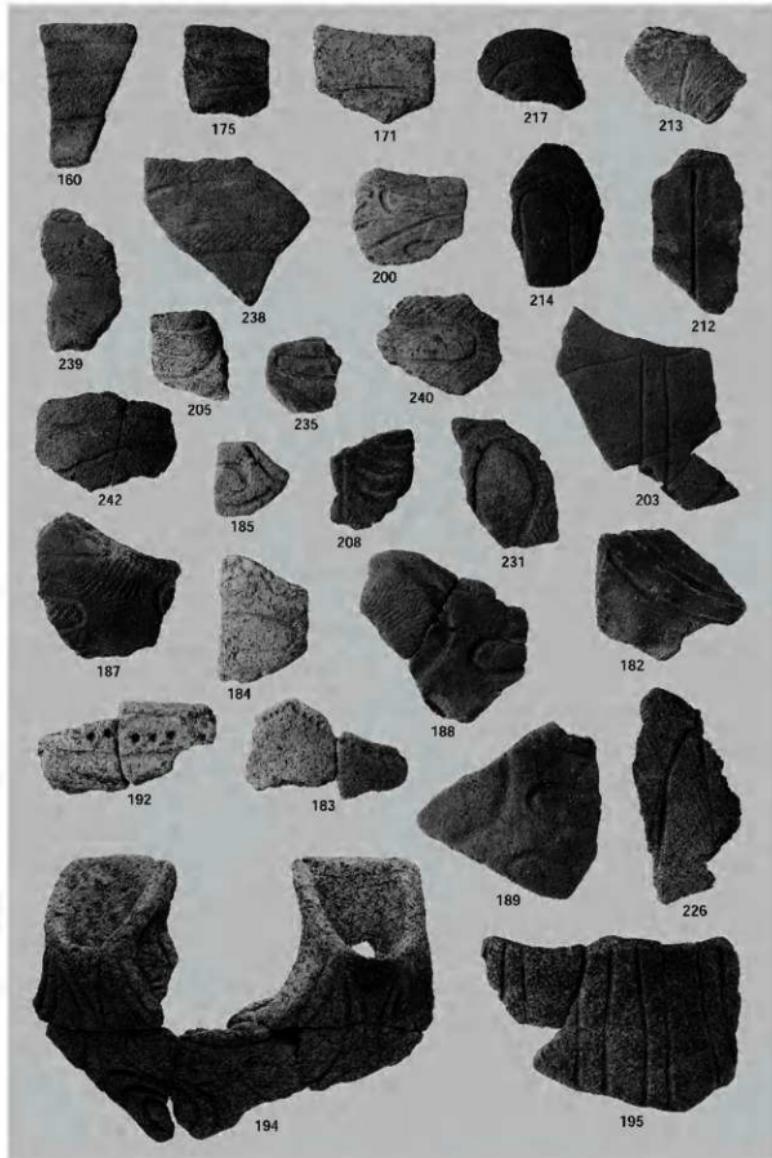


竖穴住居 2 出土土器 2

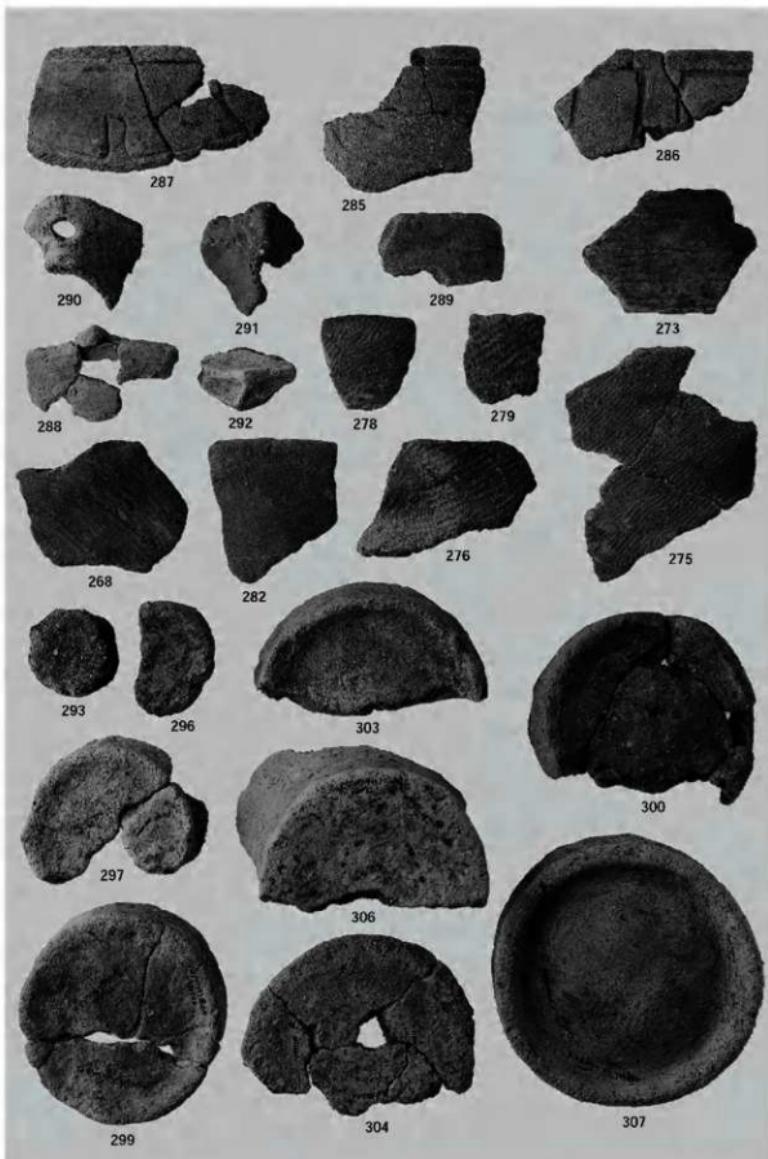


竪穴住居 3 出土土器 1

图版10



竖穴住居3出土土器2

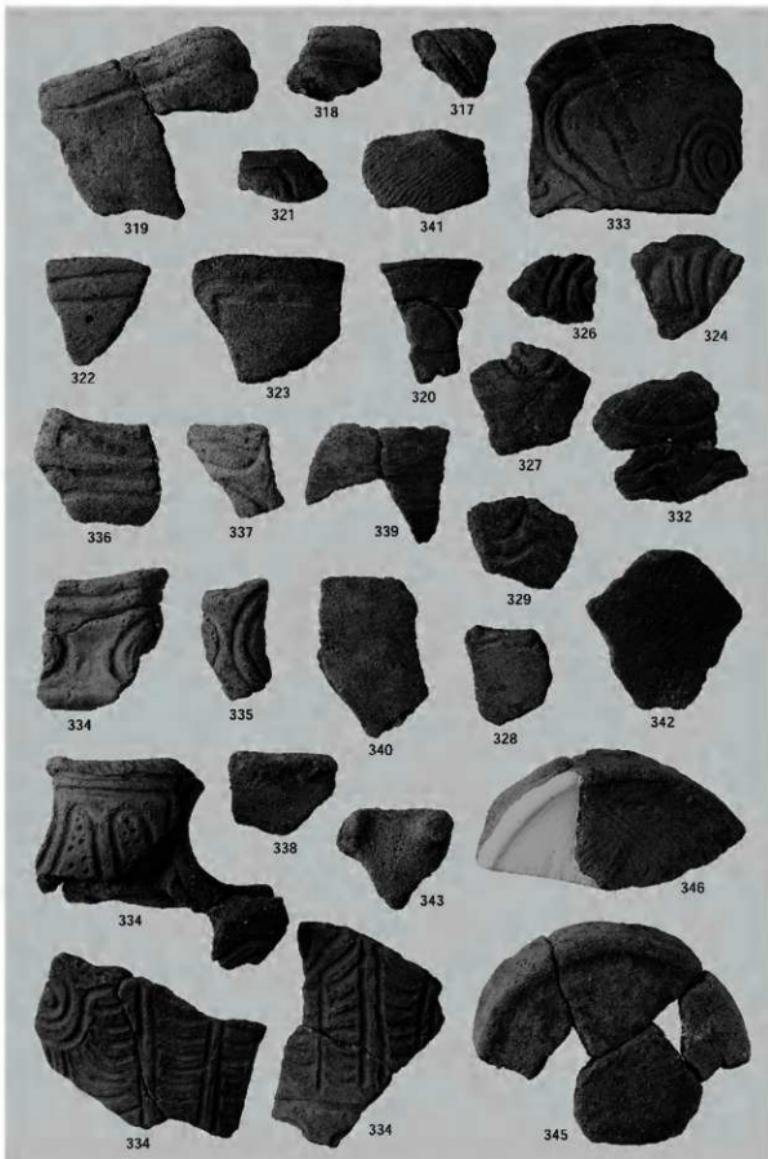


竪穴住居3出土土器3

図版12

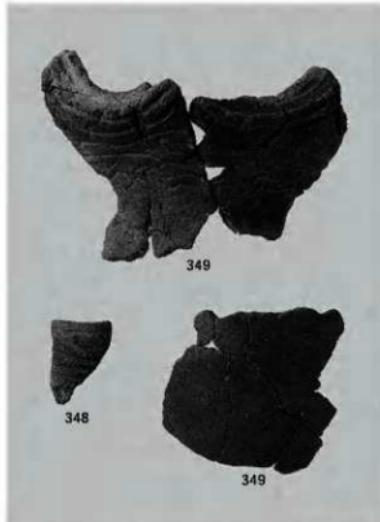


土器満まり出土土器



土壙 1 出土土器

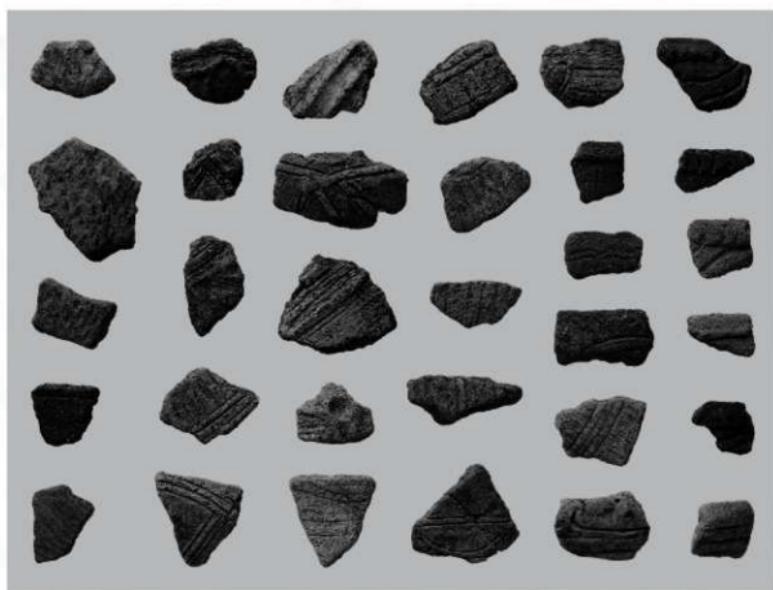
図版14



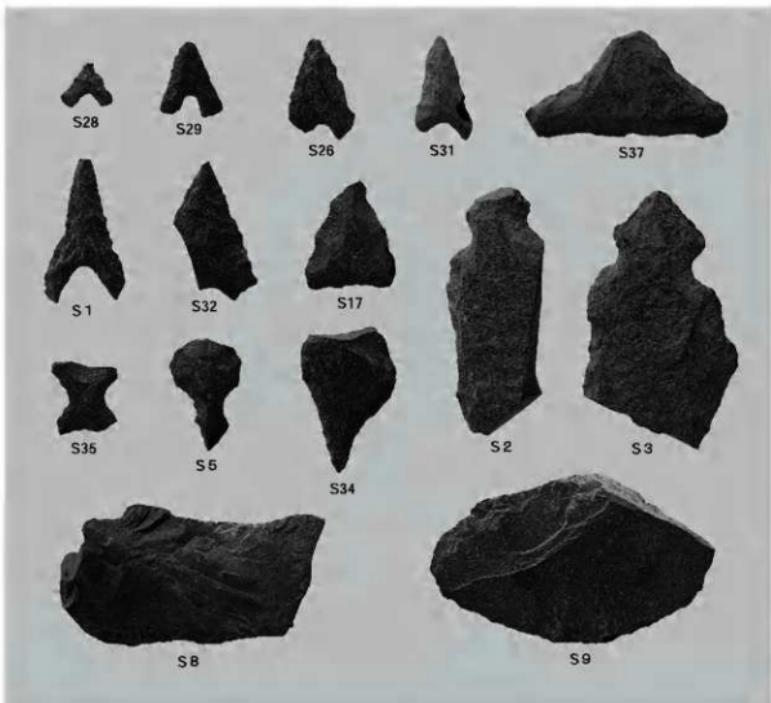
土壙4出土土器



集石遺構出土土器



その他の縄文土器

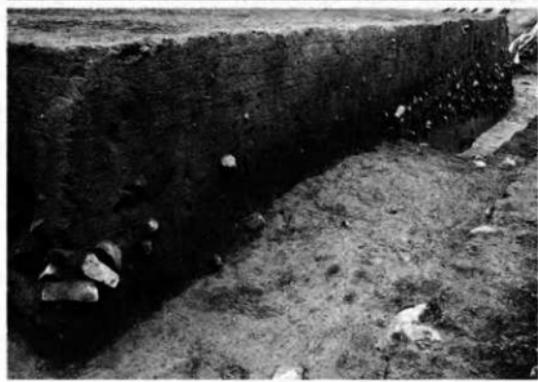


出土石器

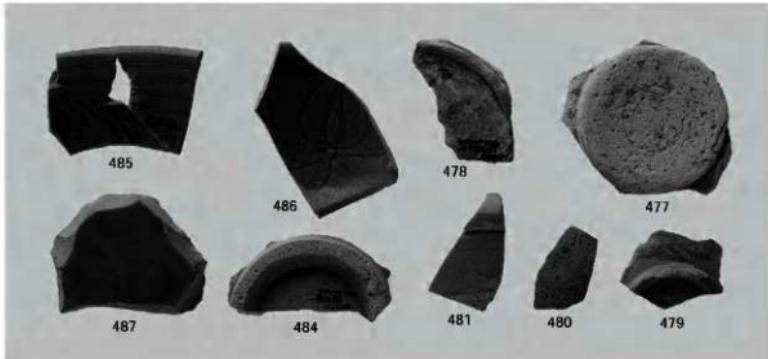
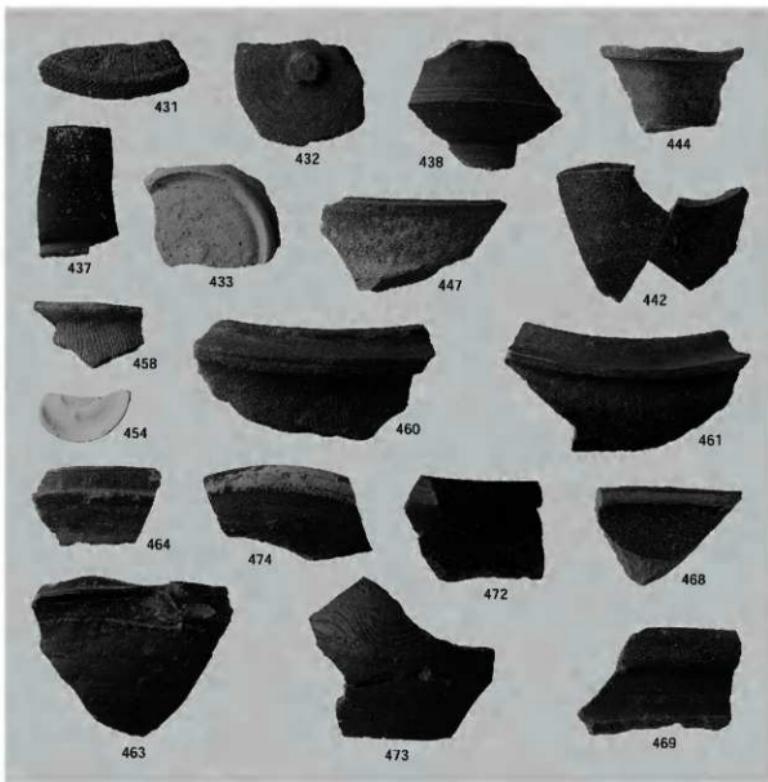
図版16



T A 区全景（南から）



T A 区土層断面（南西から）



T A区出土遺物

報告書抄録

ふりがな	ながわていさき						
書名	長縄手遺跡						
副書名	県立備前高等学校産業教育施設改築・体育館整備に伴う発掘調査						
巻次							
シリーズ名	岡山県埋蔵文化財発掘調査報告						
シリーズ番号	189						
編著者名	龟山行雄・福田正謙・福木 明・高橋 譲・富井 真						
編集機関	岡山県古代吉備文化財センター						
所在地	〒701-0136 岡山市西花伝1325-3 TEL 086-293-3211						
発行機関	岡山県教育委員会						
所在地	〒700-8570 岡山市内山下2-4-6 TEL 086-224-2111						
発行年月日	2005年2月28日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所収遺跡名	コード 主用 主用 地 主用 地 主用 地	北緯 主用 地 主用 地 主用 地	東経 主用 地 主用 地 主用 地	調査期間 主用 地 主用 地 主用 地	調査面積 m ² 主用 地 主用 地 主用 地	調査原因 主用 地 主用 地 主用 地
ながわていさき 長縄手遺跡	ながわていさき 長縄手遺跡	33201	34° 248	133° 39' 56' 37"	1993. 9. 6 ~10. 30 1999. 10. 4 ~18 2002. 10. 1 ~2003. 3. 31	260 470 2,680	備前高等 学校改築
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
長縄手遺跡	集落	縄文時代	竪穴住居・集石遺構・土城・土器澄まり	縄文土器・石器	植物珪酸体(イネ・コムギ・キビ)		
		奈良時代	井戸	土器(十脚器・須恵器)			
		平安~江戸時代	包含層	土器(土師器・黒色土器・瓦器)、綠釉陶器 灰釉陶器、磁器(青磁・白磁)、炻器(備前・東播系)、土製品(瓦・土鏡)、金属製品(銛・燈管)			

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 189

長縄手遺跡

県立備前高等学校産業教育施設
改築・体育館整備に伴う発掘調査

平成17年2月10日 印刷

平成17年2月28日 発行

編 集 岡山県古代吉備文化財センター
岡山市西花屋1325-3

発 行 岡山県教育委員会
岡山市内山下2-4-6

印 刷 旭総合印刷株式会社
岡山市内山下2-10-3



本印刷は吉備文化財センターの発行です。